Historical Studies of Socialist System

ISSN 2432-8774

社会主義体制史研究

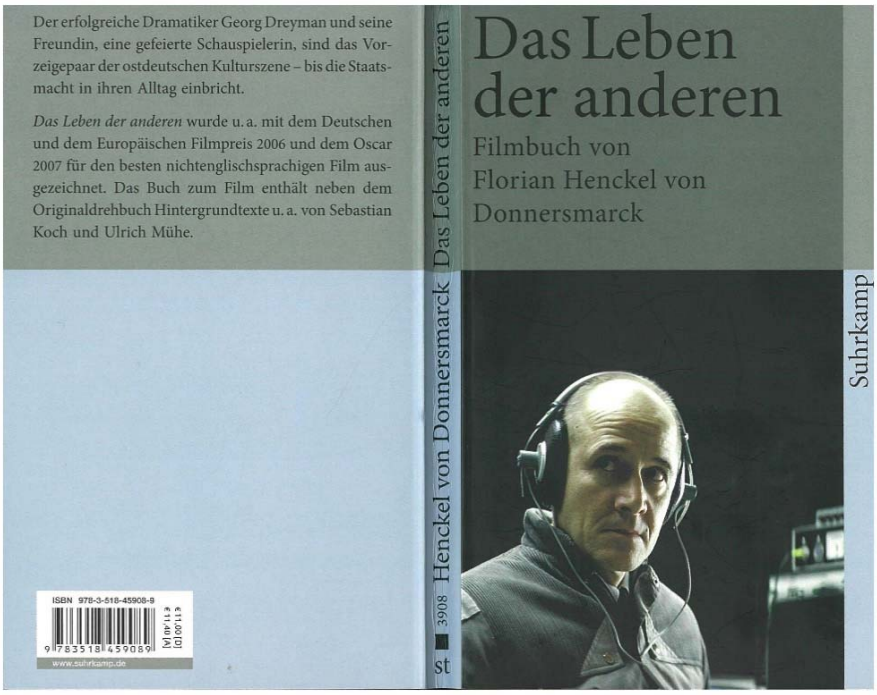
No.14（December 2020）

脚本に見るドイツ映画「善き人のためのソナタ」（原題「他人の生活」）（1）宣伝と実際

青木國彦（東北大学名誉教授）

"Das Leben der anderen" im Filmbuch von F. H. von Donnersmarck (1) Werbung und Wirklichkeit

Kunihiko AOKI (Professor emer., Dr., Tohoku University)

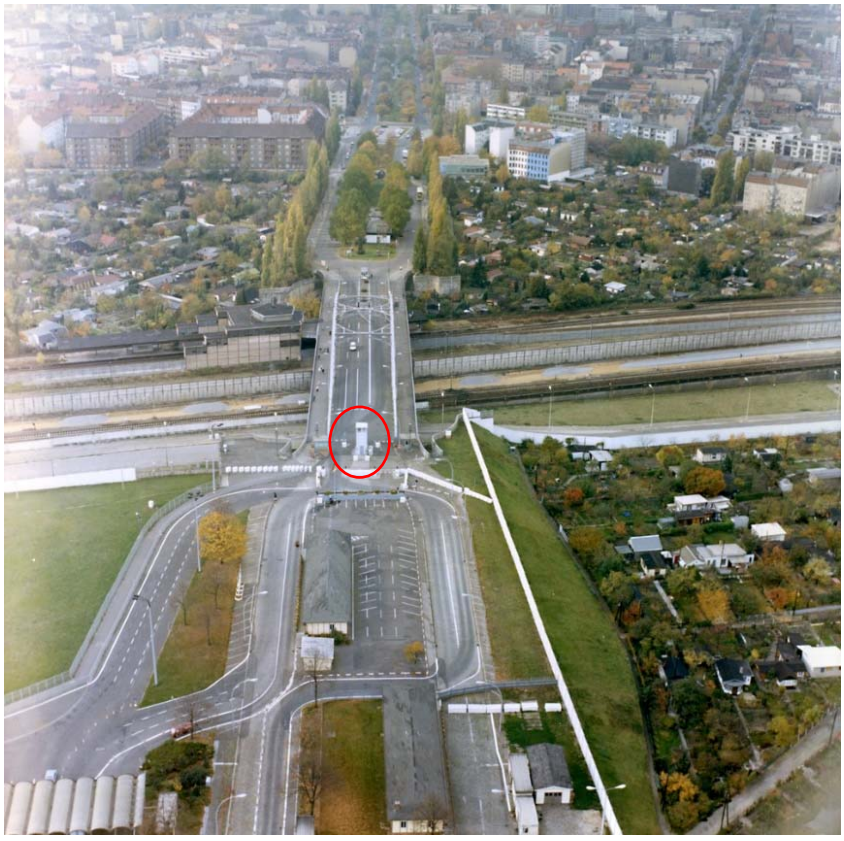


社会主義体制史研究会
The Japan Collegium for Historical Studies of Socialist System

『社会主義体制史研究』(Historical Studies of Socialist System)
ISSN 2432-8774
Website: http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/hsss.htm
下記の旧 URL からも自動切換(リダイレクト)
旧 URL: http://www.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/hsss.htm
(違いは www の次に「2」の有無のみ)
publisher: 社会主義体制史研究会
(The Japan Collegium for Historical Studies of Socialist System)
size: A4
mail to aoki_econ3tohoku.4.5 (3=@ 4=ac 5=jp)
不定期刊(原稿があり次第発行)、文字数制限なし、無料のオンライン・ジャーナルです。
旧社会主義諸国(共産圏)の歴史(「革命」前・体制転換後を含む)と、社会主義や共産主義の思想・理論を対象に批判的検証を志しています。投稿歓迎。

表紙の写真 "Das Leben der anderen: Filmbuch" 表紙
Donnersmarck, Florian Henckel von (2007, Suhrkamp)

下図 壁を最初に開いたボルンホルマー通り国境検問所航空写真(本号20ページ関連)
(Luftbild der Grenzübergangsstelle Bornholmer Straße)



(注)東独末期にシュタジ撮影。上(北)半分が西ベルリンのヴェディング区(左斜め上の枠外にテーゲル空港)。下(南)半分の過半が検問所(西ベルリン市民限定、赤枠が監視塔、その真下(真南)の2つの建物で出入国手続き)、監視塔の上(北)にベーゼ橋(Bösebrücke)があり、その下を壁と電車線路(Sバーン、2路線のうち上側は西ベルリン路線)が横切る。(出所)BStU, MfS, HA I, Fo, Nr. 365, Bild 24

社会主義体制史研究* 14 号（2020 年 12 月） Historical Studies of Socialist System*, No.14 (Dec. 2020)

脚本に見るドイツ映画「善き人のためのソナタ」（原題「他人の生活」）(1)：宣伝と実際

青木國彦**

"Das Leben der anderen" im Filmbuch von F. H. von Donnersmarck (1)：Werbung und Wirklichkeit

Kunihiko AOKI**

目次

1. はじめに 1
2. 宣伝と異なるストーリー展開 3
3. 大尉ヴィースラーのシュタジ法科大学講義：尋問方法 5
4. 劇場 1：同僚アンディ（ロロフ）の窮地とクリスタの魅力 6
5. 劇場 2：頑固なヴィースラー 7
6. 劇場 3：ヘムプフの陰謀に応じてグルビッツ豹変 7
7. 批判するヴィースラーにグルビッツは売春婦を提供 8
8. ヴィースラーの素性露見と「他人の生活」覗き見趣味 9
9. ドライマン宅盗聴・監視器設置とリムジンのクリスタ発見 9
10. ドライマン誕生日パーティー：失意のイェルスカ 10
11. ヘムプフのクリスタとのスキャンダル発覚 11
12. ヴィースラーがドライマンに「むごい真実」を見せる 12
13. ヴィースマン宅：売春婦来訪と続「他人の生活」覗き見 13
14. イェルスカ自殺と「善き人のソナタ」 13
15. クリスタのドライマン批判とヴィースラーのクリスタ説得：二人が改心する 14
16. イェルスカ追悼の闘いへ：まず盗聴有無を試す 16
17. シュピーゲル誌ヘッセンシュタインとの寄稿相談 17
18. シュピーゲル誌匿名記事騒動勃発 19
19. ヘムプフの復讐：クリスタの別件逮捕と告白 20
20. ヴィースラーの正体に驚き、クリスタが自白 22
21. ヴィースラーの証拠隠しにもかかわらずクリスタ自殺 23
22. 左遷とゴルバチョフの書記長就任、4 年後の壁開放 24
22a. 作者のクリスタ逮捕日時混乱とゴルバチョフの書記長就任報道日の誤り 25
23. 壁開放 2 年後にドライマンが自宅全室盗聴を知る 25
24. ドライマンが「守護天使」を知り、ひっそり暮らすヴィースラーへの感謝の小説『善き人のソナタ』を出版 26
（補注）a シュタジ法科大学／b シュタジの「軍旗宣誓」と標語「党の盾と剣」／c 小型タイプライター製造の東独国営グロマ社 28
略語・引用文献 30
『社会主義体制史研究』既刊一覧 31

図 1 宣伝と真逆に、「シュタジの悪人」ヴィースラーが女優クリスタを、彼女が恋人・劇作家ドライマンを反権力に

（注）ドライマンがイェルスカ追悼に「この曲」=ソナタ熱情を弾く。このあと二人は改心して政権追随をやめるが…。（出所）©邦画『善き人のためのソナタ』DVD（Wiedemann & Berg Filmproduktion）（以下「邦画 DVD」と略）。字幕は連続 2 場面から合成。

1. はじめに[1]

日本では「善き人のためのソナタ」というロマンチックな題名で公開されたドイツ映画の原題は「他人の生活」（Das Leben der Anderen（脚本では anderen）、2006 年公開）という覗き見のようなタイトルであった。以下「他人の生活」とする。脚本作者兼監督がドナースマーク（Florian Henckel von Donnersmarck）で、以下作者と呼ぶ。

この映画は、初めてのシュタジ（東独秘密警察）の本格描写として欧米諸国で 2007 年オスカーなど各種の賞を受賞し、大成功であった。宣伝によればこの映画の主題は、主人公であるシュタジの悪人・第 XX/7 部[2]大尉ヴィースラーが盗聴相手（ドライマンとクリスタ）の言動に感動して改心することであり、それが東独の作家・俳優・演出家・ジャーナリストの、体制側や西独マスコミとの関係の中に描かれる。

だが宣伝とは逆に、盗聴される二人こそが改心し、改心によって初めて政権追随をやめ、「互いに幸せ」になる。この映画の優れた点は、二人のように反社会主義ではないが批判精神のある文化人の苦悩の描写にこそある。

またこの映画はシュタジの描写にも問題が多いが、史実に基づくと作者と配給会社が言い、公的連邦施設である連邦政治教育センター（bpb）がそれを認めて上映版を「映画教育」（Filmbildung）のためのパンフシリーズ（Filmheft）に取り上げ（bpb 2006）、歴史の政治教育素材と認めた[3]。

---

* in: http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/hsss.htm

** 東北大学名誉教授。Prof. emer., Dr., Tohoku University
mail to: aoki_econ3tohoku.4.5 (3=@, 4=ac, 5=jp)

[1] …は原文による省略ないし口ごもり、〔〕内は青木の記入、…は青木による省略。「字幕」は邦画による。以下に紹介する映画内の会話は脚本に拠り、必要に応じて上映版との異同を記す。

[2] 「第 XX/7 部」はシュタジ用語では Hauptabteilung XX/7、略して HA XX/7 であり、そのまま直訳すれば「局 XX-7」となるが、意味は「第 XX 局の第 7 部）」である。第 XX/7 部は県支部との「ライン XX/7」を 1969 年に形成した。ラインは通常は局のみが形成するので、青木（2020a）は同部が「第 XX/7 局」に昇格したとみなした（但し第 XX 局より低位）が、実際は部のまま例外的にラインを形成したので、第 XX/7 部に訂正する。その担当は文化とマスコミであった。第 XX 局は「国家機構、ブロック政党、教会、文化、政治的地下活動」と包括的に管轄し 9 つの部ほかから成る国内治安の元締めであった（Auerbach 2008）。

[3] 教育目的の設問もあり、第 1 問は、最初のシーンでシュタジの何を知ったか、映画のどの人物がシュタジを代表しているか、グルビッツとヴィースラーの職務はどう違うか、である。合計 24 問もあり、第 1 問のように各問がさらに枝分かれする（bpb 2006:13）。

表 1 登場人物（姓五十音順、太字が中心人物、ハウザーおじとヘッセンシュタイン以外は東独市民。()内は俳優）

イェルスカ、アルバート	Albert Jerska (Volkmar Kleinert)	ドライマンが敬愛する演出家。ドライマンに「善き人のソナタ」（邦画では「善き人のためのソナタ」）を贈る。7 年来の演出家としての職業禁止に苦悩し、脚本では 1984 年 12 月 4 日、上映版では翌年 1 月 5 日に首吊り自殺。シュタジの OV「ジムシ」（Engerling）の対象。
ヴァルナー、カール	Karl Wallner (Matthias Brenner)	パウル・ハウザーの友人。
ヴィースラー、ゲルト	Gerd Wiesler (Ulrich Mühe)	主役：シュタジ第 XX/7 部大尉。党（SED）とシュタジの理念を信じる几帳面なシュタジ。文化相と上司第 XX/7 部長の堕落に怒り。略称「HGW」。
ヴェンツケ・ファルケナウ、**アンディ**	Andi Wenzke-Falkenau (Jens Wassermann)	ヴィースラーのシュタジ同僚、パウル・ハウザーに対する OV 担当だが、うまくいかず左遷の危機。別名「ロロフ」（Rolf）。
グルビッツ、アントン	Anton Grubitz (Ulrich Tukur)	シュタジ本部第 XX/7 部長・中佐・同法科大学教授。手段を選ばない出世主義者。当時の実際の第 XX/7 部長ブロシェ（Karl Brosche）も中佐。
シュヴァルバー、エゴン	Egon Schwalber (Hubertus Hartmann)	ドライマン作の映画内演劇「愛の諸相」の演出家。シュタジの密告者（IM=非公式協力者）「ラインハルト」（Max Reinhardt）でもある。
シュティグラー、アクセル	Axel Stigler (Hinnerk Schönemann)	シュタジ少尉。ホーネッカー風刺小話をシュタジ食堂で話題にしたためグルビッツに郵便開封係へ左遷され、のちにヴィースラーもそこに左遷。
ジーラント、**クリスタ**・マリア	Christa-Maria Sieland (Martina Gedeck)	女優、ドライマンと同棲、上記演劇の主役、一時ヘムプフに「身を売る」が、ヴィースラーの説得で関係を断つ。ヘムプフが彼女の覚醒剤入手先を突き止めてシュタジに逮捕させ、グルビッツが彼女をドライマンに対する IM に仕立て、最後はトラックに飛び込み自殺する。別名「CMS」。
ドライマン、ゲオルク	Georg Dreyman (Sebastian Koch)	劇作家、シュタジの OV「ラツロ」（Lazlo、邦画ではラズロ）の対象。国家賞受賞、ホーネッカー夫人・国民教育相マーゴットの友人という設定。ヴィースローは初対面の際に彼を「国家の敵」と同様の「横柄なタイプ」と見なす。ラツロはドライマンの別名でもある。
ノヴァック	Nowack (Thomas Arnold)	ヘムプフの助手兼運転手。クリスタの覚醒剤入手先を突き止める。〔単なる運転手ではなく、その行動・目つきはたぶん元シュタジ。〕
ハウザー、パウル	Paul Hauser (Hans-Uwe Bauer)	ドライマンの友人。元は演劇担当、今は農業担当に替えられた反体制的ジャーナリスト。OV 対象者だが、「抜け目のない奴」（グルビッツ）で有罪を免れている。フランクの甥。本文では単にハウザーと記載
ハウザー（おじ）、フランク	Frank Hauser (Paul Fassnacht)	パウルのおじ、西ベルリンからメルツェデスで毎週パウルを訪問。ドライマン宅の盗聴有無を試する芝居に協力。本文では「ハウザーおじ」と記載。
ヘッセンシュタイン、グレゴール	Gregor Hessenstein (Herbert Knaup)	西独週刊誌シュピーゲル編集委員。ハウザーがドライマンに紹介。ドライマンの寄稿がシュタジにばれないよう小型タイプライターを提供。
ヘムプフ、ブルノ	Bruno Hempf (Thomas Thieme)	文化相、かつてシュタジ幹部として演劇分野の浄化に功績。クリスタに横恋慕し、恋敵ドライマン宅の監視、自分から離れたクリスタの処分をグルビッツに命令。
ボールを持った少年	氏名不詳 (Paul Maximilian Schüller)	この少年に「シュターージか」と聞かれたヴィースラーはむっとして父親の名を知ろうとするが、思いとどまり、少年に「悪い男じゃない」と言われる。
マイネケ夫人	Frau Meineke (Marie Gruber)	ドライマンの隣室の未亡人。ドライマンの留守宅を出入りするシュタジ集団を目撃するが、脅されて沈黙。沈黙の礼にシュタジがサボテンを贈る。
ライエ、**ウド**	Udo Leye (Charly Hübner)	曹長（邦画では軍曹）、ヴィースラーと 12 時間交替の盗聴勤務。こだわりのない若者。映画ではそうした若いシュタジが何人も登場。

（注）OV は本来は容疑が明白な者に対するシュタジの「作戦事案」。シュタジは準軍事組織であり、秘書など以外の職員は軍同様の階級区分があった。（出所）脚本（Donnersmarck 2007: 9-161）と上映版から抜粋し、青木が加筆。

ドキュメンタリータッチのフィクションと言われれば、面白く楽しむことができる。しかしこの邦画を見た知人も「インパクトがあった。事実に基づいているとばかり思っていた」と言う。ましてや政治教育素材であれば史実との整合度、真実度が問われねばならない。実際には従来の指摘以上に史実に即さない事柄が少なくない。

また肯定・否定いずれの評価でもシュタジの悪人ヴィースラーの「善き人」への改心の物語という宣伝が受け入れられ、肯定派は「シュタジにもその実例がある」と言い、否定派は「そんなシュタジはいない」と反発する。

しかし宣伝に囚われず映画の中身を見ると、ヴィースラーは非人間的尋問の達人（悪人）であると同時に、東独の国是としての社会主義・共産主義への信奉を最初から最後まで貫き、改心すること（体制批判への転身）はない。

こういうシュタジ将校の設定は、たとえ実例が不明でも、荒唐無稽ではない。マルクス主義の理想主義的側面に共感しつつ実情に悩んだ東独党員は少なくないからである。

そこで**本稿は主として**、誰がどのように改心するのかに特に留意しつつ、映画のストーリーを説明する(**表 1** に登場人物リスト)。**同時に**、シュタジについての史実との相違、ストーリー展開の混乱ないし矛盾、その他の細部の問題点を指摘する。東独の国章もストーリー展開に重要なゴルバチョフ書記長就任報道の日付も間違うなど、時代考証のずさんさも指摘する。

時代考証の問題についての諸議論の紹介や字数を要するテーマは次稿とする。

本稿は主として脚本によりつつ上映版も参照する。この映画の理解には脚本(Donnersmarck 2007:9-161)によって書きや上映版での大幅カット部分を知ることが必要である。他方、上映版には脚本からの変更があり、また映像が脚本の意図を理解させてくれる。

この映画の撮影フィルムはかなりカットした最初の編集版でさえ 3 時間の長さであった。上映版は 2 時間 17 分だから、さらに 1/4 近くがカットされた(Donnersmarck 2007:7)。そのため例えば、模範作家ドライマンの監視をヴィースラーが突然言い出す(4・5 節)理由が理解不能になった。

また脚本には、撮影現場でのアドリブや経費削減のための変更などもあった(同前)。例えばドライマンが演出家イェルスカ追悼記事の西独マスコミへの投稿をハウザーらに相談する場面は、脚本ではベルリン近郊の湖のボートの上であるが、撮影はパンコウ公園ソ連兵追悼碑での散歩になった(16 節)。コスト削減のためだろう。

Donnersmarck(2007)の大部分は脚本であるが、この映画の着想や構成、成果、ヴィースラー役の俳優ミューエへの興味深いインタビューや時代考証担当ヴィルケ(Manfred Wilke、当時ベルリン自由大学 SED 国家研究合同ランクヴィッツ部長)の解説ほかが含まれる。

ミューエへのインタビューは当初、彼の元妻・女優グレルマン(Jenny Gröllmann)がシュタジに協力した密告者(略称 IM)だったと告発した。しかし元妻がそうではないとして裁判に訴え、彼と出版社が敗訴し、当該部分が削除された(私の手元には削除版のみ)。次稿で扱いたい。

以下、**第 2 節**では宣伝の内容と問題点を指摘した上で、私が理解するあらすじを記し、**第 3〜24 節**では目次にある場面ごとの内容を、解説や問題点の指摘をしつつ、紹介する。その際、会話もト書きも網羅ではなく、主要部分の抜粋ないし要約である。末尾に**補注**を加える。

脚本の訳は邦画の字幕と異なる部分もある。字幕は全体としては優れたもので、特に感心したところも何ヵ所かあるが、明らかに誤訳だと思うところもある。

2. 宣伝と異なるストーリー展開

邦画題名「善き人のためのソナタ」は元来はドライマンが演奏する曲の名「Die Sonate vom guten Menschen」であり、以下では直訳して「善き人のソナタ」と呼ぶ。

「善き人のソナタ」を聞くと悪人でいられない(**図 1**)、それが作者のモチーフであり(14 節; Donnersmarck 2007:169f.)、宣伝文句(下記)でもある。イェルスカがドライマンにこの曲のスコアを贈り、体制転換後のドライマンの小説の題名にもなる。中身はベートーベンのソナタ「熱情」である。作者も宣伝も殆どの批評も、シュタジの悪人ヴィースラーはドライマンが弾くこの曲や彼とクリスタらの会話の盗聴によって「善き人」に改心すると主張ないし解釈する。

時代考証担当ヴィルケは、「善き人のソナタ」を「ロシアの作曲家ショスタコーヴィチの心の中の楽曲」だと言い、この曲が、シュタジの「チェキスト的連帯意識によって閉ざされていた感情を解き放ち、ヴィースラーを改心に導く」と言う(Donnersmarck 2007:7,213,209)[4]。

とんでもない。ヴィースラーは社会主義・共産主義信奉と彼なりの道徳観を終始貫き改心しない。彼は社会主義の敵にはチェキスト(超法規措置を辞さないソ連由来の秘密警察職員)であって民主的自由主義とは無縁だが、上司や権力者の腐敗も許せない正義漢でもあり、この曲を聴く前から同情・愛情などの感情も「閉ざされて」いない(4 節以下の下線の一部はこれらの感情に特に関連する)。

映画の冒頭(3 節)以外のストーリーを動かすのは彼の道徳観や同情・愛情である。クリスタの批判がドライマンを改心させ、ヴィースラーがその道徳観と同情・愛情によってクリスタを改心させる(15 節)。「善き人のソナタ」は制作意図と異なりイェルスカ追悼の曲にすぎない(14 節)。

すでに閉館した「シネマライズ」(東京)のアーカイブに、この映画の受賞歴などとともに「作品概要」が載っている[5]:

> 「1984 年、東西冷戦下の東ベルリン。壁の向こうで、何が起こっていたのか?ようやく明かされた“監視国家”の驚くべき真実—。壁崩壊直前の東ベルリン。
>
> 盗聴器から聴こえてきたのは、自由な思想、交わされる愛、そして美しいソナタ…。それを聴いたとき彼は、生きる歓びにうち震えたー。この曲を本気で聴いた者は、悪人になれないー。
>
> 国家保安省(シュタージ)局員のヴィースラーは、劇作家のドライマンと舞台女優である恋人のクリスタが反体制的であるという証拠をつかむよう命じられる。成功すれば出世が待っていた。
>
> しかし予期していなかったのは、彼らの世界に近づくことで監視する側である自分自身が変えられてしまうということだった。国家を信じ忠実に仕えてきたヴィースラーだったが、盗聴器を通して知る、自由、愛、音楽、文学に影響を受け、いつの間にか今まで知ることのなかった新しい人生に目覚めていく。
>
> ふたりの男女を通じて、あの壁の向こう側へと世界が開かれていくのだった…」。(下線は青木。)

キネマ旬報の解説[6]も、ヘムプフを国家保安相と誤記しつつ、「1984 年、国家を信じ忠実に仕えてきた共産圏の役人が、盗聴器を通して自由、愛、音楽、文学に影響を受け、いつの間にか今まで知ることのなかった新しい人生に目覚めていく」と言う。これらには共通のフレーズもあるから、おそらく配給会社からの情報に基づく記述だろう。

---

[4] Donnersmarck(2007:2)の映画紹介は、「東独文化シーンの看板ペア」たるドライマンとクリスタを強調し、ヘムプフの横恋慕によるシュタジ投入を担わされたヴィースラーがペアに魅了されるとのみ記す。彼は実際にはペアではなくクリスタに魅了される。

[5] http://www.cinemarise.com/theater/archives/films/2007005.html

[6] www.kinenote.com/main/public/cinema/detail.aspx?cinema_id=37909

全体像を紹介すべき ja.wikipedia の「善き人のためのソナタ」[7]にある「ストーリー」紹介も、表現は異なるが、上記 2 つの記事同様の趣旨である[8]。

ドイツの配給会社のプレス向けパンフ（Buena 2007）の「あらずじ」もほぼ同様の内容である：

> シュタジ中佐グルビッツが「出世を期待」して、路線に忠実な同大尉ヴィースラーにドライマンらの監視を命じるが、ヴィースラーは監視相手の「世界」、すなわち「愛、文学、自由な考えと語らい」を知ることによって「彼自身の存在のみすぼらしさを意識」する。
>
> しかし「体制」を阻止できず、二人の「愛を奈落に引きずり込み」、自身も左遷されるが、壁開放後「別の世界が始まる」。

これらはドライマンとクリスタの苦悩とその克服（=改心）を無視するが、それこそが優れた描写であり、感動の源泉である。彼らの改心にヴィースラーの遠慮気味のクリスタ愛が寄与する。他方ヴィースラーには改心の場面はどこにもなく、彼が壁開放によってハッピーになるわけでもない。

ヴィースラーが二人の影響で改心したのなら、ドライマンはどうせ有罪だと突き放し、クリスタだけを救おうとする（20 節）ことが理解され得ない。彼は、ドライマンがハウザーらとともに彼を騙した（13 節）ことを知っているのだから、ドライマンへの同情心は強くない。

作者や配給会社の宣伝に囚われなければ、上映版でも脚本でも「目覚めて」改心するのはヴィースラーではなくドライマンとクリスタであること、加えて、この二人の愛も当初は、体制順応への相互非難が示すように、うわべであり、ヴィースラーのクリスタ説得によって初めて二人は真の愛に到る（15 節）ことが分る。但し悲劇に終わる（21 節）

「あの壁の向こう側」のヴィースラーは社会の片隅でつつましい生活を送り、わずかにドライマンの感謝の言葉に名誉回復を感じるだけという悲哀に満ちている。そこでの彼とドライマンには後者が恩人である前者に話しかけることをためらうほどの格差があることが浮かび上がる。

大尉ヴィースラーは最初から最後まで、東独の国是としての社会主義を信奉し、さらに、近い将来の共産主義到来も信じ（7 節）、その実現を目指す「党」（=東独支配党 SED）と「党の盾と剣」（=シュタジ）の一員であることを誇りにする。それゆえに社会主義とその国家の敵に対しては「非人間的」な尋問も辞さない（3 節）。

彼のこうした信念・道徳観は、「自由な思想、交わされる愛、そして美しいソナタ」を聴く前もあとも変わらない。

その信念と道徳観ゆえに、私利私欲に走る幹部（例えば出世主義の上司グルビッツと権力でクリスタをものにしようとする文化相ヘムプフ）に憤り軽蔑し、前者には苦言を呈し（各所）、後者にはクリスタ擁護の工作もする（21 節）。

冒頭ではヴィースラーが「社会主義の敵」への「非人間的」尋問の仕方を講義する。尋問相手は犯人ではなく目撃者の可能性にすぎないが、精神的拷問をする。シュタジの「臭いの瓶詰」作りも紹介される（3 節）。

彼は講義後、出世工作をしたい上司グルビッツに付き合わされてドライマンの劇を見に行き、その主役クリスタにすぐ魅了され（4 節）、その後演劇界の権力者ヘムプフへの彼女の「身売り」を知った彼は観客として、しかし実は道徳観と同情と愛情からそれをやめさせる（15 節）[9]。その後彼女が罠にはめられた時には救おうと工作する（21 節）。

彼は、同僚アンディを助けるため、上司グルビッツの反対を押し切ってドライマンを監視しようとする。だから、その後のグルビッツからのドライマン監視依頼が動機不純だと知っていても、それを引き受ける（5・7・9 節）。

グルビッツは上記監視依頼の後ろめたさの代償としてヴィースラーにシュタジ専属売春婦を提供する。その場面で彼の住居の様子や彼の覗き見趣味が分る（7・8・13 節）。

ドライマンらが住むアパートの屋根裏に大がかりな盗聴センターが作られ、毎日ヴィースラーとウドが 2 交代で詰め、盗聴・監視の日報を作る。その最初の収穫は大臣ヘムプフとクリスタのスキャンダルの把握である（9・10・11 節）。

ヘムプフが強引にクリスタと車内セックスし、そのリムジンで彼女をドライマン宅（彼女が同居）に送り、来週二人がホテルで会う約束をする。それを監視カメラで発見したヴィースラーは、その「むごい真実」をドライマンが見るようにドアベルを操作し、成功する（12 節）。

これがドライマンとクリスタの改心への道を開くことになる。

イェルスカの自殺の報に接しドライマンが追悼のために、誕生日にイェルスカからスコアを贈られた「善き人のソナタ」を弾く。クリスタもヴィースラーも聴き入る（10・13 節・**図 1**）。

約束の日にクリスタが、女優の座の確保のためにヘムプフが待つホテルに行こうとすると、ドライマンが止める。しかし彼は彼女から、権力追随では彼も同罪だと反撃される。

彼は反省し、彼女に改心を誓う。それでも身売りに行こうとする彼女を彼は止められない。ところがヴィースラーの説得が彼女を止め、彼女も改心する（14・15 節）。

ヴィースラーの「観客」としての熱心な説得は実はクリスタへの愛によるのであって、盗聴の結果でも、悪人になれないソナタを聞いたからでもない。

クリスタも改心して権力への「身売り」をやめたことにより、恋人二人がともに偽りの暮らしを脱し、苦悩を解消する。それによって二人はうわべの愛から真の愛に到達する。

改心は権力追随をやめることであり反体制とは限らない。ドライマンは改心を行動に移し、シュピーゲル誌（西独ハン

---

[7] https://ja.wikipedia.org/wiki/善き人のためのソナタ

[8] 以上の諸記事にはシュタジが「シュタージ」とある。この略語は保安を意味するドイツ語によるもので、現在の通常のドイツ語表記は「Stasi」（Staatssicherheit）であるが、東独には「Staasi」（Staatssicherheit）という略し方もあった。私は前者を「シュタジ」、後者を「シュタージ」としている。上映版の子どもは「シュターージ」と発音する（脚本は「Stasi」）（14 節）。

[9] ヴィースラーのクリスタ愛の例：彼がクリスタを初めて見た観劇の際に「彼の視線は特にクリスタに魅了されているよう」である（5 節）。ドライマン宅での盗聴装置設置の際に、机の上に見つけたクリスタの写真を手に取り、彼は「じっと眺め、元に戻す」（9 節）。説得の際に彼は「彼女はとてもきれいだ」と思う（15 節）。極めつけは彼女を守るために職を賭して証拠品のタイプライターを隠す（20-21 節）。いずれも体制・反体制感情と関係がない。

ヴィースラーがクリスタに「惚れ込んだ」という映画評論家コーテンシュルテ（D. Kothenschulte）の論評に、作者は「当初は彼はまだそうではなく、シーランドにうっとりしただけだった」とコメントしたそうだ（de. wikipedia 2020、典拠は Frankfurter Rund-schau（2006.03.23）と映画のドイツ DVD 版での作者コメント）。つまりは「当初」からうっとりし、ますます惚れ込んだ。

ブルクの週刊誌)に政権の闇(自殺統計隠蔽)を匿名で寄稿し、シュタジは犯人捜しに大騒ぎになる(16・17・18 節)。

クリスタはヘムプフの復讐によりシュタジに逮捕される。女は弱いという作者の考えにより、彼女は逮捕容疑とは無関係に、ドライマンのシュピーゲル誌寄稿を告白し、寄稿の証拠品の隠し場所も自白する。

ヴィースラーはクリスタ救済のためにその証拠品を隠すが、そうとは知らずに彼女は自白の償いのために自殺する。証人の自殺と証拠消滅のためシュタジはシュピーゲル誌寄稿を立件することができず、結果としてドライマンのみが救われる。ヴィースラーにとっては、自分のクリスタ救済策が彼女を死に到らせるという意に反した、やりきれない結果、あまりに悲しい結末である(19・20・21 節)。

以上のどこにもヴィースラーの改心はない。作者が改心を示唆するかもしれない「善き人のソナタ」に聴き入る 14 節、少年の父親の名前を聞くことを躊躇する 14 節、ハウザー逃亡の芝居を見逃す 17 節などの場面にも改心はない。

繰り返すが、彼の行動は終始一貫して彼なりの社会主義信念や道徳感、同情、愛情による。だから彼が「あの壁の向こう側へ」行くことを願う場面は一切ない。

グルビッツに証拠隠しを疑われたヴィースラーは左遷され、そこで 4 年後に壁開放を知る(22 節)。

その後統一されたドイツでもドライマンは花形劇作家としてエレガントな上流世界に住むが、自作演劇のある場面ではクリスタを想起して、いたたまれなくなる。その劇場で彼は、ロシア・ビジネスにより金持ちになったヘムプフから盗聴の事実を知り、その記録文書を元シュタジ本部の閲覧室で読み、自分たちの「守護天使」がヴィースラーだったと知る。だからその 2 年後に彼の略称への感謝の献辞を記した小説「善き人のソナタ」を出版する。

宣伝では、ベルリンの壁開放と翌年の両独統一によってヴィースラーもハッピーになるが、そうではない。

ドライマンは、街中でヴィースラーを見かけても話しかけることができない。それはドライマンが、チラシのポスティングをしてつつましく下流社会の片隅に住むヴィースラー(**図 2**)との格差を気にしたからである。

図 2 チラシのポスティングでひっそり暮らすヴィースラー

(出所)©邦画 DVD。

作者は、「物質的格差」が統一ドイツではより大きな社会的格差をもたらすと説明する。

このように、映画は壁開放後のヴィースラーの新たな種類の苦難と悲哀も描く。悲哀の中に、ドライマンからの感謝という小さな救いが漂うエンディングである(23・24 節)。

グルビッツのその後は描かれていないが、もし描くなら、機密情報を西独情報機関 BND に持ち込んで、うまく鞍替えした元シュタジ幹部の 1 人とする設定がふさわしい。

社会主義・共産主義が消え去ったことをヴィースラーがどう思うかも描かれていない。彼の信念によれば、東独の体制内反対派(社会主義・共産主義には賛成だが現政権のやり方には反対)と同様に、東独の体制転換結果(西独による吸収)を「こんなはずではなかった」と思うだろう。

元シュタジたちは西独情報機関への鞍替えや年金生活入り、ガードマン就職など色々である。いずれにせよ統一ドイツでは毛嫌いされ、疎外された。ヴィースラーも正体がばれれば、囚人 227 など彼の「非人道的」尋問を受けた者から指弾される。時効のない殺人罪では元シュタジ関係者(その例は青木 2018:10 節)のみならず、元政治局員たちも法廷に立たされた。

3. 大尉ヴィースラーのシュタジ法科大学講義:尋問方法

映画は 1984 年 11 月のある朝、〔東ベルリン・リヒテンベルク区ゲンスラー通り(Genslerstraße)にあった〕シュタジのホーエンシェーンハウゼン拘置所[10]でのシュタジ第 XX/7 部大尉ヴィースラーの「囚人 227」に対する尋問の場面から始まる。囚人が椅子に座る際に彼はまず両手を腿の下に置けと命じる。〔その意外な理由は本節末尾。〕

〔227 は囚人(Gefangene とも Häftling とも)とあるが、「共和国逃亡」(非合法の東独国境越え)の援助容疑ではなく、援助者を知っているだろうとして拘束された。だから本来は囚人ではなくせいぜい任意事情聴取である。むろんそうであってもシュタジは強硬であり得た。〕

この場面は、シュタジ付属法科大学での彼の尋問方法講義のために録画上映される。〔法科大学とはいえ教育は「秘密情報機関の理論と実践」に 40%、「法学教育」に 20%のみ、実習の重点は IM の扱いであった(**補注 a**)。〕

聴講は「15 人の若い男女」で、黒板には「徹底調査」、「偵察」、「陰謀」、「OPK」(作戦的人物コントロール)、「OV」(作戦事案)といったシュタジ用語が書かれている(ト書き)。〔上映版は学生 16 人。作戦的=陰謀による。〕

「わが国家の敵は横柄である。諸君はそのことを覚えておきなさい。我々は彼らに忍耐強く接しなければならない。例えば約 40 時間〔連続尋問〕の忍耐だ」とヴィースラーは強調する。

囚人 227 は何度も「少し眠らせてくれ」と言う。眠り込みそうになると、警備員が彼を揺さぶって姿勢を正し眠らせない(ト書き)。とうとう「囚人は静かに涙を流し始める。ヴィースラーは平然としたままである」(ト書き)。

すると、「若い学生レーマン(Benedikt Lehmann)は非常に不安になった。いま彼はこれ以上自制することができない」(ト書き)。なぜそんなことをするのか、「それは非人間的だ!」と発言する。ヴィースラーはすぐ学生リストにあるレーマンの名前の横に×を記入する(ト書き)。

〔レーマンが言うように 40 時間連続尋問も一種の拷問である。シュタジは痕跡が残る肉体的拷問よりも、精神的・心理的拷問を得意としたと言われる(現在記念館となって

[10] ホーエンシェーンハウゼン拘置所は現在記念館となっており、作者がこの映画のドイツ DVD 版の中で言うには、脚本のシュタジ賛美を理由に館長クナベ(Hubertus Knabe)が映画撮影のための利用を断った。しかし同館業務規定によれば撮影は記録のためのみ許可で、フィクションには不可である(de.wikipedia 2020)。同館は 2018 年に職員へのセクハラ問題で揺れた。

いる同拘置所を見学した際の説明)。別の場面(16 節)ではハウザーが「48 時間尋問」を警告する。〕

ヴィースラーは、潔白な被勾留者は無実の災難に怒り、叫び、荒れ狂うが、「罪人は時とともにますます静かになり、黙るか涙を流す。彼はそこに坐るのが正当だと知っている」からだ、だから罪の有無を「諸君が知りたいなら、相手が力尽きるまで尋問することよりも良い手段はない」と答える。

上映を再開すると、同じ質問と同じ答えが繰り返される。それについてヴィースラーが学生たちに「何か注意を引くか」と質問する。再びレーマンが「反抗的に」(ト書き)、「彼〔227〕は最初と同じことを言っている」と答える。

ヴィースラーが次のように解説する：最初と一言一句同じだ。だから尋問の際に「諸君は一言一句正確な記録を取りなさい」〔この「」内の台詞は上映版では省略〕、「真実を言う者は思うままに言い換えることができるし、そうするが、ウソをつく者は正確な文章を用意」しそれを繰り返す。「我々は 2 つの重要な状況証拠を持っている。いまや我々は〔囚人の〕緊張を高めることができる」。

上映を再開し、ヴィースラーが囚人に「あなたが逃亡援助者の名前を言わないなら、私は今夜あなたの妻を逮捕させねばならない」と追い打ちを掛け、「囚人は涙を流し震える」(ト書き)。ヴィースラーはさらに、「ヤンとナジャ〔227 の子たち〕は国家の寄宿学校に入る。あなたはそれを望むのか？」と迫る。「囚人はさらに涙を流す」(ト書き)。

囚人 227 は逃亡援助者として 1 人の警察官の名前を挙げ、「恐れおののき始める。ヴィースラーは生物学者が実験動物を観察するように興味深く彼を見つめ」つつ、囚人に「これでいまあなたは眠ることができる」と声を掛ける。

〔家族の「分解」はシュタジが実際に多用した作戦である。単に目撃可能性であっても、自白強要のために非人間的 40 時間尋問を強行し、妻子も標的にする脅しをかける。ヴィースラーはそれを「平然と」遂行する達人として法科大学講師をしている。〕

彼は講義の最後に手袋をして、227 が坐った椅子の座面板を包むオレンジ色の布(座面裏でネジ止め)を取り外し(**図 3**)、瓶に詰める映像を流す。彼は、これが「犬用の臭いの瓶詰だ。未決勾留者のどの尋問でもこれが採取されねばならず、決して忘れられてはならない」と強調する。

図 3 取り調べ中に臭いを採取した布を瓶詰保存

(注)座面裏に取っ手と布を止めるネジがある。この布を瓶に詰める。(出所)©邦画 DVD。

〔尋問開始時に「囚人」に両手を腿の下に置けと彼が命じた意味がこの場面によって初めて分かる。尋問の間、「囚人」の両手がこの布に押しつけられ、手の臭いが布に吸着する。シュタジが保管した臭いの瓶詰は有名だが、この採取方法を私は知らなかった。遺失物からの臭い採取が Bürgerkomitee Leipzig(1991:146ff.)に詳しい。〕

彼は、「尋問の際に諸君は社会主義の敵を扱う。彼らを憎むことを決して忘れるな」と言い、17:30 講義を終えた。その時彼の上司である第 XX/7 部長グルビッツが教室入口で待っていて、講義を誉める。グルビッツは退席する学生の 1 人、美人のキューバ人に目を付け学生リストに目をやり名前をチェックする(ト書き)。

グルビッツは、自分が教授職の申し出を受けたことを知ってるかと〔自慢げに〕ヴィースラーに聞くが、ヴィースラーは快く思っていない(ト書き)。彼は「何か用か？」と素っ気ない。グルビッツは文化相「ヘムプフが今夜劇場へ行くと聞いている」ので、〔取り入るために〕「文化部長としての〔自分の〕存在を示す」[11]と言い、チケット 2 枚を見せ、「19:00 に始まる。すぐ出発しなくては」と、一緒に行くようにヴィースラーを誘う。

4. 劇場 1：同僚アンディの窮地とクリスタの魅力

二人がドライマン作の演劇を見に行く。脚本には劇場は「ハウプトマン舞台」(Gerbart-Hauptmann-Bühne)とある。実際の撮影はヘッベル劇場(Hebbel-Theater、(西)ベルリン・クロイツベルク)であった(de.wikipedia 2020)。

〔演目は「愛の諸相」(Gesichter der Liebe、字幕では「愛の表情」)である。このタイトルは、脚本では両独統一後の再演時(23 節)のヘムプフ発言の中に登場するが、上映版ではそれがカットされ劇場で幕間にヴィースラーが見るプログラム表紙(**図 4**)にのみ出てくる。〕

図 4 劇中劇「愛の諸相」プログラム

(出所)©邦画 DVD。

彼らは小さな階上桟敷席に案内される。案内嬢がグルビッツのタバコを「心配そうに見つめる」と、彼はそれに気付き(ト書き)「ここが禁煙だと知っている」と彼女に言う。〔東独はタバコ排斥が遅れていた。グルビッツはシュタジ本部執務室ではこれ見よがしに葉巻を吸うというまさかの設定である。恋人二人も吸う。ヴィースラーは吸わない。〕

彼らが階下の特別席を見ると「第 5 列に 50 代半ばの太った男」文化相ヘムプフがいる。オペラグラス[12]で観察するヴィースラーにグルビッツが、彼は東独演劇界の大掃除をしたシュタジ元幹部だと教える。

〔東独の歴代文化相[13]にシュタジ元幹部はいない。せい

[11] 「文化部長」はシュタジではなく党中央委の職名であり、第 XX/7 部長にすぎない彼よりはるかに高位である。だからこのような発言は考えられない。

[12] 脚本は同じ場面で双眼鏡とも記すが、グルビッツが観劇用に事前に用意したもの(5 節)なので、オペラグラスに統一する。

[13] 1954 年文化省設置から 1958 年までベッヒャー(Johannes R. Becher)、1961 年までアブシュ(Alexander Abusch)、1966 年までベンツィーン(Hans Bentzien)、1973 年までギジ(Klaus Gysi)、1989 年秋までホフマン(Hans-Joachim Hoffmann)である。それ以後の変動期に 2 人。

ぜいギジが一時期 IM だっただけである。演劇界を恐怖に陥れた元シュタジ幹部ヘムプフを文化相にするのは文化・芸術界や世論に衝撃を与える政治的冒険であり、史実とは縁遠い。この設定は彼がグルビッツを部下のように利用するというストーリーのためだろう。文化相の出身如何にかかわらず文化省とシュタジ第 XX/7 部(第 2 課が文化省担当)は緊密な関係にあった(事例は青木 2020a)。〕

以下は上映版ではカットされた。

引き続き観客を観察するヴィースラーが脇の入口から入る男を見て驚き、「アンディがいる!」と言う。グルビッツが「そうだ。情けない話しだ。彼はジャーナリストのハウザーに対する OV を率いているが、あまり成果が上がっていない。ハウザーがそれ〔OV〕を知っていると我々は推測している。ハウザーは抜け目のない奴だ。…一度彼を二三日ホーエンシェーンハウゼン〔拘置所〕に留置したが、彼を釈放せざるを得なかった。妨害工作者であることは確かだが、これまで我々は何も証明することができなかった」。

「あれが彼〔ハウザー〕だ、あそこ、ジーンズ上着を着て〔向かいの〕2 階席にいる」とグルビッツが指し示す。

ヴィースラーがオペラグラスをハウザーに向けたちょうどその時、ハウザーは〔周知の〕アンディに「大げさに親しげな挨拶をする」。

アンディは「恥ずかしそうに目を伏せる。ヴィースラーはオペラグラスを降ろす。グルビッツはちょっと怒ったような目つきである」(ト書き)。

〔アンディの不手際に〕グルビッツは、「この OV を終了させねばならない。それは全く無意味だ」と言う。

〔グルビッツを快く思わないヴィースラーは、同僚アンディの窮状に同情しただろう。作者は舞台開幕前にヴィースラーにドライマンは「国家の敵」のように「横柄」だと言わせる(次節)が、それだけではドライマン監視の理由にならないし、その時は彼も監視を持ち出さない。ドライマンは国家賞受賞者かつホーネッカー夫人の友人という設定(16 節)だから、なおさらである。彼がドライマン監視を言い出すのは第 1 幕終了時にハウザーがドライマンと親しいと分かってすぐである(次節)。だから彼はドライマン監視によってアンディの OV を支援しようとしたという設定と推測される。〕

5. 劇場 2:頑固なヴィースラー

全観客が席に着いた頃、舞台横の仕切り席にドライマンが入り、「自分の境遇に満足している人のように振る舞う。観客は拍手喝采を始める」(ト書き)。グルビッツが「ドライマン。作家だ」と説明すると、ヴィースラーは「あれはまさに、私が学生たちに警告する横柄なタイプだ」と言い放つ。

〔脚本・上映版ともに「横柄なタイプ」は「わが国家の敵」が取る態度(3 節)である。しかし字幕には「私が教える学生と同じで高慢なタイプだ」とある。これでは学生レーマンの態度と同じタイプになる。そうではなく彼が学生に警告した「横柄」さは「国家の敵」〔囚人 227 など〕が示す(3 節)。〕

ドライマンを「横柄」と決めつけたヴィースラーにグルビッツは、「横柄だと、しかし路線に忠実だ。もし皆が彼のようであれば、私は失業だろう。彼は疑わしいものを何も書かないにもかかわらず西で読まれているわがほうの唯一の作家だ。彼にとって DDR は世界で一番美しい国だ。気をつけろ」とたしなめる。

この瞬間に、クリスタを主役とする「愛の諸相」の初日が開幕する。「ヴィースラーは、グルビッツが彼に貸したオペラグラスによって劇を追う。彼の視線は特にクリスタに魅了されているように思われる。彼女は女性工場労働者用の灰色の作業着ながらエレガントかつ気高く見える」(ト書き)。

第 1 幕が終わる頃、ハウザーが仕切り席のドライマンを訪ね「冷やかすように社会主義的挨拶」をし、両者は「心から」握手する様子も、ヴィースラーはオペラグラスで見ている。「ヴィースラーは何ごとも見逃さない」(ト書き)。

この劇の演出家シュヴァルバーもドライマンに挨拶した。それを見たグルビッツが、彼が IM ラインハルトだとヴィースラーに教える。第 1 幕が終わり、休憩となる(ト書き)。

〔劇は〕「気に入ったか」とグルビッツが聞くと、ヴィースラーは意外にも「彼〔ドライマン〕を監視させるだろう」と言う。驚いたグルビッツは「監視?講義をすると本能が台無しになるらしい」と呆れるが、ヴィースラーは「その OPK を自分が引き受けてもいい」と言う。〔彼の提案は OV ではなく OPK であることに留意したい(両者の違いは脚注 15)。〕

グルビッツは「少し腹を立てて」(ト書き)、「彼は問題ない。ヘムプフさえ彼の初日に来ている。我々がそうした人物を監視すれば、自分の首を絞めることになる」とヴィースラーに警告する。しかし「ヴィースラーは動じない。そのあまりの頑固さにグルビッツは頭を振る」(ト書き)。

〔ヴィースラーの「あまりの頑固さ」はどの場面でも、つまり生来であり、窮地の同僚アンディ支援のため(4 節末)にも発揮される。しかし上映版では 4 節のアンディの場面がカットされたため、そのことが分からなくなった。〕

6. 劇場 3:ヘムプフの陰謀に応じてグルビッツ豹変

休憩時、グルビッツはヴィースラーに「私はちょっと下へ行ってくる」と言って 1 階平場に坐るヘムプフに挨拶する。ヴィースラーはオペラグラスでその様子を眺める。

「ヘムプフは従僕に対するようにグルビッツに応対する」。グルビッツも「素早くその身振りを部下のそれに切り換えることができる」。グルビッツは「儀礼として」ヘムプフとの間に座席を 1 つ空けて、しかも座面の先端にバランスを取って坐る。他方ヘムプフは「権力とエネルギー、自信の化身である」(ト書き)。映像でもふんぞり返っている。

ヘムプフが「あなたは彼をどう思うか」と聞き、グルビッツは「ドライマンのことですか」と問い返す。「ヘムプフは答えない。すなわちイエスだ。グルビッツは頭を巡らす」。「彼はここで大臣に間違った言葉を口にしたくない」(ト書き)。

「おそらく…」と答えて口ごもる。ヘムプフは「おそらく何んだ」と問い詰める。グルビッツは「おそらく彼はそんなに潔白ではない、彼はどう…」とまた口ごもる。

「ヘムプフは一瞬彼を厳しく見つめ、そのあと彼は突然大声で笑いグルビッツの肩をたたく」(ト書き)。

「ほら、グルビッツ!だからあなたや私のような男がトップにいるのだ!普通の間抜けなシュタジは、わが国の最良の一人、路線に忠実…と答えただろう。全くばかげている。しかし我々はもっとよく見抜いている!」と言い、グルビッツの出世について「私を信用しなさい」等々と餌付けする。「グルビッツは無表情なままである」(ト書き)。

〔その時グルビッツは、ドライマンについて「普通の間抜けなシュタジ」と同じことをヴィースラーに言ってしまったことを内心悔やんだに違いない。〕

すると ヘムプフが「突然グルビッツのほうを見て」(ト書き) 言う：「来週木曜日の夜にドライマン宅でお祝いがある。そこに疑わしい連中、ハウザーなどのごろつきが数人来る」。

「彼は少しグルビッツのほうにもたれかかりながら」(ト書き) 続ける：「それまでになにか設置するようにしてくれ。内々の小規模 OV とし、彼の住居だけに措置 A〔電話盗聴〕と措置 B〔マイクによる盗聴〕[14]を目立たないように。彼には強力な友人たちがいる〔作者はその一人にホーネッカー夫人・国民教育相マーゴットを設定〕。我々が何か発見するまではこの OV のことを誰にも知られてはならない」。

ヘムプフは、「ドライマンの何かを見つければ、あなたは中央委の中に強力な友人を持つことになる。あなたは私の言うことが分かるだろう」とダメ押しする。

〔「何かを見つける」前に「小規模」「内々に」「誰にも知られないように」OV を開始することは、明白な容疑の場合に限るなどの規定（脚注 29）によれば本来は許されない[15]。〕

「会話が終わり、グルビッツが立ち上がる。その際彼はヴィースラーが座る桟敷席のほうを見上げる。ヴィースラーはオペラグラスを下ろす。彼の唇は満足感をほのめかす微笑を示す。第 2 幕のブザーが鳴る」(ト書き)。

〔「満足感」は、ヘムプフがドライマンを見ながら何かを話しグルビッツがうなずく様子からその中身をヴィースラーが察したことを示す。〕

演劇終了後、劇場地下室で初日祝賀パーティー[16]があり、同席したヘムプフはクリスタの腰に手を回し、さらにダンスを申し込むが、断られる。

その場でヘムプフが「ドライマン、あなたが今ではこうしたまともな演出家と協力していることに私は満足だ。別の時期もあった」と言った。〔「まともな演出家」は今回の舞台の演出家かつシュタジ IM のシュヴァルバーを指す。〕

これに対してドライマンが「真剣に」(ト書き)、〔別の時期とは〕「イェルスカのことか」と問い、ドライマンが敬愛する演出家イェルスカに対する演出の職業禁止 (Berufsverbot) を解くように要求する。ヘムプフはドライマンを遮り「怒って」(ト書き)、「職業禁止とは一体誰が言うのか。職業禁止？そんなものは我々のところには全く存在しない。言葉の選択にもっと気をつけるべきだ」と罵る。「ドライマンは実際にはぎょっとするが、あきらめない」(ト書き)。

やりとりの末ドライマンが、イェルスカは演出家復帰の「望みを持ってよいか」と聞くと、ヘムプフは「持ってよい」と言いつつ、「望みは常に結局は消え失せる」と付け加える。

〔職業禁止は西独首相ブラントが始めた共産党系の公職追放の通称であり、東独当局の公式用語ではないので、ドライマンは一瞬たじろいたが、それでも退かなかった。当時東独でも政権による好ましくない人物への職業許可（例えば職業歌手許可）取り消しを指して使われた。これは就業禁止ではなく、就業は憲法上の義務であった。教会や自宅の客の前で歌うことは可能であった（但し当局は妨害）。自由業や東独では共産圏としては珍しく存続した私営もすべて国家許可を要した。〕

7. 批判するヴィースラーにグルビッツは売春婦を提供

観劇のあとヴィースラーはグルビッツの 1600cc のラダ〔フィアットのライセンスによるソ連製〕で自宅に送られる。

〔グルビッツは東ベルリン南東端ケペニック区のミュッゲル湖（Müggelsee）畔の高級住宅地に（22 節）、ヴィースラーは北部のパンコウ区に住む（8 節）。だから方向違い（**表 2**）だが、上司のグルビッツが部下ヴィースラーを送った。ドライマンを擁護した前言（6 節）を覆したからだろう。〕

表 2 東ベルリン各区の配置概略

（注）太い罫線が壁、その左が西ベルリン、上が北。

車の中でグルビッツが、「OTS（作戦的技術セクション）が明朝、盗聴器取り付けのために君の合図を待つ。重要なことは木曜日までにすべてがなされることだけだ。ほかのことは君に任せる。うまくやれるか」と聞く。彼は「この質問への答えを期待せず、ヴィースラーも答えない」(ト書き)。

〔盗聴器取り付けは第 26 部の担当であり（脚注 19）、OTS の任務（略語欄参照）ではない。〕

グルビッツがラダをヴィースラーの住む「巨大なコンクリートパネル住宅に乗りつける」(ト書き)。〔彼の住居は 12 階にある。脚本に 11 階とあるのは 1 階を地面階（Erdgeschoss）とし 2 階を 1 階とするドイツ流の直訳である。〕

降り際の以下の会話は上映版ではカットされた。

ヴィースラーが「君は時にはそれ、共産主義がすぐそこだということに気付かないのか」とグルビッツに聞く。

グルビッツにはその意味が不明だが、「彼は特効薬を知っている」(ト書き)。グルビッツは、「君はあまりに考えすぎだ。今夜を祝って女の子を部屋に予約するといい。番号はリストにある。君は彼女らが潔白だと知ってるはずだ。彼女らは我々のところ〔=シュタジ〕のためだけに働いている。私がその支払いを持つ。…まあ、君はやらないか」と答える。

〔これが「特効薬」、つまりシュタジ専属売春婦の提供である[17]。グルビッツの提案を受けてヴィースラーが電話で予

---

14 14 節には措置 C もあるので、まとめて説明する（脚注 19）。

15 ヴィースラーが 5 節で提案した OPK は容疑不詳でも可能であり、このあとの実施内容は OPK にすぎず、ようやく 16 節以後に OV の可能性が生じる。但し OPK・OV いずれにせよ、作者によるその実施方法が非現実的である（以下に種々指摘）。作成される OV 文書（24 節）の書式にも疑義がある。

16 地下鉄駅ローザ・ルクセンブルク広場近くの「国民劇場」(Volksbühne) 地下の「緑のサロン」(Grüner Salon、現在も営業）で撮影された（Donnersmarck 2007:180）。

17 シュタジは売春婦を情報収集や脅しのために外国人向けに利用したと言われるが、「売春」等の処罰規定（刑法第 249 条第 2 項）にもかかわらず、シュタジ職員用にも用意していたかどうかは知らない。1973 年夏の世界青年学生祭典の際にシュタジと警察が売春婦を事前隔離した（青木 2019:22）。但しその際「売春」ではなく「頻繁に取り替える性交渉」(略語 HWG) と言った。体制転換後すぐに東ベルリンで街娼を見た。

約したから、その後の場面でヴィースラー宅へ売春婦ウテが来る。ウテはヴィースラーの住居近辺の担当だが、彼の所はこれが初めてである(13 節)。上映版では以上の会話がカットされ、なぜウテが彼の所に来るかが分からない。〕

8. ヴィースラーの素性露見と「他人の生活」覗き見趣味

続く以下の場面も上映版はすべてカットした。ヴィースラーの警察への通報と〔〕内以外は、すべてト書きである。

グルビッツの車から「ヴィースラーが降りる。車は走り去る。ヴィースラーが彼の〔自宅のある建物の〕入口に向かう」。

建物前に坐っている「パンクの格好の若者グループ」が小声で、「シュタジのブタ」(Stasi-Schwein)と言う。彼が振り向かないまま立ち止まってみせると、「グループは静まりかえる。それから彼は建物に入る」。

建物に入ったヴィースラーがエレベーターを降りて自宅のドアに向かうと、「そこにまた“シュタジのブタ”と書かれている」。塗料は「まだ新しい」。

〔この建物の住民にはヴィースラーの素性がばれているという設定であるが、屋外はともかく、彼以外にもシュタジの「若い男たち」が住む(13 節)この建物内でのこのような落書きの設定は現実的ではない。たとえシュタジが住んでいなくても、シュタジの手先や警察、住民組織による監視や調査があることは誰もが知っている。〕

彼はそれ以上関わらずに部屋に入る」。2K の自宅には「DDR において最も容易に入手され得る家具」が備えられ、「壁の唯一の装飾品は人民軍のカレンダーである」。

〔彼の性格を示すためか、部屋には飾りがなく整理整頓されている。家具は東ベルリンの新築高層住宅に普通の備え付けである。居間の窓から向かい側の建物の住居を覗くために窓辺に双眼鏡が置かれている。職業柄か趣味として覗き見が設定され、この夜もそれによって犯罪を発見し警察に通報する(下記)。〕

「彼は居間へ行き窓際に立ち、置いてある双眼鏡で向かいの建物の窓を覗く」。家族がボードゲームをする部屋、若いペアがけんかする部屋、老婦人がテレビを見ている部屋のあと、次の部屋で「突然何かを発見」する。

そこでは「2 人の若い男」が言い争い、「その横に 1 人の若い女性が立っている」。ベッドの上に「大きなトランク」があり、ヘアドライアーが 20 台以上詰め込まれている。

ヴィースラーは、やはり窓台に置いてある「リスト」を手に取り、「人民警察の情報受付窓口」に電話し、〔受話器を持ったまま〕「他方の手で双眼鏡を目に当てつつ、「こちらは大尉ヴィースラー、MfS 身分証明書番号 98495-G。ディーツゲン通り(Josef-Dietzgen Str.)139 の 653 室〔7 階〕。そこに二三人来させて欲しい。おそらく投機的な商品貯め込みだ。待ってる」と言う。〔闇商売を見つけた。〕

〔この通りはパンコウ区ニーダーシェーンハウゼン地域にある。上記の「リスト」はヴィースラーの覗き見対象の建物(彼が住む建物の向かい)の部屋別住民名簿である。事実とすれば、シュタジ職員には自分が住む建物だけではなく周辺の住民名簿も配られ監視に役立てられたことになる。

ヴィースラーの住所も同じ通りないし隣接の通りになる。但し彼の HGW XX/7 としての職員カード(**図 19**)の住所はライプニッツリンク(Leibnizring)12 という架空であり、職員番号も異なり、整合性に欠ける。〕

住民名簿の「653 室の欄にはハイナー・ラウン(Heiner Laun)、事務手伝い、ツェントルム百貨店」とある(ト書き)。〔国営百貨店店員による闇商売の摘発である。ツェントルムは全国に展開し東ベルリンではアレキサンダー広場にもあり、現在百貨店ガレリア(Galeria)である。〕

電話のあとヴィースラーがテレビを付けると、〔東独テレビの〕「ソ連でのアンドロポフ埋葬の放送だった」(ト書き)。〔これは 9 ヵ月前の放送(国葬は 1984 年 2 月)であり、上映版では第 10 回党大会関連のニュースに変わったが、同党大会は 1981 年 8 月だから、これもそぐわない。当時党大会は 5 年毎であった。〕

すこしあと彼は「再び立ち上がり窓際に行き双眼鏡を手に取る」。闇商売現場を見ると警察官が踏み込み、ベッドの下からトランクを発見し、二人の男を連行する。残された女は泣く。突然警察官がヴィースラーのいる窓のほうを見る。彼は見られたかと思い尻込みする。女はカーテンを閉め、その影で泣き続ける。「怪しい人物 3 人が潰された。ヴィースラーにとってはこれは 1 日の異例の終わりではない」(ト書き)。〔13 節でも覗き見。〕

9. ドライマン宅:盗聴・監視器設置とリムジンのクリスタ

尋問講義と劇場場面の翌週の木曜日にドライマンの誕生日パーティがある。それまでにドライマン監視体制を完成するため、準備が進む。

ドライマンは〔古くからの灰色の外壁の〕「典型的なベルリンの賃貸住宅」の 3 階(脚本はドイツ流で 2 階)に住んでいる。それをヴィースラーは「道路の反対側の地下室への入口の陰に立って監視」する(ト書き)。

〔「陰」とはいえ通行人や車から丸見えである。そこに長時間、しかも時々メモしながら立ち続ける。「シュタジです」と明かしているようなやり方である。ここはのちにヴィースラーやクリスタが入るバーに降りる入口でもある(15 節)。〕

昼頃、ドライマン宅の窓にクリスタが見える。道路で男の子 2 人〔上映版では女の子 1 人も追加〕とサッカーをしていたドライマンもそこに現れ二人はキスする。夕方二人が別々に出かけ、ドライマンは夕方遅く戻る。それらの様子と時間をヴィースラーはメモし続ける(ト書き)。

彼は夜も同じ場所に立っている。すると、「遮光ガラス付きの大きなリムジンが小さな通りに入ってくる。車は家を過ぎ角で〔上映版ではドライマン宅筋向かいに〕止まる。ヴィースラーが車のナンバーを書き留める。<u>クリスタがリムジンから降り</u>用心してまわりをみて家まで徒歩で戻る」(ト書き)。

〔リムジンはヘムプフのものと分かる(11 節)。脚本ではソ連製「黒のヴォルガ・リムジン」(12 節)だが、上映版ではボルボである。ホーネッカーの専用車はボルボであった。〕

「翌日昼頃」ドライマンが家を出る。「いつもの場所」からそれを見たヴィースラーが、彼の前に停まるシュタジの「投入車両」の屋根〔上映版は側面〕を叩く。〔OTS の〕4 人〔上映版では 5 人〕の男が降り早足に入口に向かう。…彼らは私服だが、兵士のような動きである」。ヴィースラーが続く。そのうち「手工業者の服装」をした 1 人は建物入口前に脚立を立て、「入口灯に何やら細工する」(ト書き)。

〔「細工」は、建物前の路上を監視するビデオカメラの取り付けである。その映像を同じ建物の屋根裏に整備される監視室のモニターで見るが、どのようにつないだかの説明

はない。4ヵ月もそのままだからカメラや配線の発覚の恐れがある。シュタジの通常の設置の仕方は脚注 19 参照。〕

残りのスタッフとヴィースラーは特製器具で鍵をこじ開けてドライマン宅に入る。そこは「ベルリン風の堂々たる広く古い住居である。数少ないが美しいアンチーク家具と社会主義的表現主義の大きく力強い絵がある。

彼がスタッフに「20 分間」と言い、ストップウォッチの「スタートボタンを押す」。盗聴器の全室設置とドアベル細工の作業が始まる。「それはよく鍛えられた手順である」。彼は作業を点検しながら各部屋を回り、「建築当局の平面図」と「綿密」に見比べ、そこに「改善点を書き込む」。

彼は書斎机の上にクリスタの額入り写真を見つけ、手袋をはめた手に取り「じっと眺め元に戻す」〔上映版では手に取ることなく顔を近づけてじっと見つめる〕。引出しにはFAZ〔西独紙〕とシュピーゲル誌がある。

作業の順調さを確認した彼がドライマン宅から出て屋根裏部屋へ行くため階段をのぼろうとすると、隣の老夫人マイネケがドアののぞき穴からその様子を見て仰天する〔彼女はさきほどからの騒々しさゆえのぞいたのだろう〕。それに気付かず屋根裏に上がった彼は、上記同様の器具で鍵をこじ開けて中に入り、部屋の様子に「満足する」。

彼はドライマン宅に戻り、残り 1 分と確認し、最後の点検をする。その間に投入指揮官・伍長マイアー以外の 3 人は立ち去る。完了してヴィースラーが「まさにドアを閉めようとする時、見られていると彼は感じる」。隣のドアのぞき穴からである。（以上ト書き）。

〔上映版の「残り 1 分」の場面（**図 5**）は、ドライマン宅のドアが開いたままである。これは背後のマイネケ夫人宅ドアから上記に続き彼女がその様子も見ていることを示すためだろうが、シュタジ大尉がドアを開けたまま作戦行動をすることはあり得ない。〕

図 5「残り 1 分」

（注）背後にマイネケ夫人宅ドア。（出所）©邦画 DVD

彼が「恐ろしい激しさでドアを叩く」（ト書き）。ドアを開けたマイネケ夫人は「戦後瓦礫片付けをした女性」で、「まだ一度も誰をも傷つけたことのない女性である」。ヴィースラーが彼女に「マイネケ夫人、誰かに一言でも言えば、あなたのマーシャは明日にでも医学部の学籍を失います。お分かりですか？」と言うが、彼女は「驚愕のあまり返事ができない」。すると彼は「おわーかーりーですか？」と脅し、「彼女はうなずく」〔上映版では小声で「はい」と言う〕。

〔シュタジは作戦対象の周辺情報も収集するから、この場合も隣人はもちろん周辺の住民の家族構成その他の必要情報を予め集め、必要ならIMも調達ないし配置する。〕

「伍長マイアーが、彼の上官〔ヴィースラー〕は何と厳しいのかと感心する。ヴィースラーは階段を降り、マイアーがかしこまって付き従う」（ト書き）。

その際二人は、「マイネケ夫人に彼女の秘密厳守を称えてなにか贈り物を送ってくれ」、「一体何を？」、「何か適当な物を頼む」、「サボテンは？」、「いいね、サボテン」と相談する。ヴィースラーも投入車両に同乗して立ち去る。

〔上映版ではこの会話は簡略化され、サボテンの選択やサボテンをめぐる後日談（13 節）はカットされた。〕

〔その後ヴィースラーは翌 1985 年 3 月 11 日まで 4 ヵ月間、ベルリンの寒い冬にあり得ない同じジャンパー姿のままドライマン宅のある建物の鍵がかけられて誰もいないはずの屋根裏部屋に、ウドと毎日定時に交代して出入りする。しかもその出入りに住民と同じ出入口と階段を使い、屋根裏からはタイプを打ち続ける騒音が漏れてくる。その異様さは住民に知れ渡るに違いなく、無理な設定である。現にマイネケ夫人には二度も気付かれる（上記と 13 節）。彼女は脅されて沈黙するが、住民に情報が広まれば作戦は破綻する。シュタジには監視を感じさせて脅すという作戦もあったが、この OV の狙いはそれではない。〕

10. ドライマン誕生日パーティー：失意のイェルスカ

木曜日夜にドライマンの誕生日パーティーがある。その日の昼間、ドライマンはイェルスカ宅を訪ねる。会話の最後に、ドライマンは彼の演劇の初日パーティーの際に、ヘムプフに彼の復権を頼み、ヘムプフが「私に希望を抱かせた。非常に具体的に、全く文字通りに」と話す。イェルスカは「本当か？それはすばらしい…」と言う。

同日夕方、ヴィースラーが屋根裏部屋に来ると、すべての機器が揃い、「盗聴センター」が出来上がっている。彼が主電源を入れ監視を開始する。ちょうどその時、イェルスカ宅から帰宅するドライマンの姿がモニターに映る。

その頃ドライマン宅ではクリスタが誕生日パーティーの準備をしている。

〔ドイツ人は大人でも誕生日を大々的に祝い、祝われることが好きで、職場でも祝う。私の初体験はベルリン経済大学滞在中で、同大学陸上部トレーナー（体育教師）から誘われて練習に参加していた時である。ある日は早々と練習が終り、彼の誕生日祝いになった。彼は当然祝われると予期し、お礼に大人気で不足商品のブルガリアのチーズによる大量のオープンサンドを用意していた。部員はみな大喜びだが、1 つ口にして無理に呑み込んだ。チーズの中でも特に塩辛くそれ以上手を出さなかった。彼の誕生日もこういう祝い方も知らずプレゼントを持参しなかった。〕

クリスタはドライマンがイェルスカと関わることを危惧し、「イェルスカは〔パーティーに〕来るの？あんたは強くて、たくましい。だから私はあんたを必要としている。私はあんたをとても必要としている。あんたの人生が〔イェルスカのような〕破滅に見舞われないようにして」と要求する。

ドライマンは「アルバート〔イェルスカ〕は私の友人だ」と言い返すが、クリスタは「あんたは私のものよ」と切り返す。

〔作者は体制に睨まれたくないというクリスタの気持ちと同時に女は男に頼るものという考え方を示す。イェルスカは OV「ジムシ」（Engerling）の対象とも設定された。〕

イェルスカはパーティに来ても誰とも話さず、ドライマンが持っている「黄色のブレヒトの本」を読んでいる。彼にドライマンが、「皆が君を称賛している」と励ますが、称賛は「10 年前に私が作ったものに対してだ。そしておそらくもはや全くあり得ない」と彼は嘆く。

〔「10 年前」つまり 1974 年に到る数年間には東独の多くの作家・芸術家が自由化を感じた（青木 2020a）。それは東独文化界における「三月革命前の息吹」とさえ見られた（青木 2020:8 節）。この黄色のブレヒトの本にヴィースラーは興味を持ち、のちに持ち去る（13 節）。〕

パーティーの場でハウザーが演出家シュヴァルバーに、「君がシュタジとくっついた能なしだということは誰でも知っている！」と言い、ドライマンがそんなことを「我々は知らない」と言って抑え、シュヴァルバーに謝った。するとハウザーはドライマンに、「君はもうすでにほとんど坊主のような軽蔑すべき観念論者だ。誰がイェルスカを破滅させたのか？まさに密告者や裏切り者、順応主義者といった連中だ！…君が何か企てるつもりになれば私を訪ねてくれ。そうでなければ我々はもう会う必要はない」と怒って帰る。

〔ここでも闘おうとする者と、体制内で活路を見出そうとする者の葛藤が描かれた。〕

客全員が帰ったあと、ドライマンが客からの多くのプレゼントを開ける。ドライマンが、これは「イェルスカからだ」と指し示すと、クリスタは「彼はもちろん本をくれたんでしょ」と気乗りしないが、「それは本ではなく、“善き人のソナタ”という珍しいタイトルが付いたピアノスコアである。悲しげに彼はそれを脇に置く。明らかにこのプレゼントは、彼が今は思い出したくないあることを意味する」(ト書き)。

〔このスコアは上映版が映す表紙によると「ピアノ曲集」第 VI 巻(Klavierwerke Band VI)である。〕

パーティーとその後始末に並行して、盗聴センターではヴィースラーが OV「ラツロ」(Lazlo、字幕はラズロ)の初日の日報をタイプし、「イェルスカがブレヒトの詩を“ラツロ”に朗読する。反革命的内容ゆえに西での出版と推測」し、また「ハウザーによる陰謀暴露」〔=シュヴァルバーのシュタジ協力暴露〕ゆえ、「IM ラインハルト〔=シュヴァルバー〕の投入は今後慎重に」と記す(ト書き)。

初日の日報の最後には「ラツロと CMS〔クリスタ〕がプレゼントを開ける。そのあとおそらく性交」とある(ト書き)。

〔以後この OV は日報制で、監視担当は 11-23 時と 23-11 時の 2 交代、当初前者をヴィースラー、後者をウドだが、当番交替があった。OPK と異なり OV であれば対象は明白な容疑者だから報告にはその本名が記載される。暗号名での報告は見たことがないし、そうする意味はない。〕

11. ヘムプフのクリスタとのスキャンダル発覚

パーティの翌日(金曜日)シュタジ本部で、イェルスカのファイルを探すヴィースラーを、グルビッツが「その文書〔OV ジムシ文書〕を選び出させる」(「自動的に送られてくる」(字幕)わけではない)から「我々は昼食に行こう」と誘う。

グルビッツが「幹部用テーブルはあっちだ」と言っても、ヴィースラーは「どこかで社会主義が始まらねばならない」と言い、一般職員席に「座り続ける」。これにグルビッツは「いやいや」従うが、〔まわりの〕「“人民”が喜んでいないように見え、ちょっと面白がる」(ト書き)。

グルビッツが「真剣かつ小声で」(ト書き)、君がメモした「CMS を夜間に秘密裏に家まで送ったリムジンのナンバー」を調べると、「文化相ヘムプフの車だ。ヴィースラー、指導的同志たちを我々がつかまえてはならない。私がこの報告から言及箇所を削除した。今後はこの件については文書にするな。もし何かあれば口頭で私に」と指示した。

彼は、「公式の話しが終わって、うれしそうに興奮して」(ト書き)、この件で「我々が何かを見つけるなら、私のキャリアにとって意味があり得るし、君にもだ」と語る。

「グルビッツは目を輝かせてヴィースラーを見る」が、「ヴィースラーは厳しく見返す」(ト書き)。グルビッツは驚いて「なんだ？」と言う。ヴィースラーは自分が「私的目的のために乱用される」ことに傷つけられ(ト書き)、「我々はそんなことのために仕事に就いているのか？」と問い糾すが、「グルービッツには理解できない」(ト書き)。

そこでヴィースラーは、「君は我々の宣誓をまだ覚えているか？“党の盾と剣”を？」とたしなめると、グルビッツは「党はその党員といったい何が違うのか？党員が大きな影響力を持てば、そのほうがいいだろう！」と開き直る。

〔ヴィースラーはリムジンの主の判明により、ヘムプフがクリスタをめぐり恋敵ドライマンの失脚(劇作家としての職業禁止)を狙っていること、ドライマンを絶賛していたグルビッツのドライマン監視への変心は自身の出世のためのヘムプフへのサービスであることを確信し、自らの信念ゆえに二人への強い怒りを持った。〕

図 6 シュタジのエンブレム

〔「我々の宣誓」は国家保安省職員の「軍旗宣誓」のことである(**補注 b** に全文)。そこには「党の盾と剣」や「党」という言葉はない。シュタジのエンブレムにも国旗と銃剣と盾(外枠)があるが、党はない(Wikipedia. commons, CC-BY-SA 3.0 による**図 6**)。全員が署名する「義務」という文書の前書きには、国家保安省は内閣に属する国家機関でありながら、独裁党である「ドイツ社会主義統一党に忠実に献身する機関」とある。「党の盾と剣」という言葉の由来も**補注 b** 参照。〕

この会話の直後に彼らの隣のテーブルに少尉シュティグラーが「にやにやしながら」(ト書き)加わり、ホーネッカーについての新しい風刺小話(ヴィッツ)を話し始める。

同席の 3 人がすぐ、隣にいるグルビッツらのほうに「顔を向けることによって警告」したので、彼は二人に気付き、「ぞっとする」(ト書き)。シュティグラーは冒頭部分だけで小話を止めたが、グルビッツに促されて、ホーネッカーが朝昼晩、太陽に挨拶すると、朝と昼は太陽も挨拶を返したが、夕方には返事がなく、ホーネッカーが問いただすと、太陽は「くそくらえ、私は今は西にいる」と話した。

〔この小話はこの時期(1984 年末)には特別の重みがあった。「西」は西ベルリンないし西独本土を指す。1984 年春に「今は西にいる」という東独市民が突然大量発生し「出国の波」と呼ばれた。出国許可を得て出国手続きに並ぶ長い行列を日々西のテレビが放映し、市民は至る所で東独を「去るか残るか」議論した。出国許可増発の背景には東独の外貨繰り危機への西独の金融支援(シュトラウスの 10 億クレジット)があり、同じ頃東独は対西独国境の自動射撃装置 SM-70 も撤去した(青木 2018:5)。〕

するとグルビッツがシュティグラーに「名前、地位、所属」を聞く。シュティグラーが名前と「少尉、M 部(Abteilung M)」を言うと、グルビッツは「わが党を嘲笑した。これは扇動だ。そしてきっと氷山の一角にすぎない。私は大臣のビューローに通報するだろう」と宣告する。

〔M 部は、字幕では「M 部局」とあるが、局ではない。M 部は大臣直轄の第 II 局(防諜担当)の中で郵便・電信電話のコントロールやビデオ監視を担った。本部と県支部あわせて「ライン M」を構成し、その職員は最多の 1989 年に本部 516 人、ライン全体で 2192 人に達した。M 部長は

1965 年以来長期にシュトローベル（Rudi Strobel、1985 年少将）であった（Engelmann 2016:33; Labrenz-Weiss 1998:5）。他方、グルビッツの第 XX/7 部は本部職員最多の 1988 年でも 43 人（Auerbach 2008:138）にすぎず、M 部の 1 割にも満たなかった。

しかも M 部長は大臣との間に局長のみがいるが、第 XX/7 部長は局長（当時キーンバーク Paul Kienberg、1989 年中将）に加え、大臣代理（当時第 XX 局担当大臣代理はミッティヒ Rudi Mittig、1986 年大将）がいた。

だからグルビッツが大規模部長・まもなく少将の M 部長を差し置いて一存で M 部員を左遷させることはあり得ない。

字幕にはグルビッツが「大臣に報告するぞ」と言うとあるが、このように瑣末なことで彼のような地位の者が直接大臣に通報することもあり得ない。

脚本も上映版も通報先は大臣ではなく「大臣のビューロー」（Büro des Ministers）、正確には「管理ビューロー」（Büro der Leitung、略称 BdL）である。大臣直属の BdL は、旧称（総務部 Abteilung Allgemeines）が示す職務を担当した（Engelmann 2016:67）。BdL はシュタジ職員の不祥事も処理するので、グルビッツの通報先は BdL になる。BdL が通報を受ければ、事情聴取の上で、M 部長に知らせ、M 部長が処置を判断することになり、M 部長が食堂での様子を知れば、自分の部下を挑発したグルビッツに逆襲するかもしれない。下記のようにヴィースラーもグルビッツのこの挑発行為を軽蔑する。〕

「シュティグラーの顔が引きつる。…ヴィースラーはグルビッツをなにか不審の目で見る」（ト書き）。するとグルビッツは「冗談だ」と笑ってごまかすが、後述のように、シュティグラーは M 部地下郵便開封室に左遷される。

グルビッツがごまかし発言をしている時、「ヴィースラーはもはや何が言われているか全く聞いていない。彼は彼の上司であり大臣の下部構造（Unterbau）であるグルビッツの顔をただ見ているだけである。他人がその共産主義への信仰を彼といかに違って生きているかに彼は再度直面する」（ト書き）。

〔彼が「共産主義への信仰」の差異を感じるのはグルビッツに自宅に送られた時（7 節）に次ぐ二度目であり、グルビッツの党員失格という確信をヴィースラーは一層強めた。大臣の部下を「大臣の下部構造」と換言するのは作者がマルクス用語を使って見せたのだろうが、マルクス主義では下部構造が上部構造を規定するのだから筋違いの借用である。しかもグルビッツは上記のように大臣直属の部下ではない。〕

12. ヴィースラーがドライマンに「むごい真実」を見せる

金曜日夜遅く、舞台が終わって路上に出たクリスタをヘムプフは「黒のヴォルガ・リムジン」〔上映版ではボルボ〕に乗せ、車内でセックスする。クリスタは拒めない。運転手ノヴァックがルームミラーから見ている。そのあとドライマン宅のある建物の向かいまでリムジンで彼女を送る。

その到着を「ヴィースラーが白黒モニターで見た…。それが何を意味するかを彼は知っている」（ト書き）。

彼は「むごい真実のための時間だ！」と独り言を言いながら、「制御器を探り、1 つの配線を引出しそれを露出している別の配線と結び付ける。その結果、ドライマン宅のドアベルが鳴る」（ト書き）。

〔古い建物ではアパート入口と個々の住居をつなぐドアベルに通話機能がない。ドアベルを聞いた住民が「ドアを開けるボタン」（ト書き）を押すと建物入口ドアの施錠が解けるが、押してもベルが鳴り続けると、住民は解錠故障だと考え入口まで迎えに行く。これがヴィースラーの狙いであり、彼は何度もドアベルを鳴らしてドライマンを建物入口へ行かせる。シュタジのドアベル工作例があれば知りたい。〕

「ベルのリズムはヴィースラーが両配線を接続させるリズムである。ドライマンが階段を降りる音が聞こえた時、彼は配線を脇に置く。彼はモニターを眺める。まもなくそこにドライマンが現れる。入口の前には誰もいないので、ドライマンは不思議に思う〔が、その後誰がベルを鳴らしたかを追究しない〕。彼は通り沿いを見る。そして彼が見るべきものを見る。そこに黒いリムジンがいる。そして彼がそれをじっと見ている間に、しゃぶられた骨のようにクリスタが車から吐き出される。通りは全く静かであり、いかなる音もほとんど超自然的にはっきりと聞こえる」（ト書き）。

「じゃあ、来週木曜日、メトロポールで！」[18]というヘムプフの声が車内から響く。〔ドライマンにも聞こえる。〕

「リムジンは人通りのない夜道に消える。クリスタはしばらくそこにぼうっとに立っている」。そのあと彼女は「多少ふらふらしながら建物へ向かう」。ドライマンは「入口〔の内側〕脇の隅の暗がりに立つ。クリスタは自分の鍵で〔ドアを〕開ける」。ドライマンに気付かず部屋に向かう（ト書き）。

〔のちにヴィースラーもドライマンと同じ隅にドライマンから身を隠す（**図 12**）。〕

以下は上映版では簡略化されている。

「クリスタはすぐ浴室へ行き、ドアを閉め、身体をきれいにしようとするが、できずにシャワー中に泣きながら崩れ落ちる。ドライマンは部屋に戻り浴室の明かりを見て居間へ行き坐ってピアノを弾いて悲しみに沈みつつ彼の考えと気持ちを整理しようとする。クリスタは錠剤「アポノイロン」（Aponeuron）〔覚醒剤〕を二三個服用して落ち着き、浴室から寝室へさっと入り、背後のドアを閉める」（ト書き）。

「ドライマンが寝室へ行きドアを開ける。クリスタがベットの遠く離れた端に横になり、彼に背を向け胎児のように丸まっている。彼女は非常に傷つきやすく小さく見える。彼はベッドの回りを歩き彼女の隣に坐る。彼は大人同士の話をして、深刻なことを実務的に彼女に話そうとする」（ト書き）。

ドライマンが「クリスタ」と呼びかけると、彼女は「仰ぎ見ることなく哀願するように」（ト書き）「ただ私を抱きしめて」と言う。「少しの間彼は何もしない。それから彼は、そんなにも愛しているこの女性に同情する。彼女は彼の愛を必要としていることを従来決してなかったほどに彼が感じるからである」。「優しく」（ト書き）、「私は君のそばにいるよ」と言う。

「ヴィースラーは彼が〔屋根裏に〕白墨で描いた寝室の位置、まさにドライマンが坐っている位置に置いた椅子に、ドライマンと全く同じように坐る。彼はヘッドホンの長いケーブルによって、ヘソの緒によるように、監視テーブルと結ばれている。この時彼はこれまで決してなかったほどドライマンとクリスタの身近にいる」（ト書き）。〔ヴィースラーは感傷にひたりつつヘッドホンに聞き入る。〕

18 フリードリッヒ通り駅近くの東独では高級なホテル。インターショップ（外貨ショップ）も併設。今は Maritim pro Arte。

「ちょうどその時ウドが入って来る」〔交代時間 23 時である〕。ヴィースラーは東独製乗用車ヴァルトブルクに乗って人気のない深夜に自宅に戻る(ト書き)。

〔ヴァルトブルクはのちに有名になる東独小型車トラバント(意味は衛星)より一回り大きい。名前はルターがこもった城や戦前 BMW の工場があった地名に由来し、東独末期には西独 VW 製ゴルフのエンジンを搭載したのでヴァルトゴルフと俗称された。〕

13. ヴィースマン宅:
売春婦来訪と続「他人の生活」覗き見

自宅に戻ったばかりの深夜、ヴィースラーはソファーに座って、観劇の際もらったプログラムにあるクリスタの写真に見入ったり、顔を洗うなどする。まもなくドアベルが鳴る(ト書き)。〔ここは通話機能があって〕彼が「今晩は。5 階、右の廊下へ」(上映版は 12 階、字幕は 11 階)と言うと、「すでに上にいる」と、予約した売春婦ウテ(Ute)が答える。

「ヴィースラーがドアを開ける。売春婦はおよそ 30 才で、運命の皮肉によってクリスタの粗野なカリカチュアのように見える」(ト書き)。この建物にどのように入ったかとヴィースラーが聞くと、ウテは「鍵束をがちゃつかせながら」(ト書き)、「ここには MfS〔シュタジ〕のほかの若い男たちも住んでいる。あんたのところはまだ来たことがないみたい」と言う。彼は「そうだと思う」と答え、ウテは、ここは「快適そうだ」と言う。

サービス終了後ヴィースラーが「もうちょっといてくれ」と頼むが、「だめよ。半に次の客がある。次回はもっと長く予約してくれなきゃ。私は予約どおりにやってる」とウテ。

彼が〔土曜日午前〕「1 時半か?どのみち間に合わないでしょう」とねばるが、ウテは「間に合うわよ。心配無用」とはねつける。シャワーを使ったあと裸のまま浴室から出てきて服を着る(ト書き)(上映版では服を着て浴室から出てくる)。「…バイバイ」と言って出ていく。

〔ウテへの支払いはグルビッツである(7 節)が、上映版にその説明はない。〕

「しばらくして彼は立ち上がり窓辺に行き外を眺める。いつものように彼は引出しから双眼鏡を取り出し向かいの建物を眺める。突然彼はびっくりして双眼鏡を下に置く」。自分の目でみると、「向かいの部屋の 1 つでウテがまさに 1 人の同僚のそばで服を脱いでいる。ボクサーバスローブを羽織ったその男はヴィースラーよりも経験豊富」な様子でウテと接している(ト書き)。上映版にこの場面はない。

このあと、「昼間」に「ヴィースラーが注意深くかつ静かにドライマンの部屋に入る」場面になる。そこで彼は書斎机の上の「書き物や金色の万年筆」、「黄色のブレヒトの本」などに触れ、「今なお机の上にあるサラダ用の大型フォークに彼はちょっと笑わざるを得ない」とか、寝室では「ベッドの前で、芸術作品を見るかのように、少し立ち止まり、ヒザを折りシーツを手に取り、それを彼の頬に当てる」(ト書き)。

上映版では以上の彼の動作が簡略化され、以下の場面がカットされた。

その時、彼は「突然階段室から何か音を聞く。女と男が 1 人ずつ。クリスタとドライマンが予想に反してもう戻ったのか?」と彼は驚くが、足音は上の階へ行き、「ヴィースラーはほっとする」(ト書き)。

〔もしドライマンらが帰宅すればヴィースラーは家宅侵入で逮捕され、その後シュタジがもみ消すとしても、シュタジ内で処分される。この侵入はシュタジの得意技としての「陰謀的家宅捜索」(令状なしの捜索)ではなく、単に感傷にひたる覗き見であり、しかも下記のように実際に目撃者が登場する危険な行動であり、OV ではあり得ない。〕

音がしなくなりヴィースラーがドライマン宅を出て階段を少し降りると、「大きなサボテンを入れた花瓶を両手で」抱えて、「突然マイネケ夫人が彼女のドアから出て来る」(ト書き)。〔ヴィースラーのドライマン宅侵入を見ていた。〕

彼女は、「どうかこれ〔サボテン〕を引き取ってください。私はこれと一緒には暮らせません」とヴィースラーに訴える。

すると「ヴィースラーが彼女を非常にきつく見つめるので、彼女は興奮のあまり花瓶を落とす。花瓶は粉々に割れ、サボテンも真っ二つに割れる。マイネケ夫人は茫然とする」(ト書き)。ヴィースラーは「いまあなたはこれ以上何もしてはならない」と冷たく言い放って階段を降りる。

〔「昼間」に「階段を降りる」のだから、彼の当番は 23-11 時シフトになった。2 人のみでシフト当番変更をいかに実現したかは書かれていない。〕

その夜「00:27」に帰宅したクリスタがドライマンに、ハウザーの「西への講演旅行」〔14 節では「文化協定に関する会議」出席〕の不許可を伝えるが、彼はハウザーが「あんなに横柄に行動すれば」当然だと答え、続けて「私の黄色のブレヒトの本を見なかったか」と聞くが、彼女は知らない。

その頃、ヴィースラーが自宅のソファーに坐ってその黄色のブレヒトの本を、「うれしそうに、また興味深そうに」、「ドライマンの声を想像」しながら読み、ナレーター(ドライマン)が詩の一部を朗読する(ト書き)。

〔こうして「黄色のブレヒトの本」をヴィースラーが侵入の際に持ち去ったことが分かる。持ち去る場面は脚本にも上映版にもない。これは窃盗であり、また無意味に露見の危険を冒すシュタジにあるまじき行動だが、作者が描きたい(が、描き損ねる)ヴィースラーの改心に善き人のソナタに加えてこのブレヒト詩集の影響も入れようとしてあえて作者はこの場面を入れたのだろう。しかし逆に、これによってヴィースラーの一般的感情が元々「閉ざされて」(2 節)いないことが示された。〕

14. イェルスカ自殺と「善き人のソナタ」

朝、ドライマンはヴァルナーからの電話に起こされ、イェルスカが「死んだ。彼は昨夜首を吊った」との知らせに衝撃を受ける。〔自殺は脚本では 1984 年 12 月 4 日(火)、上映版では 1985 年 1 月 5 日(土)。〕

彼はイェルスカから贈られた「善き人のソナタ」のスコアを取り出し、ピアノを弾き始める(ト書き)。彼はクリスタに、「私はいまレーニンが〔ベートーベンの〕”熱情”について何を語ったかを思い浮かべざるを得ない。レーニンは“私はそれを聴くことができない。聴けば、私は革命を完遂させられない”と言った。この音楽を聴いた人、実際に聞いた人がなお悪人でいることができるだろうか?」と言う(**図 1**)。

〔この場面について作者は、レーニンがゴーリキーに、「“熱情”をしばしば聞くことはできない」、それを聞くと「優しい愚かなことを言い」、革命成就のために「容赦なくぶちのめさねばならない人々の頭を撫でようとするからだ」と語ったことを根拠とする(Donnersmarck 2007:169f.)。〕

これを盗聴したヴィースラーの「顔にはこれまで決して見られなかった表情がある」(ト書き)。

〔作者はこのト書きによりヴィースラーの改心へのこの曲の効果を強調しようとする。しかし実際にはドライマンはイェルスカ追悼のためにこの曲を弾き、その演奏がドライマン自身の改心とイェルスカ追悼の闘いへの序曲となる。〕

同じ日の夕方、自宅のある建物の 1 階でヴィースラーはボールを持った「たぶん 6 才の小さな男の子」(ト書き)とエレベーターに乗り合わせる。少年が彼に向かって「あんたは本当にシュターージにいるの？」と聞く。

彼は「この男の子をじろじろ見る」(ト書き)。そうしながら、「君はシュタジって何か知ってるのかい？」と聞く。子どもが「ほかの人たちを捕まえる悪い男たちだと僕のパパが言ってた」と答える。

〔少年は「本当に」と確認する質問をしたのだから、父親が少年に、ヴィースラーがシュタジであり、シュタジとは何かを説明したことになる。シュタジや警察だけではなく職場・住民組織も機能する監視社会で、どこで話すかもしれない幼い子に父親がこの説明するのは考えづらい。シュタジが至る所で聞き耳を立てている可能性を誰もが知っていた。今の中国では至る所に目もある(朝日新聞 2020 年 11 月 14 日「濃厚接触者のデート場所も収集？」)。〕

彼は「何という名前、君の…」と、父親の名前を聞こうとして口ごもる。これについてト書きは「ヴィースラーは気付いてやめる。礼儀か？人間性か？」と記す。

〔礼儀か人間性かと記す作者と異なり、ヴィルケは、口ごもりをヴィースラーの改心の「初めて〔の〕実行」と言い、改心の証拠に仕立てる(Donnersmarck 2007:209)。〕

ヴィースラーが「君のボールの名前は？」と言い換えると、少年は「満面の笑みで」(ト書き)、「あんたは面白い。ボールに名前はないよ」と笑う。

先にエレベーターを降りるヴィースラーに少年が「でもあんたは悪い男じゃない」と言う〔上映版ではカット〕。

次の場面では、ヘムプフがグルビッツを呼びつけ、リムジンに「乗れ！OV はどうなってる？」と怒鳴る。グルビッツが「全部やってます、同志大臣。最新の作戦技術をすべての電灯スイッチの下に、トイレさえ。入口部分には措置 C[19] も。我々は何も聞き逃さず、見逃しません」と答える。車が止まり、彼は下ろされ「ちょっと震える」(ト書き)。

〔しかし彼は下記のように、ヘムプフのクリスタとの関係についての情報による反撃を考えている。〕

ヘムプフは走り去る車内で運転手ノヴァックにクリスタの監視を命じる。〔職掌区分に厳密なドイツであり得たか。〕

翌朝シュタジ本部食堂でヴィースラーにグルビッツが「OV の様子は？」と聞く。「特にないが、まだ判断するには早すぎる」という答えに、グルビッツは、ドライマンが親しい「ハウザーに文化協定に関する会議への出国許可を与えなかった」から、何か起こるかもしれないと言いつつ、身を乗り出して「本来知りたいこと」を聞く(ト書き)：「CMS と大臣の間はどうなってる？」。ヴィースラーが「〔デートの〕周期を私が正しく理解していれば、彼らは今夜〔上映版では「明日の夜」〕約束している」と答える。

グルビッツは「それはよかった、よかった。我々二人はこの恋愛沙汰で多くを得ることになる…あるいは失うことになる。それを忘れるな」と諭す。〔「得る」のは大臣の弱みを握る場合、「失う」のはスキャンダルで大臣が失脚し彼らも連座する場合か？〕

その時一般職員用の席に「数日前に」シュティグラーと同席したグループがいて、グルビッツらのほうを「怒って覗くが、すぐに目を逸らす」。シュティグラーはいない(ト書き)。

グルビッツはそっちをちらっと見てから、「面白がって」(ト書き)ヴィースラーに、シュティグラーの〔地下室開封係への〕「強制配置転換を命じたこと」を知らせる(上映版ではカット)。〔のちにヴィースラーも同じ目に遭う。〕

15. クリスタのドライマン批判とヴィースラーのクリスタ説得：二人が改心する

木曜日夜、ドライマン宅で彼がクリスタに、「これまで孤独と書けなくなること」だけが不安だったが、「イェルスカの死以来」そんなことより、「君なしになることだけがまだ不安だ」と愚痴る。〔ドライマンが「むごい真実」を見た金曜日夜(12 節)の翌週の木曜日である。〕

するとクリスタは、彼の「頭〔上映版では肩〕を撫で」、「冗談に聞こえるように努めて」(ト書き)、「でも今夜は恐れちゃダメよ。私は 2-3 時間だけ出かけるから」と言う。

ドライマンが「動かずに非常に真剣に」(ト書き)「どこへ」と聞き、彼女が「ちょうど今市内にいる女性同窓生と会うの。彼女は…」と答えるのをさえぎって、「本当か、クリスタ？」と聞くので、「彼女は驚いて彼を見つめる」(ト書き)。

彼は、「君がどこへ行こうとしているか私は知っている。お願いだ、行くな。君には彼〔ヘムプフ〕は必要ではない」、穏やかに、しかし断固として(ト書き)「私はクスリのことも、君が自分の芸をあまりにわずかしか信頼していないことも知っている。少なくとも私を信じよ、クリスタ・マリア！」と言い、「彼女の肩に手を置く」(とト書きにあるが、上映版ではそうしない)。「君が偉大な女優だ」ということを私も観客も知っている、「思い詰めて」(ト書き)、「君に彼は必要じゃない！ここにいて。彼のところへ行くな」と説得を続ける。

すると、「クリスタは驚きからゆっくり覚め」(ト書き)、「行くなって？…私は彼を必要しない？私はこの体制全体を必要としない？ではあんたは？ではあんたもそれを必要としないの？」と反問し、攻撃に移る：「けれどもあんたも同じように彼らとベッドに入っているんじゃないの？あんたはなぜ

---

[19] 措置 C は正しくは措置 D(Maßnahme D、ビデオ監視)で、措置 A や措置 B(6 節)とともに、第 XX/7 部ではなく、大臣直轄の第 26 部(Abteilung 26)の業務であった。同部はほかに措置 T(テレックス統制)、措置 X(西側による盗聴の防御)を担当し、措置 S(化学・放射性物質による対象のマーキング)も分担した。

措置 A は「ドイツ郵便〔東独〕のコントロールセンター」において、そこにいるシュタジ特別投入将校(略語欄 OibE 参照)や IM によってなされ、当初の手書き記録が手動のカセットレコーダー録音を経て 1978 年から自動録音となり、委託に応じて同部の「評価者」が記録を作成し、人物特定のためのデータバンクに「人物と状況と声」が保存された。措置 B は第 26 部の技術者がホテル・拘置施設・住居・ビジネス空間に秘密裏にマイク装置を設置した。

措置 D は外部空間のビデオカメラ監視であり、車両や建築用コンテナなどに設置された。住居・ビジネス空間など室内設置もあり、また外貨向けのインターホテルでシュタジが売春婦を差し向ける際の証拠形成のための設置もあった(Engelmann 2016: 29f.,227,268f.,331)。

第 26 部と無関係に第 XX/7 部が屋根裏部屋で 4 ヵ月も、同時に電話盗聴・住居盗聴・路上ビデオ監視を行ないつつタイプライターによる日報も作ることはフィクションでしかあり得ない。

そうするの？あんたが疑ったことのない自分の才能にもかかわらず、彼らが同じようにあんたを破滅させることができるからだ。誰〔の作品〕が上演されるか、誰が演じてよいか、誰が演出するかを彼らが決めるからだ。あんたはイェルスカのように終わりたくないのだ。そして私もそうなりたくない！だからいま私は行く」。

彼女がマフラーや手袋を手に取り、出ようとすると、ドライマンは「君は非常に多くの点で正しい。私は大きくやり方を変えるつもりだ(ich will so viel anders machen)。しかしお願いだ、頼む…行かないで」と懇願する。「クリスタはそこに立ったまま、躊躇する」(ト書き)。

〔これが**ドライマン改心の瞬間**である。上記最後の下線部分が字幕では「僕はそれを変えたい」とあり、自分ではなく「それ」(何？)を変えることになる。そうではなく彼は彼女に、自分が別のやり方をする(体制のベッドに入らない)と約束した。それは結果的には体制改革志向になるが、言葉自体は自己改革、自分の改心である。上映版も脚本と同じである。どう変えるかは 16 節で明らかになる。〕

この時、23 時ぴったりにウドが「ボス、時間どおりでしょ」と言って入って来る。交代時間のためヴィースラーは盗聴ヘッドホンをはずす。

〔二人の争論は共産圏内で社会主義・共産主義の理念に基本的には共鳴しつつ(従って反体制ではなく)、改革を望む多くの知識人・文化人が直面した課題であった。

シンガーソングライター・ビアマン(Wolf Biermann)は信念を貫く言論を展開して高く評価されるが、西独公演に出た時を利用して追放された。追放 4 年後、1980 年に彼はハーベマン(Robert Havemann)に宛てた詩の中で「私はこっち〔西独〕でほとんど死んでいる」と言い、彼に「とどまれ！」と忠告した(Jäckel 1980:10)。ハーベマンに出国意志はなかった。刑務所に収監されたバーロは出国の勧めに応じたが、のちに後悔した(Bahro 1990:555)。出国同意なしに強制追放された者も少なくない。

「プラハの春」の指導者の 1 人ムリナーシ(Z. Mlynar)は、自宅軟禁状態や肉体労働しかなくなる状況に耐えられず、「人生は 1 回しかない」ゆえに「政治的殉教者」となることをあきらめ、「憲章 77 宣言」を出したあと当局の勧めに応じ 1977 年 6 月ウィーンに出国した(Gorbachev 2002:46)。ビアマン追放 7 ヵ月後であった。出国をあくまで拒否したハベル(V. Havel)は 1979 年国家反逆罪で逮捕、1983 年重病による刑期中断、その後も逮捕があったが、運動を続け、変革に際して 1989 年 12 月 29 日連邦議会によって満場一致でチェコスロバキア大統領に選出された。(以上の事例は青木 2005:98-99,105 から再録。)

国内で批判的言論を検閲の限界ぎりぎりまで展開した人々もいた。東独文学界でその模範とされたのはブラウン(Volker Braun)の「未完の物語」(道家 1980 所収)である。対極には信念に基づき体制擁護のために長期にシュタジの IM となったカント(Hermann Kant)など著名作家もいた。もちろんその中間が多数であった(青木 2020)。〕

交代したヴィースラーは「とても疲れたので、ちょっと壁にもたれかかる。そのあと彼は階段を降り」、「こっそり歩いて中庭を抜け角を曲がる」(ト書き)。

〔このように脚本は、ベルリンの古い賃貸住宅に多い、中庭のあるロの字型の作りを想定したが、上映版では建物から直接歩道・車道のある道路に出る。〕

彼はドライマン宅から「クリスタが出てくるかどうか」が気になって「全く落ち着かない」。そこで「道路の向かい側の広告塔のうしろに隠れて」観察する〔上映版ではカット〕が、散歩で通る人が彼を怪しむので、そのまま「そこに立ち止まるのはあまりに危険だと彼は気付く」(ト書き)。

そのため彼は「繰り返し振り返りながら」歩き、あるバーまで来る。再びドライマン宅建物のほうを見ていると、バーから出てきた酔っ払いが「何をそんなにみつめてるんだ？」と言いながら彼を「攻撃的に見つめる」。そのため「これ以上怪しまれないように」彼はバーに入る(ト書き)。

バーは地下にある。ト書きはバーの内装を「リノリウムの床と醜い木目風の羽目板」と描く。〔ほかでも貧しさに対して露骨に軽蔑的な形容詞を使う。傲慢さがブンディ(西独人)の特徴だとあるフランス知人が非難した。〕

ト書きではバーに 10 卓あり、うち 2 卓のみに客がいて、ヴィースラーはいちばん離れた席に座る。しかし上映版ではカウンターの両端に 2 人連れと単独が離れて座り、3 卓あるうち入口近くに 1 人が座り、そのすぐ前のテーブルにヴィースラーが坐り、ウォッカを 2 杯立て続けに飲む。

偶然遅れてクリスタが入ってきて、彼の前(奥側)のテーブルに彼に背を向けて坐り、コニャックを注文し、「苦労して」だが、「一気に飲み干す」(ト書き)。

ヴィースラーは彼女だとすぐ気付き、「少し酔いながら」(ト書き)立って行き丁重に「奥様」と話しかけ、「邪魔しないで。独りでいたいの」と言われると、「ジーラントさん」と呼びかけ、「あなたは私を知りませんが、私はあなたを知っています」と言い、「少しよろめきながら彼は彼女のテーブルに坐る」(ト書き)〔上映版では対座〕。

ヴィースラーは、彼女の舞台を見たことがあるが、「そこではあなたはあなたである以上…あなたが今そうである以上だった」と、〔2 杯のウォッカのせいか、もつれながら〕称える。「クリスタは、彼のぎごちない表現と彼女を喜ばせるその中身にほほえむ。ほほえみながら、皮肉っぽく」(ト書き)「あなたは私がどんなふうか知ってるの？」と聞き、彼は「だって私はあなたの観客です」と答える。

だが「クリスタは彼を一瞬見つめてから、慌てて出かける用意をする」(ト書き)。彼女がこれから「古い学校女友だちに会う」と言うが、ヴィースラーに、「あなたは〔今の〕あなたそのものでは全くなかった」と言われ、「クリスタは少し躊躇してから、財布を再び置き、サングラスを外す」(ト書き)。

「ヴィースラーは彼女を面と向かって見る。彼女はとてもきれいだ」(ト書き)。クリスタがヴィースラーに、「あなたは何を考えているの？彼女は誰よりも愛している人を傷つけるだろうとか、芸のために身を売るだろうとか？」と言う。〔見ず知らずの彼に、しかも彼がこういうことを言い出していないのに、女性のほうからこんなことを言い出すだろうか。〕

彼女の苦悩にヴィースラーが、「身売り？芸のため？あなたはすでに芸を持っている。それは悪しきビジネスでしょう。あなたは偉大な女優だ。どうしてあなたはそれがわからないのか？」と言う。「クリスタは考え込んで彼を長い間見つめる。〔それはドライマンと同様の言葉だったにもかかわらず〕彼女の顔から苦悩のうちの多くが消える。彼女は二三の硬貨をテーブルにおいて立ち上がる」(ト書き)。

〔「苦悩のうちの多くが消える」。これがヘムプフ、つまり体制への身売りをやめるという**クリスタの改心の瞬間**であり、ドライマンの改心に続いた。かくて二人の愛が深まる。〕

彼女は「あなたは善き人ね（Guter Mensch）」と言って出ていく。〔字幕では「いい人ね」だが、「善き人のソナタ」と掛けられた言葉なので、「善き人ね」にした。〕

〔クリスタが「善き人ね」と言った時、脚本には書かれていないが、ヴィースラーは、ドライマンが弾いた「善き人のソナタ」やそれについてのレーニンの言葉を想起しただろう。しかし作者の意図と異なり、改心したのは愛し合う二人であり、彼らは初めてそれまでの政権追随から脱し自由な批判的立場に、同時に真の愛に到る。ヴィースラーに改心はなく、繰り返すが、彼は終始、社会主義・共産主義を信じ、その敵には「非人間的」に対処する（従って彼に民主的自由主義の信念はない）が、一般的な道徳観や敵以外への同情・愛情心はあると描かれている。〕

「彼女がバーを去り、ドアが閉まると、彼女がそこにいたということがもはや殆ど信じられない。ヴィースラーがあとに残っている」。その夜、「クリスタはベットの中でドライマンの腕の中にいる。おそらく初めて彼女はくつろぎ、互いに幸せである」（ト書き）。

夜勤のウドが記した日報によると、「彼〔ドライマン〕も私〔ウド〕も驚く」ことに「約 20 分後（およそ 23：30）」にクリスタが戻り、彼女は「もう決して去らない」と言うので、ドライマンも仕事への意欲を回復した。

翌日昼前に屋根裏に出勤したヴィースラーがこれを読み、彼は「その情景を正確に想像する」（ト書き）。

彼が「いい報告だ」と評価すると、〔居眠りしたことをくどくど弁解していた〕「ウドは褒め言葉に唖然として、椅子から落ちそうになる」（ト書き）。上映版では、ウドは彼を見上げながら「本当に？」と嬉しそうに問い返す。

16. イェルスカ追悼の闘いへ：まず盗聴有無を試す

自殺したイェルスカが「雨が降る」日に「押しつぶされそうな沈鬱」の中で「ベルリン郊外の墓地」に埋葬される（ト書き）。葬儀の場でドライマンが「何かすべきだった」と言うと、ハウザーが「まだいつでもできる」と励ます。「この言葉がドライマンの心に種を撒いた」。「古くからの儀式」を見ながらドライマンの「脳裏」に、ある文章が浮かぶ（ト書き）。

〔「やり方を変える」という彼の約束（15 節）の具体化が「ある文章」であり、シュピーゲル誌寄稿の原型になるが、同寄稿自体の詳細は描かれない（17-18 節）。〕

「ある文章」（上映版もほぼ同様）の概略は以下の通り：「国家中央統計局[20]はすべてを数え、すべてを知っている」が、「数えることができない事柄はそこ〔統計局〕では把握されない」。「それは“自由死”（Freitod）〔=自死〕だ」。数え得ないのは「おそらくそうした数字自体が官僚たちを傷つけるからだ」。統計局に「電話し、絶望がエルベ川とオーデル川の間、バルト海とエルツ山地の間で、何人を死に追いやったかを尋ねるといい。するとわが数字神託所は答えずに多分あなたの名前を、シュタジ、わが国の保安と幸福のために努力するあのグレーの紳士たちのために正確にメモする。1977 年にわが国は自殺者を数えることをやめた」。自由死は殺害と無関係なのに「彼らは自殺者と呼んだ」。自殺者を「数えるのをやめた時、〔東独〕より多くの人が自由死をする国がヨーロッパの中に 1 つだけあった（ハンガリー）」。「この数えられない数字の一人が偉大な演出家イェルスカである。彼は 12 月 4 日〔上映版では 1 月 5 日〕に首吊りをした。私は今日彼のことを語りたい…」。

ここには自殺者数の順位とあるが、寄稿では正しく自殺率の 1 位と 2 位に正される（18 節）。

〔「エルベ川と…山地の間」は東独の東西北南の各境界の間、従って東独全土を意味する。字幕は「東ドイツの国境で」と訳し、国境での出来事のように誤解した。

東独は実際には 1977 年に自殺数を数えなくなったのではなく公表をやめただけであり、現に最後の東独統計年鑑 1990 年版が 1980-89 年の自殺統計を載せた（S.436）。のちに全面公開された統計などに基づき Young（2014）が東独の自殺問題を詳細に研究した。〕

ある日ドライマンはこの追悼文章について相談するためにハウザー宅を訪れる。ドライマンは「すぐ本題に入り」（ト書き）、「統計を入手しようとした…」と言いかける。

ハウザーがすぐ遮り大音量でレコードを掛け、ドライマンに「愚か者〔ハウザー〕がここで、あっち〔西独〕のための講演を練習した」〔そのため西独旅行が不許可〕と言い、「小型盗聴器があり得る多くの箇所」を指し示し（ト書き）、「それ以来私は非常に音楽好きになった」と続ける。

ドライマンは自宅を提案するが、ハウザーは紙に「15：00 トイフェル湖のボート乗り場」と書く。ヴァルナーも呼ぶ。

〔上映版では「15：00 パンコウ追悼碑」（字幕には「パンコウ公園」）になる。ボートによる撮影は費用がかかるからだろう。「パンコウ追悼碑」はパンコウ区のシェーンホルツァー・ハイデ国民公園（Volkspark Schönholzer Heide）内の北西端にソ連が戦勝後すぐに建てた「ソ連兵追悼碑」（Sowjetisches Ehrenmal）のことである[21]。〕

そこにはハウザー担当のアンディが監視に来るが、隠れにくいため離れている。ドライマンはハウザーに追悼記事を「西で…君の助けで」公表したいと、相談する。ハウザーはクリスタには「秘密にしておくという条件付きで」承諾し、シュピーゲル誌への匿名掲載と同誌編集委員ヘッセンシュタイン紹介を提案し、匿名に抵抗するドライマンに「辛辣に」（ト書き）、「48 時間尋問」や独房の様子、孤独に耐えられず尋問呼び出しさえ喜んでしまうことなどを説明する。

「急にかなり激しく雨が降り出す。雨がますます強くなる」（ト書き）。そこでドライマンが、自分は「国家賞受賞者」であり、「マーゴット・ホーネッカーの個人的友人」でもあるから、「シュタジ〔の盗聴〕はない」ので、自宅で相談しようと言い出す。〔上映版では雨のせいではなく「寒い」から。〕

「懐疑的」な（ト書き）ハウザーは、盗聴の有無を「調べることができるアイディア」として、ドライマンらも周知の「金色の大型メルツェデスで毎土曜日西ベルリンからやって来る私のおじ」の協力による芝居を提案する。

---

[20] ドイツ語名は略語「東独統計年鑑」参照。上映版にあるようにバイムラー通り（Hans-Beimler-Straße）にあった。これは東ベルリンのアレキサンダー広場に道路を隔てて面した東独旅行公社（Reisebüro der DDR）本社ビルの東側の広い通りである。

[21] この追悼碑は S バーン駅「ヴィルヘルムスルー」（Wilhelms-ruh）の近くだが、当時はこの駅との間に壁があった。ソ連は戦勝後すぐベルリン市内に 4 つの追悼碑を建てた。残る 3 つはトレプトウ（特に広大で、女児を抱き、剣でハーケンクロイツを砕く巨大な兵士と悲しむ故郷の母の像が有名）、ティーアガルテン（ブランデンブルク門に近い西ベルリン側にあり、武装した赤軍兵士像や戦車、大砲がある攻撃的な追悼碑）、パンコウ区ブッフに建てた。それらは今も維持されている。

提案通りにドライマン宅で、彼とヴァルナーとハウザーおじが、ハウザーおじの車の改造された後席の下にパウル(ハウザー)を隠してハイネ通り国境検問所(**図 7**)を通る、アンディはハウザーが家にいると思っているなどと話す。〔実際にはハウザーは乗っていない。〕

図 7 ハイネ通り国境検問所トラック入口(1986 年)

(注)ハイネ通り(Heinrich-Heine-Straße)検問所は西独市民の通行と東西ベルリン間の物流・郵便物の検問所であった。
(出所)commons.wikipedia (CC BY-SA 3.0)

ハウザーおじは、検問所では「車の車軸(Achsen)の下」(字幕は「アクセルの下」と誤訳)を鏡で見たり、排気管を叩いたりするが、後席の下は見られないとも言う。

〔実際には各検問所は人や物を隠して通る「通り抜け」[22]発見のために選別して後席も調べた。私も色々な検問所の多数の出入りのうち一度だけ、西独本土からの入国の際に熟睡中の子どもたちを下ろされ後席を上げられた。女性係官(シュタジ)は非常に丁重かつ申し訳なそうであったが、「寝てるのに」と言っても妥協はなかった。〕

ハウザーおじの発言を聴いた「ヴィースラーは、囚われた虎のように屋根裏で行ったり来たりする。彼は顔をこする。非常に興奮しながら彼は再び机に歩み寄り」、「MfS の電話番号簿」にあるハイネ通り国境検問所の番号に電話し、「一度だけベルを鳴らすが、再び受話器を置き、座ってぼんやり前を見つめる。それは彼にとって重大な瞬間、決心の瞬間であるが、破れかぶれの瞬間でもある。ゆっくり彼はヘッドホンを再び付ける」(ト書き)。上映版では検問所係官が電話に出るが、ヴィースラーは無言のまま電話を切る〔その映像はぼんやりではなく思い詰めている〕。

「3 時間後」にハウザーおじが、芝居の締めくくりとして、無事通り抜けたと電話してくる。

〔東独当局にとって逃亡や出国申請は最重要難題の 1 つであり、その防止・抑制はシュタジの重大任務であった(詳細は青木 2009)。だから逃亡見逃しを「破れかぶれ」の結果と設定するのは、党とシュタジに忠実なヴィースラーにふさわしくない。東独は反体制派の強制追放を再三実施したし、ヴィースラーもドライマンの FAZ 購読発見の際に監視露呈回避のため見逃しを提案した(9・24 節)のだから、反体制派であるハウザーの逃亡ゆえ盗聴露呈回避を優先して見逃すという設定のほうがましだろう。〕

この場面の最後にヴァルナーがドライマンに「我々がそもそもここ〔ドライマン宅〕で一緒に何をしているかを誰かに質問されたら、なんと言おうか」と聞く。

〔奇妙な質問である。盗聴がないことを確認した直後に「誰かに質問された」場合を心配することはない。これは下記会話をヴィースラーに聞かせて彼が作る虚構日報の材料にさせるために無理に作られた質問だろう。〕

この質問にドライマンが「DDR〔建国〕40 周年の脚本を書くのを君らが手伝っていると言おう」と答え、「ヴァルナーはそのアイディアを愉快だと思う」(ト書き)。上映版では脚本作成をドライマンが、「40 周年記念」〔4 年半以上も先である〕という名目をヴァルナーが提案し、両者が合意する。〔この合意を利用して 17 節以後、ヴィースラーはドライマンの寄稿作成を 40 周年脚本制作と偽る日報を作る。〕

同じ頃クリスタは歯科医院へ行き、看護婦に治療中と見せかけながら、医師から「紙幣」と交換にアポノイロンの小瓶 2 つを受け取り、すぐ 2 錠服用する。

17. シュピーゲル誌ヘッセンシュタインとの寄稿相談

盗聴がないと確信したドライマンは自宅でハウザーとともに、シュピーゲル誌への寄稿について同誌のヘッセンシュタインと相談する。

ヘッセンシュタインは「なぜ 1967 年の〔自殺〕率が最高だったのかは我々西の者に理解できる〔なぜ?〕が、1977 年〔自殺統計公表取り止め〕についてはあなたが<社会的事情を>説明しなければならない」と要請する(<>内は上映版から補足)。

字幕はヘッセンシュタインの要請を 1967 年数字についての説明とするが、間違いである。

ドライマンは「これは文学的な文章」で、「ジャーナリスティックな扇動文書ではない」と反論する。ヘッセンシュタインが「テキストはすばらしい」が、西独でも「正しく理解される」ようにしたいだけだと言うと、ドライマンは了解する。

ヘッセンシュタインは「我々が持っている資料を届けさせる。2 週間であなたはそれを完成させられるか?そうすれば私はあなた〔の寄稿〕を〔1985 年〕3 月最初の号に持ち込むことができる。たぶん巻頭特集としてだ」と言う。

〔同誌には毎号冒頭に「Titel」と銘打つ巻頭特集があり、その関連写真が表紙を飾る(この場合は**図 9**)。〕

この一連の会話の途中でハウザーが「いずれにせよ、それ〔=寄稿〕はセンセーションになるだろう」と口を挟んだ。すると屋根裏のヴィースラーが「驚いて目を丸くする」(ト書き)。「ハウザーだ、これはハウザーだ…」とつぶやく。

その場にまだいた勤務明けのウドも「明らかにハウザーです」と言う。ヴィースラーは「むしろ自分に」(ト書き)、「彼が西にいない…」と言うので、〔逃亡芝居を知らない〕「ウドはヴィースラーの頭が変になったかのように彼を見つめる。ヴィースラーはしばしもはや世の中を理解できなくなる。それから彼は怒り狂った表情で盗聴を続ける」(ト書き)。

ドライマンらの会話についてヴィースラーが「彼らはいっしょに戯曲を書いている。〔建国〕40 周年祝賀のためだ」との虚構を主張するが、ウドがそうは思えないと抵抗する。ヴィースラーは「考えることはあなたの上司に任せなさい」と言って黙らせ、ウドは「分かりました、同志大尉」と応じる。

---

22 通り抜けはトンネル掘削と並ぶ逃亡援助ビジネスの主要手段であり、対西独本土国境の自動射撃装置を暴露して名を馳せたガルテンシュレーガーも一時期このビジネスに格安かつ無事に従事したが、露見すると重罪になった(青木 2018:7 節)。国境検問所は旅券・荷物検査に加え、通行車両の多さや西独の検査緩和要求、CSCE の圧力などのため選択的ながら、人・物の隠匿発見のため後席下、トランク、エンジンルームを検査し、差し込みやすいように棒の先に付けた車輪付き鏡で車体下を調べた。

ヘッセンシュタインとの相談が終わる頃にクリスタが帰る。彼女にドライマンが「我々…ハウザーと私はいっしょに共和国 40 周年記念戯曲を書こうとしている。シュピーゲル誌がたぶん予めそれについて報道してくれる」と偽りを言う。

これを盗聴した「ヴィースラーはドライマンについて首を振る。彼は、ドライマンがクリスタを信用していないことに落胆する」（ト書き）。他方ヘッセンシュタインは、ドライマンがクリスタに寄稿を隠したことについて、「あなたの用心を称賛すべきだと思う」と称える。

彼は「関連して私はあなたにちょっとした物も持ってきた」と言いつつ、「古風な贈り物かご」を「ドライマンとハウザーが驚いて見る中、みずから開ける」。「その中には〔全部が〕セロハンで包まれた大きなタルトと果物、フォアグラ瓶詰め、シャンパンが入っている」。そのうちタルトの箱の二重底の間には「とてもきれいで小さなグロマ（Groma）の旅行用タイプライター」〔**補注 c**〕が入っている（ト書き）。

ドライマンが「すでにタイプライターを持っている」と言うと、ヘッセンシュタインが「その字体はとっくにシュタジが把握している。あなたのタイプライターで書かれたこの文章が国境で取り上げられると、あなたが翌日ホーエンシェーンハウゼン〔拘置所〕にいることになる」、「残念ながら」このタイプライターに使えるインクリボンは赤色しか入手できなかったと言う。〔作者は特別の理由（下記）があって赤色を選んだ。〕

ヘッセンシュタインはさらに、「このタイプライターを隠すことのできる場所があるか」と確認し、「使用するごとにそれを隠さねばならない」とドライマンに念を押す。

以上の相談後に初めてヘッセンシュタインは「この部屋は本当に安全か？」と聞く〔当然来訪前か直後に確認すべき〕。ドライマンが「安全だ」と答えハウザーが保証する。

用件が済みヘッセンシュタインが乾杯のため「あなた方が全ドイツ（Gesamtdeutschland）に DDR の本当の様子を示すことに！」と言う。「この乾杯の辞をドライマンは喜ばないが、不快さを抑えて笑顔で応える」（ト書き）。

〔ドライマンの「不快さ」の原因は「全ドイツ」という言葉にある。この言葉は多義的だが、戦後は西独の「連邦全ドイツ問題省」（1949-1969 年）が示すように、東独を国家承認しないことを意味した。新東方政策開始に伴い西独はこの省を「連邦ドイツ内関係省」（BMiB または BMB）に改称したが、やはり東独を国際法上ではなく行政法上の承認に留め、「ドイツ内」の関係とし、東独も妥協した。〕

ヘッセンシュタインがシャンパンのコルク栓の留め金をはずし栓が飛び、〔盗聴器が仕込まれた〕「電灯スイッチのすぐ近くの壁にぶつかる」。その音が「ヴィースラーを一瞬ぎくりとさせる。彼は怒り狂った顔つきでそこに座っている。彼の中ではある憤激した決心が熟す」。

この少しあとヴィースラーはシュタジ本部にグルビッツを訪ねる。グルビッツは電話中で、「もし奴が IM の正体を暴くなら」教区集会どころか「教会全体も閉鎖される。それは簡単だ」と怒鳴っている。

〔教会は彼の管轄外であり[23]、このようなことはあり得ない。仮に教会担当であっても 1980 年代半ばの東独で、圧力行使はともかく、教会閉鎖は「簡単」では全くなかった。国内では言論・集会の自由の場として集まる市民、特に若者が増え、国際環境としては西独との基本条約、国連人権規約、とりわけ CSCE プロセス（全欧安保協力会議フォーロアーアップ過程）の圧力が強まったからである。〕

電話中なのに彼はすぐ手招きで執務室にヴィースラーを入れる。電話終了後グルビッツは、〔審査者を〕「教授グルビッツ」とする法科大学の博士申請論文を見せ、「すごいだろう、どうだ？」と自慢し、論文内容を長々と語った末に、ようやく「何しに来た？ドライマンのケースで発展があったか？」と聞く。〔グルビッツの描写が巧みである。〕

ヴィースラーは、OV ラツロを縮小し、〔彼の虚構を疑った〕ウドを外して、自分がドライマンを彼の自宅外も含めて機動的に監視することを提案する。しかし説明を聞いたグルビッツは怪しみ、「君は何かを私に隠しているな」と言って、「ヴィースラーをまじまじと見る。ヴィースラーはその視線に耐えねばならない。一種の決闘」（ト書き）である。

結局グルビッツは「突然身を乗り出して」（ト書き）ヴィースラーに「君の好きなように…ウドは引き上げ」て「教会の件にうまく使うことができる。しかし申請を文書で私に出せ。私がそれを事後的に許可することができる。理由として“容疑事実欠如”と書け」と命じ、「我々はもう学生ではない。プロジェクトで重要なのはメモではなく成果だ」と念を押す。持参した〔虚構記載の〕日報を入れた「封筒をまだ持ったまま」、「ヴィースラーはうなずき部屋を出る」（ト書き）。

〔「容疑事実欠如」であれば OV 開始自体がおかしい。「あまりに僅か」（24 節の OV 文書）でも同様である。〕

「早朝のドライマン宅」ではハウザーやヴァルナーの協力のもと、ドライマンがシュピーゲル誌向け原稿を作成している。それを盗聴するヴィースラーは日報に「ラツロはハウザーとヴァルナーに建国記念戯曲の第１幕を読み上げる」と〔成り行き上引き続き虚構日報を〕記す（ト書き）。

ドライマンは書斎ドアの敷居を上げ、その下にタイプライターを「格納する」。「その際彼は何度もインクリボンに触れ、手が赤色に汚れ」、その赤色が付いた原稿も「開口部に押し込む」。「ヴィースラーはこの物音を聞き分けられず、眉を寄せて神経を集中しても理解できない」（ト書き）。

上映版ではタイプライターの上に乗せた原稿に写る赤色の指跡にドライマンが気付き、指をまじまじと見る（**図 8**）。

図 8 ドライマンは赤いインクリボンにさわった指で用紙に触れ（a）、指をまじまじと見る（b）

（出所）©邦画 DVD

〔のちに同じ赤色の指跡がヴィースラー作成の最後の

[23] 「教会と宗教団体」は第 XX 局第 4 部（HA XX/4）の担当であった。グルビッツが教会に手を出すことは、第 XX/4 部長だけではなく当時の第 XX 局長キーンバークの怒りにも触れることになる（Auerbach 2008:133）。

OV 日報にも付くことによって、ヴィースラーこそが自分たちの「守護天使」であったことをドライマンが知る(24 節)。稀にしか使われない赤色インクリボンを作者が選んだのはこの筋立てのためである。〕

場面が変わり、クリスタが歯科医院から出て「あたかも監視されていないかどうか確かめるかのように辺りを見回す」。それを〔ヘムプフの指示により〕ノヴァックが「道路の向かい側の彼の車」から監視し、医院名をメモする(ト書き)。

〔この場面で分かるのは彼女の通院先のみである。彼女が「辺りを見回す」からといって同医院での違法薬物入手、ましてや次回入手のための来院予定は把握できない。しかしヘムプフは次回日時の情報をグルビッツに告げて彼女の処理を命じる(19 節)。ノヴァックがその情報をいかに入手したかは 19 節で推測する。〕

ドライマン宅では彼がシュピーゲル誌寄稿を仕上げ、「プラテンから用紙をはずし再度最後の部分を通読する。彼は満足である。彼は立ち上がり、タイプライターやその他の資料を手に取り」敷居の下に隠そうとする。その時クリスタが帰宅し、それを目撃してしまう。「ドライマンは…この不運な出来事に頭を横に振る」(ト書き)。

〔この場面がクリスタの自白と自殺をもたらす(20・21 節)が、それは作者の女性観のせいでもある。〕

その日の夜のドライマン宅寝室での以下の会話のうち最後の部分以外は上映版ではカットされた。

ドライマンが、眠るクリスタの「肌と鎖骨のかすかな傷跡とをなでる。彼女が目を開ける」(ト書き)。彼が、傷跡を「特に愛している」、過去に旅して 12 才の彼女の市電線路での自転車転倒事故を防ぐことができたら「この傷跡なしでいなければならない」と〔フェティシズム的なことを〕話す。

クリスタは、「市電線路では全くないことをあんたは知ってるでしょ」と言ってドライマンを驚かせつつ、それは事故ではなく、ピオネールの「グループ会議議長」が彼女にほれたが、彼女は相手にしなかった、そのため彼がわざと彼女をアスファルトに転倒させた、しかし彼女の男性教師が「市電線路」での転倒と報告し、「私は社会主義の名においてこの作り話を守ることを義務づけられた。私の初めての権力との遭遇」だったと説明し、「私がこのことを話したのはあんただけよ」と言う。〔カットは以上。〕

「彼は彼女にキスし、再度彼女を見つめ、〔寄稿内容を話す〕決心をする」(ト書き)。「我々が書いているのは戯曲ではない、クリスタ」と彼が言い始めると、クリスタは「私に言わないで！たぶん、あんたの友人たちが言うように私は本当は信用できない」と言って、ドライマンを止める。彼女は「より優しく」(ト書き)、「私は今はすっかりあんたのそばにいる、何があってもいい」と言う。

盗聴していたヴィースラーは「悲しげにうなづく」(ト書き)。

同じ時間に、「権力」でクリスタをものしようとするヘムプフがホテル〔メトロポール〕の「殺風景な部屋で深い悲しみに沈んで大きなダブルベットの前の椅子に腰掛けている」〔がっくりとうなだれている〕。彼は、彼女が「決して二度と来ないだろうということを理解する」(ト書き)。

次の場面(昼間)では、ヘッセンシュタインがドライマン宅に原稿を取りに来て、それを「全く古典的なやり方で彼の書類カバンの裏張りの裏側に詰め込む」(ト書き)。

〔脚本の設定では、彼は無事原稿をシュピーゲル誌編集部に持ち帰るが、そこにシュタジの IM がいる。〕

18. シュピーゲル誌匿名記事騒動勃発

ヘッセンシュタインに原稿を渡した「1 週間後の夜」、ドライマンとクリスタが「“ターゲスシャウ”[24]を見ている」。すると「突然背景に“シュピーゲル”誌の表紙が挿入される。そこにハンマーと鎌、ロープが見られる」(ト書き)(**図 9**)。

図 9 西独テレビニュース

(注)国旗の下に「DDR:秘密の自殺統計」、表紙下に「両独関係」とある。(出所)©邦画 DVD

〔「ハンマーと鎌」は作者のあまりのずさんさの例である。ドイツ流の三色旗である東独国旗の中心に描かれた国章には、ソ連と異なり、鎌はなく、ハンマーとコンパスがある。それらの回りの麦穂の冠はソ連国章に類似である(**図 9**)。同誌表紙は国章の上に首吊りロープを描いた。〕

アナウンサーは、「両独関係が緊張。今日シュピーゲル誌が巻頭特集として、ドイツ民主共和国における自殺についての匿名の東独著者の文章を公表した。きっかけは、最近の東ベルリンの演出家イェルスカを含む一連の有名な東独芸術家たちの自殺であった。イェルスカは、のちに大臣になる〔=大臣就任前の〕ヘムプフのもとで実施された 7 年間に及ぶ職業禁止のあと、12 月 4 日〔上映版では 1 月 5 日〕に自殺した。1977 年に DDR は自殺統計の公表をやめた。その年にはハンガリーが唯一のヨーロッパの国として〔東独〕より高い自殺率であった」と伝える。

〔上映版も同様に 1977 年自殺率はハンガリーがヨーロッパ 1 位、東独が 2 位である。字幕は、16 節の寄稿の原型では正しくハンガリー1 位、東独 2 位としたのに、ここでは東独の不公表の「結果ハンガリーが自殺者数 1 位となりました」、従って本来は東独が 1 位とし、またここでは自殺率に変わったことに気付かなかったようである。

1977 年の自殺統計は非公表だから、作者は、ドライマンが知り得た統計を「その年」ではなく「その前年」=1976 年の公表数字(1975 年の数字)にすべきであった。〕

ターゲスシャウの報道が「彼のテキストであることを彼女は知っていることが彼には明らかである」(ト書き)。

〔寄稿のシュピーゲル誌掲載は、6 日または 10 日のクリスタの告白(19・22a 節)以前であるので、ヘッセンシュタインが言ったように 3 月最初の号、3 月 4 日(月)発行の第

24 「ターゲスシャウ」は西独 ARD(第 1 公共テレビ)の年中 20 時からのニュース番組である。国境沿いの東独向け送信網から送られる西独テレビは東独視聴世帯のほぼ 90%をカバーした。ドレスデンやグライフスヴァルトの周辺のみ受信不能，ライプチッヒやマグデブルク，ノイブランデンブルクなどが受信可，他の全域が受信良好であった(Holzweißig 1989:69f.)。

10 号になる（同誌は毎月曜発行）。上記ターゲスシャウも 4 日になる。本物の巻頭特集は第 10 号が「年金危機」、第 12 号が「ソビエトのスター・ゴルバチョフ」であった。〕

ニュースの翌日〔1985 年 3 月 5 日（火）〕午後シュタジ本部。「グルビッツが彼の事務机にこわばって座り、電話をしている。彼は非常に緊張しているように見える。彼の書き物机の上に〔ニュースが報じた〕シュピーゲル誌が置いてある」（ト書き）。グルビッツ：「はい、同志・上級大将（Armeegeneral）。我々は…」と言おうとする。

〔シュタジ内の上級大将は国家保安相（シュタジのトップ）ミールケ（Erich Mielke）のみだから、この電話は彼からである。彼は 1980 年に〔大将（Generaloberst）から〕上級大将に昇格した（Müller-Enbergs 2010:883）。他の上級大将はケスラー（Heinz Keßler）までの歴代国防相 3 人と内相ディッケル（Friedrich Dickel）のみであった。〕

グルビッツの声を、「電話線の向こう側の権威主義的な声」が遮り、怒鳴る（ト書き）。彼は再び「はい、我々は…」と言いかけるが、「再び相手の大声」（ト書き）。

〔こうしたミールケ像を作者は、彼が実施したと言う元シュタジへのインタビューから盛り込んだのだろう。〕

グルビッツが、「同志・上級大将…我々はハンブルクのシュピーゲル編集部内の IM によってオリジナル原稿の青焼きコピー（Lichtpause）を入手しました」と言うと、「電話の相手は興奮」（ト書き）するが、「著者が誰かはやはり分かりませんでした。しかしタイプライターの字体に基づいて我々は…できます…」と続けると、「大声の命令が彼の説明を中断する」（ト書き）ので、「私はそうします、同志・上級大将、成果が…やいなや..」と答えようとする。

〔1985 年には西独でも広くゼロックス複写機が普及していた。IM はシュピーゲル編集部内でこっそりコピーしたのだろうから、そこにゼロックスまたは同種の乾式コピー機がないとは考えられず、なぜ青焼きか疑問である。〕

やはり途中で、「相手〔ミールケ〕は聞き手〔グルビッツ〕にもう 1 つの命令を大声で発し受話器を置く。グルビッツはいらいらしつつ、同様に受話器を置く」（ト書き）。

〔シュピーゲル編集部に IM がいたとすれば、それを工作したのはシュタジ第 II 局（防諜担当）第 13 部（HA II/13）である。第 13 部は「外国のジャーナリスト・特派員の秘密情報機関的監視」担当であるが、そのために自国内だけではなく「作戦地域〔=主に西独・西ベルリン〕内の、および作戦地域への活動」も実施し、「とりわけ西側の出版機関編集部への入り込み〔IM 獲得ないし送り込み〕を目指した」。また外国（人）との接触が多い自国の対外プレスサービス会社「パノラマ」（Panorama）も監視した（Labrenz-Weiss 1998:21）。〕

電話のあとすぐにグルビッツは、待機していた「字体専門家」を呼び入れ、説明を聞く。

字体専門家はコピーの字体から「非常に科学的に」（ト書き）、「輸出限定の最新型国産旅行用タイプライターであり、ほぼ確実にグロマ社〔**補注 c**〕のモデル“ハチドリ”（Kolibri）である」と言い、「見本が黒インクならもっと断定的に言うことができたでしょう」と付け加えた。

〔黒インクの比較対象は、IM が原稿のインクの赤色を伝えたという記述はないから、青焼きだろう。〕

「字体専門家は〔以上で〕彼の仕事は終わったと思う。けれどもグルビッツはもう少し詳細を知りたがる」（ト書き）。

彼が「そのようなタイプライターを誰が持っているのか」と聞くと、専門家は「わが共和国ではどこにも把握されていない」と答える。「どういうことだ。例えばハウザーがそれで書いている？」、「ではヴァルナーは？」と、グルビッツが立て続けに質問し、専門家は「むっとして」（ト書き）、各々のタイプライターのブランドを答える。

そこで「グルビッツは熟考」したあと（ト書き）、「ドライマンか」と言う。「それは質問と言うよりも言明である」（ト書き）。しかし専門家が、彼は原案を手書き、清書は Torpedo 社製〔西独〕だと答える。

最後にグルビッツが「ハチドリ」のサイズを聞き、縦横各 19.5cm、厚さ 9cm と知ると、彼は「こっそり持ち込むには本ほど重くはない…〔字体専門家に〕行っていい」と言う。すぐグルビッツは、盗聴中のヴィースラーに電話して「自殺の記事のことを聞いたか」と聞く。

その時ヴィースラーは、「盗聴しながら、“このグループは多くを書いて非常に疲れている”というこの日の虚構の報告を書いている」最中である（ト書き）。

ヴィースラーがその件をドライマンへのハウザーの電話で知ったと答えると、〔大臣ミールケが怒り狂っているから、〕「ヴィースラー、これはいま非常に、非常に重要だ、私のキャリアにとっても君のキャリアにとっても。誰がその背後に潜んでいるか、彼〔ハウザー〕は何か言及しなかったか？あるいは君が思いつくか？」と尋ねる。

「ヴィースラーは〔返答に〕ゆっくり時間を掛ける。状況は彼にとって明らかに非常に困難である」（ト書き）。口ごもりながらも彼は「いいや、彼は何も言及しなかった」と答える。

するとグルビッツは、「シュピーゲルの編集委員の一人が〔2 月〕27 日に偽名で〔〕ボルンホルマー通り国境検問所を通過し、4 時間こっち〔東ベルリン〕で過ごした。グレゴール・ヘッセンシュタインだ。第 VI 部〔字幕は「6 課」〕が彼をプレンツラウアー・ベルクまで尾行したが、見失った。彼はなんらかの方法でドライマンと接触したか？」と聞く。

ヴィースラーは接触を報告しなかったと答えつつも、「苦しげに息をする。彼の額に汗が浮く」（ト書き）。グルビッツは「もちろんだ」と答えて電話を切るが、すぐ「くそ！」と罵る。

〔プレンツラウアー・ベルクは区の名前（**表 2**）で、最初に壁を開放することになるボルンホルマー検問所も同区にあり、「…まで尾行」はおかしい。同検問所は西ベルリン市民限定であった。「第 VI 部」でも「6 課」でもなく正しくは第 VI 局（国境統制・出入国管理担当）である。〕

19. ヘムプフの復讐：クリスタの別件逮捕と告白

電話を切ったあと、グルビッツはシュタジ本部前で待つリムジンに乗り込み、ヘムプフから紙片を渡される。上映版にはその中身の映像はないが、ト書きによれば「ツィムニー〔歯科〕診療所（Dr. Goran Zimny）、プレンツラウアー・アレー、水曜日 14:20」と書かれている。

〔これは 3 月 5 日（火）のやりとりであり、彼女の自殺が同 11 日（月）（21 節）だから、紙片にある水曜日は同 6 日以外にないが、作者は以後の日付を混乱させる（22a 節）。〕

ヘムプフはグルビッツに、「そこで彼女が非合法の向精神薬を購入するだろう。クリスタ・マリア・ジーラントだ。…あなたの分野に当たる。あなたが彼女を破滅させるか、させ

ないかはあなたに任せる。いずれにせよ私はドイツの舞台で再び彼女が演技するのを見たくない」と言い渡す。

〔むろんメトロポールで待ちぼうけをくらったヘムプフの腹いせだが、東独の文化相であれば「ドイツ民主共和国の舞台で」というはずで、「ドイツの舞台で」とは言わない。〕

「グルビッツは、あたかもその紙片にこれらの言葉以上のことが読み取られ得るかのように、動揺しながらその紙片を見る」(ト書き)。

診療所では〔水曜=6 日 14:20(紙片)すぎ〕、「歯科医がクリスタに錠剤の小瓶を渡し彼女がお金を払い、小瓶の 1 つを開けようとする。その時ドアが開き嫌な看護婦が入ってくる。歯科医はびっくりし“ドアを閉めろ!”と彼女を怒鳴りつける。しかし彼女はドアを開けたままにする。革ジャケットの 3 人の男が彼女を押しのける。シュタジの男たちだ。彼らはクリスタのそばに立ち、彼女の手から錠剤を取り上げ、用意された証拠品袋に入れる。歯科医は驚いて見つめる」。歯科医が「ある別の患者がこの薬をここに忘れた。そしてこのお金…」と言って、「そのお金を彼らに渡す。買収の試みか?投入指揮官は彼を全く無視する」(ト書き)。

〔ノヴァックは彼女の同診療所出入りを見た(17 節)が、薬物購入とその予定日時をいかに知ったかの説明はない。作者は上記の「嫌な看護婦」からノヴァックがそれらを聞き出すと想定し、歯科医に看護婦を「憎悪」させる(下記)。〕

シュタジは彼女に「事情説明のため私についてきてください」と言う。「クリスタは驚いて見回す。彼女は抵抗が無駄だと悟る。死刑を言い渡された者のように彼女は連行される」。「歯科医は看護婦とともに残される」。彼は「憎悪に満ちて看護婦を見つめ」(ト書き)つつ、「次の患者を呼びなさい」と指示する〔従って通常の診察日であることに注意〕。

〔「事情説明のため」と言いながら、映像では彼女は手錠をかけられ、OV 文書(24 節)には「逮捕」とある。また違法薬物取り締まりなら当然歯科医も連行すべきであるが、作者は彼を無罪放免にする。〕

クリスタは「魚運搬車に偽装した護送車」(**図 10**)〔実際の護送車は**図 11**〕でシュタジ本部に連行され、撮影室で正面・左・右 3 枚の写真を撮られ、「荒々しく彼女は腕をつかまれ」尋問室に連れて行かれる(ト書き)。

クリスタが坐るべきスツールに「オレンジ色のカバー」がある(ト書き)。上映版では**図 3** と同じ背もたれ椅子である。

グルビッツは「同志ジーラント…立派なキャリアの終わりか?」などと話しかけるが、違法薬物には全く触れない。

「俳優がもはや出演しないと、何をするのですか?」と彼が問うと、彼女は「媚びて」(ト書き)「私はわが芸術家の殆どすべてを知っている。私はあなた方のために多くのことを見つけ出すことができる」とか、「私たち二人に決して不愉快ではないことがある」と〔IM や身売りを〕提案する。〔作者の考えではクリスタの改心は当てにならなかった。〕

グルビッツは「この提案」に満足しながらも(ト書き)、「残念ながらあなたは有力者を敵にした。…私の自由になることは殆どない」と断る。〔ヘムプフによる報復と知り〕「突然彼女は演技をしなくなる。ただ単にひどい不安による緊張が彼女の表情から読み取られる」(ト書き)。

そこで彼女が「私が自分を助けることができることがありますか?」と聞くと、グルビッツは「1 つだけある…あなたが芸術家や文学者とそんなに多く関わりがあるなら…あなたは先週シュピーゲルに載ったある記事について偶然何か知らないか?自殺者についての記事だ」と言う。

図 10 上映版のシュタジ護送車

(注)側面に「鮮魚」の文字と変な魚の絵、荷室ドアは引き戸。
(出所)©邦画 DVD

図 11 実際の護送車(ホーエンシェーンハウゼン記念館)

(注)荷室は無地開き戸。(出所)Wikipedia. commons, CC-BY-SA

「クリスタはうなだれる。それからヒステリックに笑う。すぐ涙に移る笑い。グルビッツは嫌な気持ちがする。突然クリスタは頭を上げ、グルビッツの顔を直視する」(ト書き)。

クリスタ:「記事はゲオルクによる」。
グルビッツ:「それはあり得ない。それは彼のタイプライターで書かれていない」。
クリスタ:「タイプライターが 2 台ある!」
グルビッツ:「分かった!」

「彼女は彼を見つめたまま、暗黙の承認。グルビッツはその興奮を隠せない」(ト書き)。その日の夜、武装した制服のシュタジ 6 人がドライマン宅の令状による捜索に入る。率いてきたグルビッツ自身は路上に留まる(ト書き)。

〔上映版では武装は見えず、ばらばらの服装である。指揮官は胸にグルビッツとの間の無線装置を下げている。〕

屋根裏の「ヴィースラーは驚いて飛び上がる」。「どやどやという激しい音、ベルの音、“開けよ”の叫び声」など、ヘッドホンから「聞こえることが殆ど信じられない」。モニターを見ると、グルビッツが「カメラのほうを見て嫌みたっぷりに中の方を指し示す」(ト書き)。

結局タイプライターは見つからない。彼らが「書架から投げ出した本」の中に「ソルジェニーツインの本」[25]があり、現場指揮官が入手方法を聞くと、ドライマンは「マーゴット・ホーネッカーからプレゼントされた」と答える。そのため指揮官は「狼狽し、少し不安げな目つきになる」(ト書き)。結局グルビッツが引き上げを命じる。

〔西側の文献や新聞を見つけても押収されないので、彼らが何を探しに来たのか、ドライマンには分からない。ソル

25 上映版の写真によると「Der erste Kreis der Hölle」である(原題 В круге первом、邦訳『煉獄の中で』)。

ジェニーツインの本がホーネッカー夫人の贈り物という設定が実際にあり得たかは疑問である。〕

「ヴィースラーはほっとする」（ト書き）が、ヘッドホンから「明朝 9 時にホーエンシェーンハウゼンであなたを待っている」というグルビッツの「厳しい声」（ト書き）が聞こえる。

20. ヴィースラーの正体に驚き、クリスタが自白

〔翌日〕夜明けにトレプトウ公園でハウザーとヴァルナーがドライマンからの〔捜索とクリスタ不在の〕「説明に聴き入り」（ト書き）、ハウザーは「シュタジがクリスタを引っ捕らえ、彼女が君を裏切った」と言うが、ドライマンは「単に日常的なコントロールだった」、もしクリスタが絡んだとしても、彼女はタイプライターの隠し場所を言わなかったのだから、「我々の最も立派な守護天使だ」と反論する。「ハウザーとヴァルナーは黙って見つめ合う」（ト書き）。

同日午前〔9 時〕、ヴィースラーがホーエンシェーンハウゼンへ行くとグルビッツが第 76 尋問室で待っている。

ヴィースラーが素知らぬふりをして、「君はドライマンに何の嫌疑をかけているのか？」と聞くと、グルビッツは「彼がシュピーゲルの記事の著者だ！」と答え、「誰がそう言い張ったのか？」と聞くヴィースラーを拘置室へ連れて行き、独房の中のクリスタを見せる。その場で「グルビッツは軽蔑するようにヴィースラーを見る。ヴィースラーは黙って、感情を示さないように努力する」（ト書き）。

グルビッツはドライマンの記事執筆を見逃したヴィースラーの「だらしなさ」を責めた上で、「しかし私はほかの君を知っている、とりわけ尋問者として。だから私は君に最後のチャンスを与える」と言って、マジックミラーで仕切られた監視室のある「中央尋問室」へ行く。

グルビッツが「ここで何が重要か分かってるな」と念を押す。〔説明がないにもかかわらずタイプライターが重要と分っているらしく〕ヴィースラーは「君を失望させないだろう」と答え、グルビッツが「君の将来がかかっている」、「君はまだ正しい側にいるか？」と聞き、「そうだ」との彼の答えに「それなら二度と〔チャンスを〕台無しにするな」とたたみかける。

中央尋問室に囚人 662（クリスタ）が連れて来られるが、ヴィースラーは背を向けたまま坐っている。警備員が手錠をするかと聞くと、ヴィースラーは「彼女はもはや囚人でなく IM だ。行ってよい」と答える。クリスタは「遊び半分の調子にしようと努力して」（ト書き）、「ということはあなたが私の“指導将校”なのね[26]。それなら私を指導してね！」と言う。

「ヴィースラーは答えない。彼が彼自身とどのような闘いをするか明らかである〔闘い方=ドライマンは見捨てクリスタに自白させつつ救う〕。彼は回転椅子をゆっくり回して無表情な顔でクリスタのほうを向く。信じられないという表情で彼女は彼を凝視する。彼女は彼を識別する。彼女は沈黙する。それは彼女にとって強烈な打撃である」（ト書き）。

〔「識別」したのだから、ヴィースラーの尋問はクリスタには「善き人」の説得と響いただろう。しかし上映版ではクリスタがこの尋問官とバーで彼女を説得した男（15 節）を同一と識別したかどうかはっきりしない。〕

ヴィースラーは、「どこに証拠物件〔=グロマ・タイプライター〕が隠されているか」を話さないと、「9 時間半以内に」劇場が「あなたは体調が悪く出演できないとアナウンス」し、二度と出演できなくなる、「それはあなたの望みですか？」と脅す。「クリスタは青ざめ、疲労困憊に見えるが、突然非常に若く見える。彼女はただ首を振る」（ト書き）。

少しやりとりしたあとクリスタは「タイプライターはない。それは私の捏造よ」と開き直るが、ヴィースラーが偽証は「約 2 年の刑」だと言うと、「彼女はショックを受ける」（ト書き）。

〔証人の偽証罪は「3 年以下の自由刑または保護観察」か「罰金刑もしくは公の非難」（東独刑法 230 条 1 項、山田 1982:99、以後も同じ）。ヴィースラーは誇張した。〕

「ドライマンはどのみち刑務所に行かねばならない。それにはあなたの証言と我々がすでに彼の住居で見つけた不利な材料で十分だ」、だから「無意味なヒロイズム」を捨てて「少なくとも自分を救いなさい」、「あなたはあなたの観客のことを考えなさい」とヴィースラーが追い打ちをかける。

「この最後の言葉の特別の重要性は彼女には明白である。彼女は傷つけられた視線を彼に送る」（ト書き）。

「グルビッツは〔「重要性」を理解しないので〕速記の女性のほうを」見て（ト書き）、「あなたはあなたの観客のことを考えなさい…だって。はっはっは…彼は実にいつもなにか思いつく」と笑う。尋問室では「誰も笑わない」（ト書き）。

〔上記の「見つけた不利な材料」（上映版も同様）が字幕には「家宅捜索の押収品」とある。しかし「見つけた」だけで、「押収」はしていない。〕

ヴィースラーは「魅せられたように単調に、切々と」（ト書き）、「あなたの全生涯のため」の国家の寄与を考え、「今度はあなたが国家のために」寄与することができる、「そのタイプライターがどこに隠されているかを私に言ってください」、まずあなたを釈放し、ドライマン宅を襲うのはあなたの在宅中にするから、あなたはうまく驚いてみせればよい、「そうすれば今夜あなたは再び劇場にいる。あなたの観客の前に、はつらつと」、「半分の自白は全く意味がない。…証拠はどこに？」と説得を続ける。

クリスタがうなづき（ト書き）、「それは自宅のドアの敷居の下にある」、「書斎と廊下の間。それを上げられる」と言う。

〔字幕には「リビングと廊下の間」とあり、上映版も書斎（Arbeitszimmer）ではなく、リビング（Wohnzimmer）である。アドリブで変えたのだろうが、このあと捜索に来たグルビッツは上映版でも「書斎」と言う。だから一貫性に欠ける。たぶん書斎とリビングが兼ねられている。〕

「今度はヴィースラーが驚いて見る」。〔マジックミラー越しに〕「グルビッツが仰天する」（ト書き）。

グルビッツがクリスタを釈放する。その際彼女に、「あなたは少し疲れているように見える。今ではあなたは IM だ、それは完全な陰謀のような義務、秘匿を意味することを忘れないでほしい。しかし特典もある」と言って、「警備員が気付かないように、彼は彼女〔のポケット〕に「アポノイロン」の茶色の小瓶を押し込む」（ト書き）。

〔彼女から押収した覚醒剤の返却が彼女の IM 協力への「特典」である。**表 3** はミールケ報告（1982 年 10 月 11 日）などによる IM の「動機」である（数字巾の説明はない）。クリスタは利益目当てではないからに脅しが該当する。

[26] 指導将校（Führungsoffizier）は各 IM を指揮するシュタジ将校で、IM の通報（密告）を報告書にまとめた。作家でも IM としてはたとえ担当将校の文学素養が低くてもその指揮に従った。字幕は「指導教官」と意訳したが、将校として指揮する。

作家ラウドン(Hasso Laudon、IM アンドレ)は IM 報酬として東ベルリンの住居という東独では大きな特典を得たが、詳細が判明した金銭報酬は多くはない。彼は利益による IM だとの見方があるが、共和国逃亡未遂の前科を脅されて IM になった面もある(詳細は青木 2020a:10)。〕

表 3 IM になった「動機」(%)

	東独内 IM	西在住 IM
理念	60.5	54～68
利益	27.4～39.9	17～28
脅し	22.1～55.1	0.3～0.8

(出所)Müller-Enbergs 2008:44f.

グルビッツはクリスタ釈放直後にヴィースラーを探すが、副官から彼はすでにホーエンシェーンハウゼンを離れたと聞き、「少し驚いた目つきをする」(ト書き)。

21. ヴィースラーの証拠隠しにもかかわらずクリスタ自殺

ヴィースラーは先回りして(24 節の OV 文書によると 10:50 に)ドライマン宅建物に到着する。監視再開の名目だが、実際は小型タイプライターを取り出し隠すためである。

昼頃ドライマンがハウザーに送られて帰宅する〔前夜の事態を相談したのだろう〕。その時建物から出ようとしていたヴィースラーは、入口内側の隅、つまりクリスタがヘムプフに送られて帰宅した時〔12 節〕にドライマンが「壁にへばりついて隠れていた場所」に隠れ(**図 12**)、「ドライマンが見えなくなった時、彼は急いで建物ドアから外へ出る」(ト書き)。〔上映版ではここから出ていくヴィースラーがタイプライターをうしろに隠し持っているように見える。〕

図 12 ヴィースラーを見過ごすドライマン

(注)隠れるように立つヴィースラー(左)にドライマン(右)は気付かない。(出所)©邦画 DVD。

「ベルリンの通り[27]、昼間遅く」に、「何でもない車に見える護送車がほこりだらけの寂しい通りに停まる。運転手が降りて、門のかかった引き戸を開ける。クリスタが多少おぼつかない足取りで歩道に降りる」。車が走り去り、「少し経ってから彼女は歩き出す」。「彼女のエレガントな衣服とハイヒールが非常に場違いである」(ト書き)。

〔IM を送り届けるには護送車でなく乗用車のほうがよい。上映版の護送車荷台は鮮魚運搬車に見せ、引き戸である(**図 10**)が、ホーエンシェーンハウゼン拘置所記念館に展示の護送車(**図 11**)は無地・開き戸である。前者から「鮮魚」ではなく、「エレガントな」服装の女性が出てくれば誰でも仰天である。東独市民は、材質・デザイン・染色すべてが異なるので西の衣服に強い好奇心を持っていた。私の経験でも、みな目が皿になる。クリスタのコートもハイヒールも同様の好奇の対象である。「寂しい」通りでも住宅からの目があるし、ドライマンの想定住所(24 節)付近の午後に人・車の通行がない通りは見当たらない。〕

「ヴィースラーの車は〔ドライマン宅の〕道路の向かい側に駐車している。そこからは疲れ切って建物の前に到着するクリスタの様子が見られる」(ト書き)。

クリスタの帰宅(24 節の OV 文書では 15:10 頃)に、ドライマンが「びっくりして立ち上がり廊下に行く」(ト書き)と、彼女は「笑って」(ト書き)「近寄らないで!ブランデンブルクのケルシュナー一家にいた。水がなかったから、まずシャワーをしなければ」と言い浴室へ行く。

すぐあと、彼女のシャワー中に、「今回はグルビッツが勝利を確信してみずから指揮する」シュタジ・グループがドライマン宅前に到着し(ト書き)、グルビッツがヴィースラーに「君はホーエンシェーンハウゼン出発をかなり急いでいた」と疑問をぶつける。ヴィースラーは「まだ OV ラツロが続いている」からだと弁明する。しかし「グルビッツは彼をじっと見る。彼は彼の友人をもはや全く信用していない」(ト書き)。

グルビッツが「二人は自宅にいるか?」と聞くと、「ヴィースラーがうなずく。彼はグルビッツに茶色の A5 サイズの封筒を渡」し(ト書き)、「今日の報告だ」と言う。「グルビッツは重要資料のように封筒を受け取る」(ト書き)と、「厳粛にかつ殆ど悲しげに」(ト書き)、「OV ラツロの最後の日報だな」とヴィースラーに言い、折って内ポケットに入れる。

4 人〔上映版では 5 人〕の「突撃班」を率いてグルビッツがドライマン宅に入り、「昨夜捜索がきちんとされたことを確かめるだけのつもりです」と言い、「昨夜よりもずっと穏やかに」、しかしそのため「より不気味に」捜索を始める(ト書き)。

彼は突然敷居に触れ(ト書き)、「一体ここにはなにがあるのだ?」「秘密の仕切りでは?」などと言い出す。彼は「優れた俳優ではなく、彼が情報なしにその隠し場所を発見したとは誰も信じることができない。彼は勝ち誇ったように、硬直化したドライマンを見上げる」(ト書き)。

グルビッツの「視線がさらに動く。白いバスローブを着たクリスタが廊下に入る。するとドライマンが彼女を不信と厳しさにあふれた目で見つめる。彼女はそれに耐えられない。その瞬間にドライマンにとって世界が崩壊する」(ト書き)。

グルビッツが敷居を上げようとすると、耐えられずにクリスタが飛び出し、部下が止めようとする(ト書き)。グルビッツは「ほっとけ。彼女はここでは容疑者ではない」と言う。

彼は敷居を上げたが、「唖然とすることに隠し場所には何もない」(ト書き)。彼は「あの女優め!」と怒る。

〔「女優め!」との怒りはこの時グルビッツが、タイプライターがないことを彼女の仕業(隠したか、虚偽の自白)と思ったということだろう。捜索開始がクリスタ帰宅よりかなり遅ければ、その時間差に彼女とドライマンがタイプライターを隠すか持ち出す可能性がこの作戦の弱点になり得る。しかしグルビッツらはすでにクリスタのシャワー中に到着する(上記)から、時間差は殆どない。実際にはヴィースラーが敷居の下のタイプライターを隠すが、それはドライマンの不在という偶然に依存し、しかもその際二人は建物入口です

[27] Berliner Straße とある。これが「ベルリーナー通り」という固有名詞だとすれば市内に何ヵ所かあるが、ドライマンの想定住所(24 節)の近辺にはない。同じ言葉が明らかに「ベルリンの通り」の意味でも幾つか出てくる(単数・複数両方)。

れ違う(**図 12**)というきわどいが、面白い設定である。〕

「ヴィースラーはクリスタがバスローブに裸足で建物ドアから走り出てくるのを見る。彼女は泣いている。彼女は道ばたにちょっと立ち止まり、そこへ小型トラックがその道路を速い速度で走ってくる。この瞬間に彼女が飛び出す。恐ろしいことになる。通行人が悲鳴をあげる。クリスタはアスファルトを数メートル飛ばされる。トラックはブレーキの大きなきしみ音とともに止まる」(ト書き)。

〔上映版では分かりにくいが、飛び込み自殺(24 節の OV 文書では事故死)である。シュピーゲル誌がこの件を知ってどう対応するかも面白いストーリーになり得た。〕

「ヴィースラーが前に出て彼女の傍らにしゃがむ。血で塞がれた目で彼女は彼だと気付く」(ト書き)。彼女が「私は弱すぎた。私は私がしたことを償うことがもはやできない」と言う。ヴィースラーは「償うことは何もない。分かる？何もない…私がタ…」と、「懸命にささやく」(ト書き)。〔彼は「私がタイプライターを隠したのだから」と続けようとした。〕

しかし「ヴィースラーが話しを続ける前に、ドライマンが人混みをかき分けてきた〔上映版では「人混み」は少数〕。ヴィースラーは引き下がる。ドライマンが彼女の血塗られて力のない身体を腕に抱える」(ト書き)。ドライマンは「パニックになってささやく」(ト書き)、「ごめん！こめん！ごめん！」。

「彼女は首をひねり、血塗られた指で回りに立つ人々の一人を指さし、ヴィースラーを求める(ト書き)。ドライマンは理解できず、すぐに再び彼女に目をやる」。クリスタは「私は…」と言いつつ、「彼女の頭が後ろに倒れる。その時彼女は死んだ。ドライマンは彼女の死体を抱きしめる。殆ど助けを求めるように彼は回りに立つ人々を見上げる。彼の視線が一瞬ヴィースラーの視線と合う」(ト書き)。このシーンも上映版では簡略化されている。

グルビッツも降りてきて部下を本部に帰し、ドライマンに「同志ドライマン。私は投入を終了した。我々は間違った情報を得た。申し訳ない」と謝る。そのあとグルビッツはケペニック区(表 2)にある「ミュッゲル湖畔の高級住宅街」(ト書き)の自宅までヴィースラーに送らせる。

22. 左遷とゴルバチョフの書記長就任、4 年後の壁開放

車内でグルビッツが「あそこ〔ドライマン宅〕で何が起こったのか？」と聞くと、ヴィースラーは「今日は〔盗聴〕機器のところ〔=屋根裏〕にいなかった」から「知らない」と答える。グルヴィッツはさらに「君はどう思うか？」と聞き、ヴィースラーが「あの住居〔の敷居下〕には何もなかったと思う」と答える。するとグルビッツは「それなら我々は裏切られたのか？」と言う。「この発言の曖昧さは未解決のままである」(ト書き)。

車を降りたグルビッツはヴィースラーに、「君は証拠を残すためにあまりにも抜け目なかった」が、「幻想を持つべきではない。あなたの出世は終わった」、「年金を得るまでせいぜいどこか地下室で郵便物開封に従事するだろう。それがこれから 25 年間だ。25 年。長い期間だ」と通告する。

〔「証拠を残す…」は上映版も同様だが、字幕は「証拠〔タイプライター〕をうまく隠してもムリだ」と誤訳した。上記のようにグルビッツにはタイプライターがなぜ消えたかが「未解決のままである」から、それはヴィースラー左遷の理由にならず、しかも理由は隠すことではなく「残す」ことである。ヴィースラーが「抜け目なく」残した証拠は、盗聴した証拠としての虚構日報以外にない。そこではシュピーゲル寄稿が建国記念戯曲に化けたことはすでにグルビッツも知った。ヘッセンシュタインはハウザーおじに化けた(24 節)。また 11 節のように開封係左遷には無理がある。〕

ヴィースラーは「グルビッツが助手席に彼の新聞を忘れたことに気付く。この 1985 年 3 月 11 日号の見出しは“ソ連共産党の新書記長選出：ゴルバチョフ”である」(ト書き)。

図 13 グルビッツが車に残した「11 日」付けの新聞

(出所)©邦画 DVD

上映版では「置き忘れ」ではなく降り際に彼がわざと置き、その紙面映像に出る(**図 13**)。日付表示はないが、上映版でも自殺は 11 日(24 節)だから、日付は 11 日となる。

〔従ってクリスタ自殺は 3 月 11 日、逮捕は 10 日になり、19 節の日付とは 4 日間ものズレが生じる(22a 節参照)。その上新聞の日付を間違えた。こんなことがあるのかと驚く。この新聞は ND であり、ND がゴルバチョフ選出を報じたのは 3 月 12 日である(**図 13a**)。第 1 面左半分はチェルネンコ死去、同右半分がゴルバチョフ選出の記事である。チェルネンコ死去はモスクワ時間 10 日 19:20、ゴルバチョフの書記長選出は同 11 日夕方のソ連共産党中央委員会臨時総会(朝日新聞 1985 年 3 月 12 日)だから、11 日の ND が選出を報じることはあり得ない。同じ紙面の写真が映像にあるのだから、作者も時代考証担当者もその日付を見たはずである。ともにずさんすぎる。

図 13a チェルネンコ死去・ゴルバチョフ書記長就任報道

NEUES DEUTSCHLAND
Dienstag, 12. März 1985
Mitteilung des ZK der KPdSU, des Präsidiums des Obersten Sowjets und des Ministerrates der UdSSR zum Tode Konstantin Tschernenkos
Michail Gorbatschow zum Generalsekretär des ZK der KPdSU gewählt

(出所)ND1985 年 3 月 12 日。

図 14 11 日の紙面はライプチッヒ見本市開幕

NEUES DEUTSCHLAND
Leipzig beweist seine Anziehungskraft als Zentrum weltoffenen friedlichen Handels

(出所)ND1985 年 3 月 11 日。

11 日の ND 第 1 面(**図 14**)は 10 日開幕のライプチッヒ見本市へのホーネッカーら東独首脳の「わがマイクロエレクトロニクス展示」視察記事である。「春季見本市に全大陸から 9000 の出展者」とある。右下隅に「日本との関係が高

い水準に発展」とある。当時両国関係は非常に良好で鹿島が東ベルリンに特別許可の高層の貿易センター、ライプチッヒにホテルを建設し、東ベルリンの電球工場ナルバに東芝の自動製造機が入り、マツダ車も輸入された。〕

「4 年 8 ヵ月後」〔=1989 年 11 月 9 日〕、「ヴィースラーは暗い地下室で特殊な冷蒸気システムによって 1 時間に 600 通の手紙封筒を開封することができる大きな機械の席に座っている。工場労働者のように彼は機械的に封筒を大きな容器に入れる。彼の左右に同様の席が設けられている」。左隣には「風刺小話を語ったシュティグラー〔11 節〕が坐る。騒音と熱で彼は小話を語ることはできないが、…イヤホンで仕事中もラジオを聞いている。…突然彼の表情が変化する。彼は容器にたまった手紙を取り出すのを忘れる。ヴィースラーが訝しげに彼を見つめる。シュティグラーが彼の腕をつかむ」(ト書き)。

彼が「壁が開いた！」〔字幕は「壁が崩れた」〕と言うと、「ヴィースラーが驚いて彼を見つめるので、シュティグラーがイヤホンを外し彼に渡す。ヴィースラーが少し聞く。シュティグラーが正しいことを理解するにはそれで十分である。すると彼の表情が全く和らぐ。彼はイヤホンをシュティグラーに返し、彼の機械の主スイッチに手を伸ばし、それを切る。彼は立ち上がり、部屋を出る。残された者たちがそれを見て彼に続く」(ト書き)。

上映版では 4 人が縦に並ぶ各自の小さな机の前に座り、うち 1 人がベルトコンベアから封筒を取って 3 人に分配し、3 人が開封する。最前席のヴィースラーのうしろにシュティグラーがいる。「騒音と熱」を出す大型機械ではなく、配られた封筒を小さな器具の網目の噴射口から出る蒸気に両手各 1 通ずつ当てて開封する(**図 15**)。「冷蒸気システム」〔たぶん冷蒸気で加湿する気化式加湿器〕だから噴射口からの「熱」はない。「主スイッチを切る」動作もない。彼らが部屋を出てどこへ行くかを脚本も上映版も説明しない。

図 15 地下室での封筒開封作業

(注)網目の穴から蒸気。(出所)©邦画 DVD。

〔郵便開封という重要な極秘作業を問題のある職員たちに実際にさせたかは疑問であるが、そうだとすれば作業は監視されるはずであるし、シュタジは武装機関かつ準軍隊であって、作業中にラジオを聞くとか作業を中断し郵便物を放り出して勝手に部屋を出ていくことはあり得ない。〕

22a. 作者のクリスタ逮捕日時混乱とゴルバチョフの書記長就任報道日の誤り

19～22 節に関連して脚本と上映版にある日付の混乱を明らかにし、その原因を考えたい。

クリスタ逮捕は、ヘムプフ情報(19 節の紙片)では「水曜日 14:20」であり、この水曜日は 3 月 6 日以外にあり得ない(19 節)。彼女へのグルビッツの尋問と捜索はその夜、ヴィースラーによる尋問と自白は翌 7 日(木)午前、彼女の自殺は同 7 日午後のはずである(19-21 節)。

ところが脚本は自殺当日の新聞(ゴルバチョフ報道)を 11 日(月)付けとした(22 節)ので、クリスタの死は 11 日、逮捕は 10 日になり、紙片の日付と 4 日間のズレが生じる。

上映版は新聞日付を出さないが、脚本とほぼ同様に OV ラツロ文書(詳細は 24 節)を紹介し、そこには「10 日 21:20 に大臣ヘムプフの情報で」クリスタ逮捕、翌日「事故死」などとある。この「情報」は紙片を指すにもかかわらず、逮捕の日時が紙片とは異なり、分のみ一致する。

上映版は紙片の中身を映さない(あるいは隠した)ので、4 日間のズレは表面化しないが、馬脚が出る。上映版の逮捕・連行の撮影は夜間(21:20)ではなく、紙片(14:20)のとおりに明るいうちである(**図 10**)。

また逮捕は歯科医の通常の診察日であり(19 節)、10 日 21:20 であれば日曜夜間営業という無理が生じる。

こうした混乱や無理はどのように生じたのか。作者は、ゴルバチョフの書記長就任の報道日にクリスタを自殺させることによってストーリーをその後の東独史激動につなげようとした。このアイディアが映画に強いインパクトをもたらした。

ところが作者は、あり得ないことに報道日を 11 日と誤解し(22 節)、彼女を 11 日に自殺させた。だから彼女の歯科医訪問と逮捕が 10 日になったが、10 日が日曜日であることに気付かず(または気にせず)、紙片に水曜日と書いたことは忘れたか無視した。逮捕場面の撮影はなぜか紙片を思い出して昼間に実施し、OV 文書に夜間と書いたことは忘れたか無視した。不注意さが目につく。

紙片を「月曜日 14:20」に変え 11 日(月)逮捕にすれば、実際の報道日(12 日)の自殺になり、混乱は全く生じない。作者は不注意に加え、新聞の日付さえも間違えたが、間違いを見落とした時代考証担当者の責任も大きい。

23. 壁開放 2 年後にドライマンが自宅全室盗聴を知る

〔1989 年 11 月 9 日夜の壁開放(経緯は青木 1991:第 1 章)のあと、急速に東独の体制転換が進行し 1990 年 10 月 3 日両独統一(西独の東独吸収)となった。以下はその翌年、1991 年のことである。〕

「10 年近く〔7 年〕のちに、〔クリスタが 1984 年 11 月に主役を演じたのと〕同じドライマンの作品〔「愛の諸相」〕が相変わらず演じられるが、新しい演出である」。

「劇場は転換以前より少し華々しく見えるが、それは主としてエレガントな初日観客のせいである。ドライマンは今回は特別仕切り席ではなく 1 階平土間第 5 列中央に坐る。彼の衣服も以前と異なり、アルマーニのスーツである」。

彼の隣に座る「非常に魅力的な 30 代女性」タマラは、「ドライマンが神経質だと気付き、その手を彼の足に置いて、賛嘆と深い愛情のまなざしを彼に送る。彼は彼女にほほえみかけようとするが、難しい」。

「突然ドライマンは舞台の場面に耐えられなくなり、立ち上がり座席の間を縫って外へ出ようとする。彼の席と出口の間に坐る良い服装の多くの人々は〔彼を通すために〕立ち上がらねばならないが、偉大な作家のために喜んでそうする〔上映版では立ち上がらない〕。彼はビロードを張ったドアを抜けて観客席を離れる」(以上ト書き)。

〔その「舞台の場面」は、「彼を大きくて頑丈な車輪がひき殺した」と主役マルタが語る場面であり、ドライマンはクリスタがトラックにはねられたことを想起したのだろう。〕

廊下に出ると、ヘムプフが「高価なイタリア製のダブルを

着て、ぴかぴかの茶色の革靴を履いて」(ト書き)、「思い出が多すぎるか？私にはまさにそうだ。私も出ざるを得なかった」と彼に話しかける。

「ドライマンは麻痺したかのようである」(ト書き)。ヘムプフは、「“愛の諸相”は良い演目だった。私はあなたにすでに当時そう言った」、「私が新しいドイツでどんな職業をしているか、今あなたはきっと質問する。どう？本物の資本主義的ビジネスだ！はっはっは！しかしロシアの自由化の闘士たちとだ」とか、息子が「今 PDS(SED を改称した民主社会主義党)の議員だ」などと語り、ドライマンの近況を聞くなどしたあと、「わが小さな共和国は美しかった。多くの人がようやく今それを理解している」と言う。以上の会話のかなりが上映版ではカットされた。

「会話が終り、ドライマンが行こう」とした時、彼は「質問がまだあることを思い出」し、ヘムプフに「小さな声で」(ト書き)「一体なぜ私は一度も盗聴されなかったのか？」と聞く。

すると「ヘムプフはどこかで誰かが聞いていないかどうかを見るために当たりを見回す。身についた癖はなかなか直らない。それから彼はドライマンにもっと近づく」(ト書き)。

「あなたはすべて監視されていた。我々はあなたについてすべてを知っていた」、「全部に小型盗聴器を付けた。完全なプログラムだ」と彼が教える。「それはあり得ない」と言うドライマンに、「ヘムプフがぐっと近づくので、ドライマンは肉体的に不快になる」(ト書き)。

ヘムプフは「ささやくように」(ト書き)「機会があればいつか電灯スイッチの中を見なさい。我々はあなたについてすべてを知っていた」。「もっと小声で」(ト書き)「あなたが我々のかわいいクリスタの面倒を適切に見ることができなかったことさえ知っていた」と言い、「にやりと笑う」(ト書き)。

「ドライマンはほとんど科学的な関心をもって動物園のゴリラを見るように、彼をじろじろ見る」(ト書き)。そして彼は「あなたのような人たちが本当にかつて 1 つの国を指導していたとは…」と言い置いて、「ヘムプフを立たせたまま通路を出口に向かう」(ト書き)。

彼は「断固とした決心をして、歯のない乞食のわきを通り、今では非常に目もくらむばかりの〔東〕ベルリンの諸通りを通り抜け…自宅に着き、すべてを綿密に注視する。

彼には何も目立たない。そのあと彼はねじ回しを探し、電灯スイッチを全く不器用に分解する。彼はその中をかき回し軽い〔電気〕ショックさえ受けるが、何かを発見する。ケーブルに付いた小型マイクロフォンだ。彼はそのケーブルを引っ張る。ケーブルは壁紙を引き裂き、部屋の隅まで続く。彼がさらに引っ張る。しっくいは崩れ、壁紙は裂ける。

ケーブルは次の電灯スイッチに続く。そこには別のマイクロフォンがあり、それに再びケーブルが付いている等々、すべての部屋を貫いている。トイレにさえ独自の小型盗聴器がある。ドライマンはすべてを引き抜く。

自宅はしっくいの破片と壁紙の切れ端だらけになる。どこもしっくいの雪とひからびたの糊のほこりだらけの層が覆う。至る所に黒いケーブルが垂れ下がっている。ドライマンはじっくり考えるために床に座る」(ト書き)。

〔これほどの工事を映画のシュタジは 20 分でやり終えた(9 節)。しかもバス・トイレを含む全室の壁と壁紙の間に滑り込ませるという難しい配線方法であり、線の膨らみが避けられない。本当にあり得たとは思えないほどである。〕

24. ドライマンが「守護天使」を知り、ひっそり暮らすヴィースラーへの感謝の小説『善き人のソナタ』を出版

翌日ドライマンはシュタジの盗聴記録を見るため「ガウク庁」[28]へ行く。彼は係の女性に「少し待ってください。あなたの場合はあれこれ文書が多くあります」と言われる。

閲覧室にはすでに「半ダース」の人が文書を読んでいる。「スーツを着た年輩の紳士はページをめくる間、ただ静かに頭を振っている。彼の隣の年輩の女性は静かにハンカチで涙をおさえる。オータナティブの服装の 30 代半ばの男性は繰り返し見上げ、深く深呼吸し、そうして再び彼の文書を覗く」(ト書き)。〔彼らは明らかに個人ファイル閲覧で、研究者やマスコミなど、調査目的の閲覧も多い。〕

係の女性が「1 つの小さな文書だけを腕に抱えて来る」。文書の少なさに「別の閲覧者はさげすむように」見るが、続いて「青色のオーバーオール作業着を着た運搬担当者がほぼ満杯の 1 台のカートをドライマンの机の前に転がして来る。その上には 1.5m もの文書がある」(ト書き)。

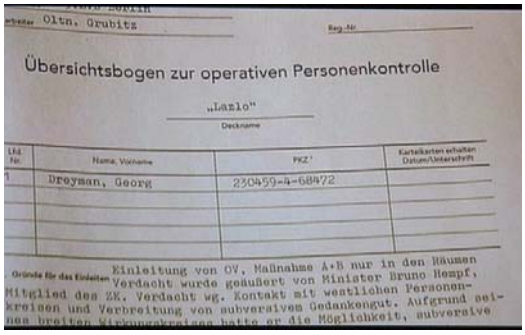
図 16 OV ラツロ文書

(出所)©邦画 DVD

上映版では運搬者は「青色の作業着」ではなく、また 1.5m もの量はない(**図 16**)。係が「年月順に積み上げさせた。最も古い文書がここ一番上で、最新はこちら」と言う。

「最初のファイルケースを取り上げる」と、「ドライマン(暗号名“ラツロ”)に対する“作戦事案ラツロ”を開始する。容疑の情報は大臣ヘムプフによる」とあり、「ドライマンは仰天」し(ト書き)、「ヘムプフが！」と言う

図 17 シュタジ OV ラツロ文書冒頭


Übersichtsbogen zur operativen Personenkontrolle

„Lazlo"

Name, Vorname: Dreyman, Georg

PKZ: 230459-4-68472

Einleitung von OV, Maßnahme A+B nur in den Räumen

Verdacht wurde geäußert von Minister Bruno Hempf, Mitglied des ZK. Verdacht wg. Kontakt mit westlichen Personenkreisen und Verbreitung von subversiven Gedankengut. Aufgrund seines breiten Wirkungskreises hatte er die Möglichkeit, subversive

(出所)©邦画 DVD 版。

ここで上映版には彼が最初に読む OV 文書の画像(**図 17**)が映る。これは脚本にはない。その表題は「作戦的人物コントロール“ラツロ”(暗号名)に関する概要」であり、その下にドライマンの氏名と身分証明書番号がある。本文 1 行目に「OV 導入、室内にのみ措置 A+B」、2-4 行目に「容疑は大臣・中央委員ヘムプフが表明した。西の人物グループとの接触および破壊的思想の流布ゆえの容疑」とある。

〔これらの容疑は映画のどこにもなく架空であるし、そも

[28] 元シュタジ本部(東ベルリン・リヒテンベルク区)に置かれた BStU(旧シュタジ文書保管庁)を指す。当時は初代長官ガウク(Joachim Gauck)の名で呼ばれた。のちに管理・研究施設と文書閲覧室はベルリン中央区リープクネヒト通り(Karl-Liebknecht-Str.)に移った。これらも、BStU の連邦公文書館統合に伴い、再び元シュタジ本部へ移る予定。

そも「作戦的人物コントロール」(OPK)という表題の文書の冒頭に「OV 導入」とあるのはおかしい。OV 開始ならOV が作戦名になる。容疑不明でもあり得る OPK と異なり OV は明白な容疑を必要とする[29]。ヘムプフからの実際の情報はドライマン宅に「ハウザーなどのごろつきが数人来る」というだけであり(6 節)、しかもハウザーはすでに OV の対象であり、その監視は同席する IM のシュヴァルバーを使い得るが、その席ではドライマンはシュヴァルバーを擁護するから、容疑は発見され得ない。例えば OV 対象のハウザーとの親しさを理由とする OPK を開始し明白な容疑が明らかになれば、はじめて OV 開始の可能性が生じる。

その際下記 OV 文書にある西独紙 FAZ の無許可定期購読が OV の理由になるかどうかも疑問である。1980 年代には CSCE 対応のため外貨ホテル(例えばメトロポール)では FAZ が購入可能であった。外貨での販売だが、ドライマンの作品は「西で読まれている」(5 節)のだから、彼には外貨収入がある上、ホーネッカー夫人の友人だから FAZ 購読だけでの立件は難しく、立件すれば CSCE 違反の国際的批判にさらされる。ユーゴスラビアではすでに 1981 年にキオスクで米誌 Play Boy が売られているのを見たが、その後も東独は西側紙誌の自国通貨販売をしなかった。〕

ドライマンは OV ファイルの中身を次々と見る。彼は「各ページの末尾に繰り返し「HGW XX/7 3:40、HGW XX/7 23:00」などとあることに気付く。

〔Plenzdorf(1995)収録の多数の第 XX/7 部文書の末尾は姓と階級(大尉ヴィースラーであれば Wiesler Hauptmann)であり、HGW XX/7 のような地位・名・姓・所属の略語はない。ミールケの命令文書も姓(サイン)と上級大将である。いずれも担当職務単位や日付は文頭にある。〕

以下が OV 日報の内容であり、脚本も上映版も同様である。ウドとグルビッツによる以外はヴィースラーによる:

・「あるクーリエによって日々 FAZ〔西独紙〕が当局の許可なしにラツロ宅に配達されている」が、監視露見回避のため「邪魔しないでおくことを提案する」。〔9 節関連〕

・「イェルスカがラツロにブレヒトの詩を読み上げる。反革命的な内容ゆえ西での出版と推測」。〔9 節関連〕

・「ラツロと CMS(=クリスタ)が〔誕生日〕プレゼントの包みを開ける。そのあと性交と推測」〔10 節関連〕

・「ラツロをハウザーとその友人(非社会主義経済地域(NSW)から?)が訪問。彼らの会話は政治的内容だと思われる。彼らは何かを書くつもりである」(ウド)。NSW の訪問者は「西ベルリンからのハウザーおじ〔実はヘッセンシュタイン〕である。彼にハウザーとラツロが DDR 建国 40 周年記念日のために書くつもりの脚本を語った」。〔17 節関連〕

・「同じ日付で」(ト書き)「OV ラツロを今日から〔縮小して〕単独で継続することを許可されたい。理由:ラツロに対する容疑事実があまりにわずかしかない」という HGW の申請と、そこへの「グルビッツの署名とスタンプで“許可”。我々は記念日脚本の計画についてのより詳しい報告を期待する。目次など」というグルビッツの記入。

〔「期待」への回答として〕「第 1 幕の内容:レーニンは不断の危険の中にいる。外からの圧力の強まりにもかかわらず彼はその革命の諸計画を変えない…(さらにもう少し)レーニンは非常に疲労困憊である」。〔17 節関連〕

「ドライマンは〔これらの虚構報告によって〕彼がどれほど守られたかを理解することができない」(ト書き)。

・「一番下にある最後のファイルケース」を見て、「クリスタの言明を知る」(ト書き):「ゲオルク・ドライマンがシュピーゲルの記事の作者です。…私は事情が解明されるまで MfS の IM として働くことを確約する…選択された暗号名は“マルタ”…」(グルビッツ)。

・「クリスタ・マリア・ジーラントは 3 月 10 日 21:20 に大臣ヘムプフの〔紙片による〕情報で麻薬乱用により逮捕され、彼女がラツロの証拠品の隠し場所を打ち明け、IM 義務づけ(暗号名「マルタ」)に署名したのち、3 月 11 日 13:50 に釈放された」(グルビッツ)。〔19・20・21 節関連〕

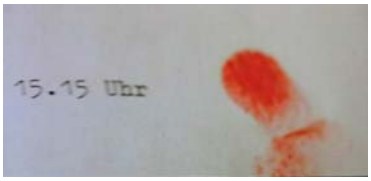
・「1985 年 3 月 11 日の家宅捜索の成果がなかったことと IM マルタの事故死により OV ラツロは中止される」、「添付:HGW による最後の日報」〔下記〕、「HGW の昇進停止は本日」発効、「M 部に配置換え」(グルビッツ)。

・OV ラツロの「最後の日報」:〔ヴィースラーがホーエンシェーンハウゼン拘置所から先着して〕「10:50 ラツロの家の前のコントロール部署の活動開始。13:50 ラツロが、彼の記念日脚本の共著者ハウザーとの会合から帰宅。15:10 頃 IM マルタがホーエンシェーンハウゼンから直接彼のところに来る。家宅捜索(結果報告あり)がなされる。OV ラツロ終了。HGW 15:15」。〔21 節関連〕〔日報は以上。〕

「最後の日報」は「手書きで、誰かがそれを 2 回折っていた」(ト書き)。これを見てドライマンは「突然あることを発見する。彼はそれを殆ど信じ得ない。…赤インクの書き付け跡!こうしてドライマンにはすべてが明らかになる:彼の守護天使は“彼の”シュタジの男だった」(ト書き)。

〔彼も赤い指跡を付けた(**図 8**)ことを思い出しただろう。たぶんそのため上映版は書き付け跡を指跡に、手書きを黒インクのタイプに変えた(**図 18**)。しかしこの日報の作成は彼がクリスタ帰宅を路上の車内から見た 5 分後(15:15)であり、すぐグルビッツに手渡される(21 節)。だからタイプライターのある屋根裏へ行く時間はなく、彼も屋根裏に「いなかった」と言う(22 節)。だからタイプライター使用は不可能であり、車内での手書きを変更すべきではなかった。〕

図 18 OV ラツロ最後の日報の末尾



(注)「最後の日報」の赤インクの指跡。文字は作成時刻、その左に「HGW XX/7」とある。(出所)©邦画 DVD。

ドライマンは「飛び上がって、閲覧室監視係[30]のところに走り」(ト書き)、「HGW XX/7 は誰?」と聞く。

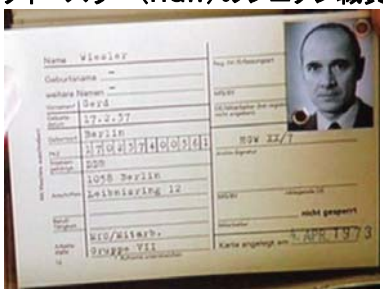
上映版ではその場で閲覧係がカードボックスを繰って答えるが、脚本ではアーカイブ室へ行き「文書保管係」が

[29] シュタジの規定(1976 年制定)によれば、OV の目的は「1 つまたは幾つかの政治犯罪ないし 1 つの一般的犯罪行為の明白な容疑の立証のために必要な証拠を、攻撃的かつ集中的で、犯罪構成要因に関連した処理によってもたらすこと」である。その際必ず「作成計画」(Operativplan)、すなわち「OV 処理の合理的、効率的かつ集中的な指導と実行のための基本的かつ義務的なドキュメント」が作成されていなければならない(MfS AGM 198:339)。

[30] 貴重ないしプライバシー文書閲覧ゆえ BStU 閲覧室には監視係兼相談係が上映版と同じ位置(前方左端)に坐る。

ボックス内の職員カードを「Waidmann, Weick, Weisendorn, Werner ...」と順にめくって答える（ト書き）。脚本では Wiesler（ヴィースラー）にたどり着かないまま、次の場面に移るが、上映版ではそのカードが映される（**図 19**）。

図 19 ヴィースラー（HGW）のシュタジ職員カード



（出所）©邦画 DVD 版。

〔カードボックスは本名の姓の順に並ぶ。ドライマンは「HGW は誰」と質問したのに閲覧係がすぐ W の最初から探す。こうした略称使用は慣例ではないと思うが、閲覧係が末尾を姓の頭文字と知っていたことになる。

このカードによりドライマンが HGW の本名や住所などだけではなく顔写真も知ったので、下記の場面が可能になる。クリスタ自殺の場面（21 節）でも彼をちょっと見かけたが、そこでは通りがかりの人でしかなかった。直後にグルビッツがヴィースラーの車に同乗するが、クリスタを抱き続けるドライマンがそれを見たという記述も映像もない。〕

後日の昼間、広い通りカール・マルクス・アレーをタクシーで通りかかったドライマンが、チラシのポスティングをするヴィースラーの姿を見つける。ヴィースラーは「シュタジ将校としての仕事をしていた時と同じ細心の注意で」建物ごとの郵便受けにそれを入れている（ト書き）（**図 2**）

ドライマンは彼に話しかけようとタクシーを止めて降りるが、「話しかけることができない」。「物質的な力の差（そしてそのことが新ドイツではどんなに大きな役割を果たしていることか！）は、同じ人間レベルでなされねばならない出会いにとってあまりに大きすぎる。彼はなお少したたずみ、ヴィースラーを注視してからタクシーに戻る」（ト書き）。

「フーフェラント通り[31]へ戻って」と言う。上映版と異なり字幕は通り名を省略し「戻って」のみであるため、想定されたドライマン宅住所が分からない。

その 2 年後「ヴィースラーは相変わらずチラシ投函に回っている」。一旦「ある書店〔カール・マルクス書店[32]〕の現代的なショーウィンドウを通り過ぎる」（**図 20**）が、「目の端で」何かを見たと感じる。それは「店員がちょうど」掛けていた「ドライマンの写真とその下に“偉大な劇作家の最初の小説”とある」ポスターで、「タイトルには“善き人のソナタ”とある」。「彼は戻り、驚き、店に入る」（ト書き）。

「彼はページをめくる。空白ページがあり、次のページには 5 つの単語だけがある：“HGW XX/7 gewidmet, in Dankbarkeit.”（感謝を込めて HGW XX/7 に捧げる）。ヴィースラーはショックを受け再び本を閉じる」（ト書き）。

本を買おうとすると、レジの店員が「贈り物の包みにしますか？」と聞き、ヴィースラーは「いや…それは私のためです」と答えて、映画が終わる。

〔「私のため」はむろん、贈り物ではないことと「私のために書かれた本」の両方の意味に作者は書いただろう。〕

図 20 ドライマンの新著『善き人のソナタ』のポスターの前を、チラシを抱えて通り過ぎるヴィースラー

（出所）©邦画 DVD。

（補注 a）シュタジ法科大学（Juristische Hochschule des MfS Potsdam、略称 JHS）

MfS（国家保安省=シュタジ）付属法科大学は、ポツダムのサンスーシ宮殿に近いアイヒェ（Eiche）にあった。1951 年設立、1965 年大学に昇格、マルクス・レーニン主義、政治的・作戦的専門分野、法学という各課程のほか、「友好諸国保安幹部」教育施設もあり（映画でもキューバからの女性留学生がいる）、ベルリン近郊にはシュタジ偵察本部（HV A、東独スパイの元締め）の教育課程もあった。

通学 4 年制と通信教育 5.5 年制があり（Förster 1997: 16 によると 1984 年以後通信制も 4 年）、1988 年在学 1300 人、1989 年までに法学士 4300 人を送り出す。法科大学だが、その教育は「秘密情報機関の理論と実践」に 40%、「法学教育」は 20%のみであり、実習の重点は IM の扱いと IM との会合報告の作成にあった。

1990 年 1 月廃止された。その教育内容ゆえに両独統一条約は JHS 修了に法律家としての職業資格を認めなかったが、〔肩書き社会ドイツでは日常的に重要な〕教授資格や学士・博士号は有効とした。

JHS が与えた博士号は 400 人余、そのうち多くはシュタジ幹部であり、本部の局長や中央グループ長および県支部長の 41%が JHS 博士であった。博士論文の内容は「イデオロギー的」で、「MfS の思考様式と活動様式」が多く、学士論文は「より実践的」であった[33]。名誉法学博士は KGB の元米国責任者（1969 年）と、ブラント西独首相の側近として有名な東独スパイ・ギョーム（Günter Guillaume、1985 年）のみであった。（以上特記以外は Engelmann 2016:182f.）。

映画ではグルビッツ（第 XX/7 部長）が同大学教授として博士論文を審査する。

---

31 Hufelandstraße で、フリードリッヒスハイン公園の北側にある。ドライマン宅の野外撮影がここであった（de.wikipedia 2020、典拠は制作メモやドイツ語 DVD でのドナースマークのコメント）。脚本はドライマンの住所もここに想定したことになる。

32 Karl-Marx-Buchhandlung。その後と写真が以下にある：http://www.newsdigest.de/newsde/regions/reporter/berlin/6944-1002/

33 この映画の設定時期に近い学士論文としては、ZKG（中央調整グループ）少佐ヴァルツェル（ReinerWalzel）の学士論文「BRD と西ベルリンへの移住を達成する試みおよびそれと関連する敵対的・否定的行動の阻止と抑止のための重要な政治的・作戦的な過程と措置の中央指導の当面の必要」（1986 年 1 月 15 日，BStU JHS 20410）を利用したことがある（青木 2014:6.3 節）。この長い表題もその実践的性格を明示した。

(補注 b) シュタジの「軍旗宣誓」と標語「党の盾と剣」

東独の国家保安省(MfS=シュタジ)職員は「軍旗宣誓」(Fahneneid)をしなければならなかった。その内容は:

「私は、わが祖国ドイツ民主共和国に常に忠実に奉仕し、労働者農民政府の命令により祖国をいかなる敵からも守ることを誓う。

私は、国家保安省職員として、国家人民軍および他のドイツ民主共和国武装機関、ソ連および我々と同盟する社会主義諸国の軍や防護・保安機関とともに、わが生命を賭して社会主義の敵と戦い、国家保安の保証のために私に与えられる任務を遂行することを誓う。

私は、国家保安省の誠実かつ勇敢で注意深い職員であること、無条件に上司に服従すること、命令を不退転の決意で遂行すること、軍事的および国家的秘密を常に厳守し保護することを誓う。

私は、私の任務の遂行のための知識と能力を獲得すること、職務規程を守ること、いつでもどこでもわが共和国と国家保安省の名誉を擁護することを誓う。

もしも私がこの私の厳粛な軍旗宣誓に違反すれば、わが共和国の法律の厳しい刑罰と勤労人民の軽蔑を甘受する」。(以上。原文:Gill 1991:27)

この宣誓に忠実なヴィースラーは国家および社会主義の敵に対して容赦しないと同時に、国家と国家保安省の名誉を傷つける上司や幹部も許せない。そういう上司への「無条件服従」は彼には困難であった。

同省職員は「義務」(Verpflichtung)(同前:28ff.)という文書への署名も求めら、その冒頭は次のようである:

「この義務の提出に当たり私は、国家保安省が、ドイツ民主共和国閣僚会議の信頼でき、ドイツ社会主義統一党に忠実に献身する機関であり、この党の委託でわが労働者農民権力の強化と平和の確保のための重要な政治的・作戦的諸課題を実行すること…を自覚している」。

このようにシュタジは国家の機関ではあるが、実態は「ドイツ社会主義統一党」(SED)に「忠実に献身」する機関であり、他の共産圏同様に党の私物であった。続いて「私は以下の義務を負う」として a 項～k 項が並んでいる。

シュタジは自らを「党の盾と剣」(Schild und Schwert der Partei)と標榜した。これはソ連 KGB にならった国家保安省(MfS)の自己規定ないし標語であり、同省の以下の「3 つの特徴」を示す[34]: (1)国家保安省は SED の一機関であり、同党に無条件の忠誠を尽くす。同省は独自の政治的関心を追求してはならない。 (2) 盾としての国家保安省は SED を、その支配へのあり得るまたは実際のあらゆる攻撃から守らねばならない。 (3) 剣としての国家保安省は、SED とその政治的目標の邪魔になるすべてを攻撃的に破壊しなければならない。

この標語は 1953-1957 年の国家保安相ヴォルヴェーバー(Ernst Wollweber)が、SED 第 4 回党大会(1954 年)において、国家保安省は「鋭い剣」であり、「それによってわが党が敵を容赦なく打ち負かす」と言明したことに由来する(Fricke 1991:11,83)。

ミールケ(Erich Mielke)は「繰り返し」、同省は「常に党と労働者農民権力の信頼できる盾かつ鋭い剣であることを証明するだろう」と言明した(同前:12)。彼は 1957 年から 1989 年 11 月 6 日まで 30 年以上国家保安相であった。

ホーネッカーは、ウルブリヒト時代の保安担当書記として、シュタジ職員にマルクス・レーニン主義学習と「党の決定を創造的に適用すること、常に根本的かつ綿密にわが党による階級闘争における状況評価に基づき、ふさわしい結論を出すこと」を要求した(同前 12)。

但しシュタジのエンブレム(**図 6**)は「党の盾と剣」ではなく、国家の盾と銃剣であることを表現した。

(補注 c) 小型タイプライター製造の東独国営グロマ社

映画では字体による寄稿者の露見を避けるため、シュピーゲル誌編集委員ヘッセンシュタインが、お祝いの贈り物(**図 21**)のうちの菓子箱の二重底に隠して、小型タイプライター(**図 22**)をドライマンに持参する(17 節)。

図 21 シュピーゲル誌からのお祝いの贈り物

図 22 上図の右上隅ケーキ箱の二重底にあるハチドリ

(出所)図 21・図 22 ともに©邦画 DVD。

ヘッセンシュタインは国境検問所を無事通過してドライマンの原稿を持ち帰るが、同誌編集部内の IM(密告者)がその「青焼き」をシュタジに届けた。それをシュタジの字体専門家が分析して、寄稿に使われたタイプライターを解明した(18 節):

> このタイプライターは、「輸出限定の国産最新型旅行用タイプライターであり、ほぼ確実にグロマ事務機器人民所有企業(VEB Groma Büromaschinen)のモデル「ハチドリ」(Kolibri)」であり、その利用は「わが共和国ではどこにも把握されていない」。縦横各 19.5cm、厚さ 9cm と小さい。

「グロマ(Groma)の歴史」[35]によれば、Grosser Markersdorf(グロッサー・マーカースドルフ)に由来する商標で、Grosser は 19 世紀末の創業者の姓、Markersdorf は所在地名(東独時代はライプチッヒ県)である。戦前は繊維機械やタイプライターなどから兵器まで製造した。

戦争直後はソ連への賠償としての繊維機械やタイプライターの製造によって復活し、1950 年に国有化された。その社名は当初 Mechanik Groma VEB Markersdorf/Chemnitztal(グロマ機械装置人民所有企業マーカースドルフ・ケムニッツタール)、その後 VEB GROMA Büro-

[34] https://www.jugendopposition.de/lexikon/sachbegriffe/148616/

[35] https://saechsischeschreibmaschinen.com/groma/

maschinen Markersdorf/ Chemni-tztal（グロマ事務機器人民所有企業マーカースドルフ・ケムニッツタール）となった。両独統一後破産し、1992 年資産競売となった。

略語

シュタジ = Stasi、東独国家保安省（MfS）またはその職員の略称。東独時代にはシュタージ（Staasi）とも略称された

チェキスト = Tschekist、ソ連初期の「反革命・サボタージュ取締全ロシア非常委員会」（略称チェカーЧека）職員に由来し、シュタジもその後継を誇りとし取り締りに超法規措置を躊躇せず、長年の国家保安相ミールケはしばしば「チェキストとして」の奮闘を命じた

東独 = ドイツのソ連占領地区（（1945-1949 年））・ドイツ民主共和国（1949-1990 年）の略称

東独統計年鑑 = 国家中央統計局 Staatliche Zentralverwaltung für Statistik (1990 年 3 月 Statistisches Amt der DDR と改称)編の *Statistisches Jahrbuch der DDR*.

ARD = Arbeitsgemeinschaft der öffentlich-rechtlichen Rundfunkanstalten der Bundesrepublik Deutschland、ドイツ連邦共和国公営放送連合（西独・現ドイツ公共放送第 1）

BdL = Büro der Leitung、管理ビューロー（東独国家保安相直属の総務部門）

BND = Bundesnachrichtendienst、連邦情報局（西独、現ドイツの情報機関、現在の本拠は旧東ベルリンのウルブリヒト・スタジアム跡にある）

bpb = Bundeszentrale für politische Bildung、連邦政治教育センター（西独・統一ドイツ）

BStU = Bundesbeauftragte für die Unterlagen des Staatssicherheitsdienstes der ehemaligen Deutschen Demokratischen Republik、旧ドイツ民主共和国保安機関文書連邦保管庁

DDR = Deutsche Demokratische Republik、ドイツ民主共和国（東独）の略語

FAZ = Frankfurter Allgemeine Zeitung（西独・現ドイツ新聞）

IM = Inoffizieller Mitarbeiter、非公式協力者（シュタジに協力した密告者）

MfS = Ministerium für Staatssicherheit、国家保安省（東独の秘密警察+対外諜報機関、通称 Stasi（シュタジ））

ND = Neues Deutschland（東独支配党 SED 中央機関紙、現在は有限会社）

NSW = Nichtsozialistisches Wirtschaftsgebiet、非社会主義経済地域

OibE = Offizier im besonderen Einsatz、特別投入将校（シュタジの常勤職員でありながらそれを秘匿して国家機構や諸社会分野に出向する将校。KoKo を率いて東独の外貨調達を担ったシュタジ中佐シャルク（Alexander Schalck-Golodkowski）が最も有名な事例である）

OPK = Operative Personenkontrolle、作戦的人物コントロール（シュタジによる秘密裏の監視・盗聴など）

OTS = Operativ-technischer Sektor、作戦的技術センター（任務は当初、作戦的・技術的手段の開発の第 31・32・33 部および証明書等の文書の調達・作成の第 35 部の「指導・調整」、のちに研究・開発・設計や敵の技術の調査・分析が加わった（https://www.bstu.de/mfs-lexikon/detail/abteilung-operativ-technischer-sektor-ots/）。Donnersmarck（2007:214）には「新しい盗聴器の開発から外国当局の印章の偽造までの MfS のすべての技術的案件を担当する独立の部」とある。シュタジ本部の「独立の部」は局に属さず大臣または大臣代理が直轄（OTS は後者）。

OV = Operativer Vorgang、作戦事案（明白な容疑のある対象へのシュタジの秘密作戦）

PDS = Partei des Demokratischen Sozialismus、民主社会主義党（1989 年 12 月 SED を改革・改称）

SED = Sozialistische Einheitspartei Deutschlands、ドイツ社会主義統一党（東独、支配党、1989 年 12 月 PDS に改称しドイツ統一後も存続、2007 年から左翼党（Die Linke）に）

Stasi = シュタジ。東独時代には Staasi（シュタージ）とも言う

ZDF = Zweites Deutsches Fernsehen、ドイツ第 2 テレビ放送（西独・現ドイツの第 2 公共テレビ）

ZKG = Zentrale Koordinierungsgruppe、中央調整グループ（シュタジ本部の逃亡・出国運動対策の中枢で 1975 年設置）

引用文献

（注）本文記載の URL や Wikimedia Commons、新聞記事を除く。URL は本稿掲載時有効。

青木國彦（1991）『壁を開いたのは誰か』化学工業日報社

-----（2005）「プラハの春」の東独波及とポーランドからチェコへの連帯クーリエ：ヘルシンキ宣言からベルリンの壁開放へ、『カオスとロゴス』26（http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/gsk.html 所収）

-----（2009）東独出国運動の発生：逃亡の時は過ぎ，闘うべき時が来た、『研究年報経済学』（東北大学）70-2（上記 URL 所収）

-----（2014）東独イェーナの白いサークルによる沈黙円陣（1983 年）：CSCE マドリッド会議閉幕を前に、『東京国際大学論叢経済学部編』50（上記 URL 所収）

-----（2018）元東独政治犯ガルテンシュレーの冒険：東独国境自動射撃装置 SM -70 奪取 の意味と限界、『社会主義体制史研究』1（http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/hsss.htm 所収）

-----（2019）1973 年第 10 回世界青年学生祭典（東ベルリン）に見る自由化百景：東独ホーネッカー政権初期の「自由化」について (1)、『社会主義体制史研究』10（上記 URL 所収）

-----（2020）東独文化政策の規制と緩和（1963-1976 年）：東独ホーネッカー政権初期の「自由化」について (2) 、『社会主義体制史研究』12（上記 URL 所収）

-----（2020a）アンソロジー「ベルリン物語」をめぐる東独作家たちの野望とシュタジの陰謀：東独ホーネッカー政権初期の自由化について(3)、『社会主義体制史研究』13（上記 URL 所収）

道家忠道他訳編（1980）『現代ドイツ短編集：ドイツ民主共和国の作家たち』三修社

山田晟（1982）『ドイツ民主共和国法概説』下、東京大学出版会

Auerbach, Thomas; M. Braun u.a. (2008) *Hauptabteilung XX: Staatsapparat, Blockparteien, Kirchen, Kultur, »politi-scher Untergrund«* (MfS-Handbuch), BStU.

Bahro, Rudolf (1990) Die Alternative, Bund-Verlag.

bpb (Hg.) (2006) *Filmheft: Das Leben der Anderen*, in: https://www.bpb.de/system/files/pdf/NSUEAK.pdf

Buena Vista International GMBH (2007) *Presseheft: Das Leben der anderen*, in: https://web.archive.org/web/20141105054454/http://www.just-publicity.de/assets/pdf/DLDA_presseheft.pdf または https://www.yumpu.com/de/document/read/13505242/pressehef t-das-leben-der-anderen-just-publicity
〔出版年は内容から推測。この Presseheft はその後も刊行され、第 8 号が Lindenberger（2008）に引用されている。〕

Bürgerkomitee Leipzig (Hg.) (1991) *Stasi intern: Macht und Banalität*, Forum Verlag Leipzig

de.wikipedia (zuletzt am 25. April 2020 um 23:48 Uhr), Das Leben der Anderen, in: https://de.wikipedia.org/wiki/Das_Leben_der_Anderen

Donnersmarck, Florian Henckel von (2007) *Das Leben der anderen: Filmbuch*, Suhrkamp.

Engelmann, Roger u.a. (Hg., 2016) *Das MS-Lexikon: Begriffe, Personen und Strukturen der Staatssicherheit der DDR*, 3., aktualisierte Auflage, Ch. Links

Finger, Evelyn (26.02.2016) "Das Leben der Anderen": Die Bekehrung, in: *Die Zeit*, Nr.13.

Förster, Günter (1997) *Die Dissertationen an der Juristischen Hochschule des MfS*, BStU.

Fricke, Karl Wilhelm (1991) *MfS intern*, Wissenschaft und Politik.

Gill, David; U. Schröter (1991) *Das Ministerium für Staats-sicherheit: Anatomie des Mielke-Imperiums*, Rowohlt.

Gorbachev, M./ Z. Mlynar (2002) *Conversations with Gorbachev on perestroika, the Prague Spring, and the crossroads of socialism*, Columbia U. Pr.

Holzweißig, Gunter (1989) *Massenmedien in der DDR*, Zweite, völlig überarbeitete Auflage, Gebr. Holzapfel.

Jäckel, H.(Hrsg.) (1980) *Ein Marxist in der DDR*, Piper.

Labrenz-Weiss, Hanna (1998) *Die Hauptabteilung II: Spionageabwehr* (MfS-Handbuch), BStU.

Lindenberger, Thomas (2008) The Scriptwriter's Historical Creativity in The Lives of Others, in: *German Studies Review* 31/3.

MfS AGM 198, Richtlinie 1/76 zur Bearbeitung Operativer Vorgänge, BStU.

Müller-Enbergs, Helmut (2008) *Die inoffiziellen Mitarbeiter* (MfS-Handbuch), BStU.

-----, u.a. (Hg.) (2010) *Wer war wer in der DDR?*, 2 Bde., 5. aktualisierte und erweiterte Neuausgabe, Ch. Links.

Plenzdorf, Ulrich; K. Schlesinger; M. Stade (1995) *Berliner Geschichten, »Operativer Schwerpunkt Selbstverlag«: Eine Autoren-Anthologie: wie sie entstand und von der Stasi verhindert wurde*, Suhrkamp.

Young, Sarah J (2014) 'The Death of Others': the myth and reality of suicide in the German Democratic Republic, in: *SSEES Research blog*. (https://blogs.ucl.ac.uk/ssees/2014/11/27/the-death-of-others-the-myth-and-reality-of-suicide-in-the-german-democratic-republic/)

―― 『社会主義体制史研究』既刊一覧 ――

in: http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/hsss.htm

No. 13 (June 2020)
青木國彦
アンソロジー「ベルリン物語」をめぐる東独作家たちの野望とシュタジの陰謀:東独ホーネッカー政権初期の自由化について(3)
Kunihiko AOKI
Die heimliche Kämpfe um die Anthologie »Berliner Geschichten« in der DDR: Über Honeckers „Liberalisierung" (1971-75) in der DDR (3)

No. 12 (Feb. 2020)
青木國彦
東独文化政策の規制と緩和(1963-1976 年)ー東独ホーネッカー政権初期の「自由化」について (2)ー
Kunihiko AOKI
Die schwankende Kulturpolitik in der DDR (1963-76): Über Honeckers „Liberalisierung" (1971-75) in der DDR (2)

No. 11 (Nov. 2019)
Yoji Koyama
Emigration from Lithuania and Its Depopulation

No. 10 (Sep. 2019)
青木國彦
1973 年第 10 回世界青年学生祭典(東ベルリン)に見る自由化百景ー東独ホーネッカー政権初期の「自由化」について (1)ー
Kunihiko AOKI
Hundert Ansichten der X. Weltfestspiele der Jugend (Ostberlin, 1973): Über Honeckers „Liberalisierung " (1971-75) in der DDR (1)

No. 9 (Aug. 2019)
青木國彦
東独通貨マルクの対外関係: 最低交換義務、公式・ヤミレート、末期状況
Kunihiko AOKI
Auswärtige Beziehungen der DDR-Mark: Das Mindestumtausch, die Kurse und die letzte Zustände

No. 8 (June 2019)
青木國彦
東独通貨マルクのヤミレートの暴落(1987年1月)
Kunihiko AOKI
Der inoffizielle Kurs der DDR-Mark purzelte dramatisch (Jan. 1987)

No. 7 (May 2019)
Yoji Koyama
Emigration from Romania and Its Depopulation

No. 6 (Jan. 2019)
青木國彦
ケネディのベルリン演説(1963年6月)再考: ブラント東方政策との比較
Kunihiko AOKI
A Rethinking of J. F. Kennedy's Address at the West Berlin Town Hall (June 26, 1963): In comparison to the "New Ostpolitik" of Willy Brand

No. 5 (Dec. 2018)
青木國彦
東独国境の射撃停止命令(1989年4月3日)の混乱とハンガリー国境フェンス撤去:ベルリンの壁ショッセー通り検問所事件の支配党への衝撃
Kunihiko AOKI
Die ungeordnete „Aufhebung des Schußbefehls" in der DDR (03.04.1989): Die SED war schockiert über den Fall „Grenz-übergangsstelle Chausseestraße" und den Abbau von Grenzsicherungsanlagen in Ungarn

No. 4 (Nov. 2018)
Yoji Koyama
Migration from New EU Member States in Central and Eastern Europe and Their Depopulation: Case of Bulgaria

No. 3 (Nov. 2018)
青木國彦
ベルリンの壁最後の射殺ギュフロイ事件(1989年2月)の詳細とその意味:「1988年12月にホーネッカーが射撃命令を制限」(少尉ハンフ法廷証言)の真偽
Kunihiko AOKI
Was war der Fall Chris Gueffroy in der DDR: Eine Überpüfung der Aussage des Unterleutnant Alexander Hanfs „Honecker habe im Dezember 1988 den Schießbefehl eingeschränkt"

No. 2 (Aug. 2018)
青木國彦
CSCE(全欧安保協力会議)ウィーン会議へのホーネッカーとシュタジの対応:東独の新外国旅行政令と「壁は 100 年存続」発言
Kunihiko AOKI
Die Reaktion der DDR-Führung gegen Abschliessendes Dokument des Wiener Treffens der KSZE

No. 1 (May 2018)
青木國彦
元東独政治犯ガルテンシュレーガーの冒険:東独国境自動射撃装置 SM-70 奪取の意味と限界
Kunihiko AOKI
Abenteuer des ehemalige politische Häftlings der DDR Michael Gartenschläger: Warum und wofür montierte er die Selbstschußanlagen SM-70 ab?